

落合直文
小中村義象 合著

中等
教育
日本文典
全

明治廿四年四月 第三版

65532

日本文典

緒言

古來我國文典は關したる、先輩の著書甚た多し。されど、その著述の體裁等はいたりて、甚た煩雜なるものとして、一方はきゝめて密は、一方はきゝめて疎なるもの、またその分類はいたりても、聲音は關するもの、言語は關するもの、文章は關するもの、悉く混同散亂して、専門の學者はあらざれば、解しうることを容易ならず。反言すれば、在來の文典書は、多くの學者間には用らるべきものとして、普通應用を目的として著されたるもの、をくなし。この著、普く先輩の著書を收拾し、撰擇分配、つとめて、その弊を脱せむことを目的とせり。

されど、その不完全なること、著者みづから知れり。今後、この學者の大い起り、完全なる文典書の世に出てむこと、著者の切に希望して止まざるところなり。

精細なる大文典の編纂ありて後、これが簡略なる小文典も出つべきなり。著者、大文典編纂の志望なきはあらず。然るに、今その順序をみたし、この書を出版せるに、全く時の急は應せむとてなり。さて、疎漏誤謬のところも甚だ多るべし。その再版を期して、正すべきなり。

我國の言語は、雅俗の別ありて、これが規則も、一概に論むべからざるものあり。この書は、雅言を主として、かけるものなり。故に訛言鄙言等、すべて、雅言に直して、この規則に照し、以てその正否を

あつべきなり。

書中各種の名稱等、或は妥當ならざるものもあらむ、されど、みたりよこをあらためざるに、おのづから慣用の歴史ありて、なか／＼は讀者を惑はしめむことを恐れてなり。

近來、西洋文典に附會する文典學者多し。我國の言語と、西洋各國の言語と、おのづからその成立上、差別あり。決して同一に論すべきものゝあらず。この書、別は新奇の説なきも、その意こゝにあるなり。

書中例證は、さしめて、解し易きを欲したれば、おもは神皇正統記の文を引けり。その、正統記は、現今行はるゝ假名交文に比して、大なる差なく、かつ語格も正しければなり。されど、文章の組立は關したる例證、また古言の例證等、おほく歌とれり。その古言のごとき、

歌は存したるものおほく、かつ歌の文章は比して、變化おほく、文章の組立を知るは、甚だ便利なればなり。

はじめは、語學系統をかゝげたるは、この學のよりて來たることを示し、合せて古人の苦心を知らしめ、またあわせて、この文典も、皆先輩の賜なるよしを、知らしめむとてなり、卷末は假名遣、字音假名遣、送假名、句讀、の諸法を附記したるは、文法とひとしく、文作るものゝ心得をかざるべからざるものなればなり。

先年著者か、堀秀成翁にむかひて語格をつきて、質議せしものあり。初學者の參考はもと、こも卷末はかゝけたり。

物集高見君の初學日本文典、佐藤誠實君の語學指南、黒川真頼君の詞の葉、大槻文彦君の文典、と、チャンパーレン君の小文典等、いつ

れも長短精粗こそあれ、共に文典を講究するものゝ、必む一讀をべき書なり。

この書編纂はつき、傍はありて、始終助力せられしは、星野三郎氏なり。氏、年いまだ若しといへとも、文典は熱心なる、實は感すべきものあり。記してその勞を謝す。

紀元二千五百五十年十一月天長賀節の日

菊花かくとしき書齋のもとにて

落合直文
識
小中村義象

語學系統

助辭の起原

萬葉集十九詠霍公歌二首の註は毛能波三箇辭闕之、また毛能波氏爾乎六箇辭闕之とあり。和訓栞は是所謂て此をはの原始なるべしといへり。闕之とあるは、この辭を除きてよめるよて、古今集は同じ文字なき歌なといふ類なり。六箇辭を、他の詞と區別せしを見れば、この頃、助辭の説ありしこと明なり。

點圖

漢文を讀まんだめは、文字は朱點をさして、其法を知らせたるものあり。これをヲコト點といふ。中右記寛治元年十二月廿四日御書始の議は三點圖のことを載せたり。長秋記皇令宮職權太夫源師時日記天永二年十二月十

四日御書始鳥羽院帝の式は、置點圖草紙の註は、てにをは點の名目見えたり。紀傳經傳その他東大寺點及喜多院點等數種あり。今その點を検するは、たりたるけりけるありあるぬぬる等の如き、語尾の變化あり。さて、すべての助辭は規則あることも、この頃博士等の發見してありしこと明なり

悦目抄

てにをはを以て、助辭の名目とせり。又、たすけ字、やすめ字等を説明せり。左衛門佐藤原基俊の著なり。基俊は、白川堀川鳥羽崇徳四帝の時代の人なり。

二條家秘傳書

助辭法及係結法等を説明せり。作者時代共は詳ならむ。元龜元年の

興書あり

無言抄

連歌の書なれども、そとらきの名目あり。かつ、そとらき詞をも一二示せり。僧應其のものしたるものにて、天正七八年の著なり。

和字正濫抄

和字正濫要略

右は僧契沖の著なり。和字正濫要略は、和字正濫抄を補へるものなり。共は假名遣の書なれども、活語及居體言の法をも示せり。元禄年間の著なり。

和字通例書

假名遣の書なれども、活語法及居體言等の法をも示せり。橋成員の

ものしたるものにて、元禄八年の著なり。

和歌八重垣

歌の書なれども、助辭法及係結等のことを示せり。有賀長伯のものしたるものにて、元禄年間の著なり。

持明院假名遣

假名遣のため、四段例、下二段例、シキク例を載せたり。權大納言基輔のものしたるものにて、寶永三年の著なり。

和歌童翫抄

歌を以て、四段例、下二段例の活語法を示せり。武藏麻布隱士道危子の著なり。時代詳ならむ。

荷田家秘傳書

活語例を載せたり。和字通例書、持明院假名遣等と類似せり。時代詳ならむ。

日本紀通證

和訓栞

右に谷川士清の著なり。日本紀通證の首巻、和語通音を載せたり。五十音の全體よりたりて、活語法を示したるに、之を以て始とすべきが如し。延享四年の著なり。和訓栞の辭書なれども、その首巻は活語説數多を載せたり。

ゐざし抄

あゆみ抄

右に富士谷成章の著なり。ゐざし抄より、詞を挿、装脚の三は區別せ

り、あゆひ抄の、装圖をあけて、六種の活用を示せり。あざし抄の、明和四年の著なり。あゆひ抄の、すこし後れて出てたり。

語意考

活語を初體用令助と定む。賀茂真淵のものしたるものにて、明和六年の著なり。

石上私淑言

てにをは紐鏡

詞の玉緒

御國詞活用抄

右の本居宣長の著なり。石上私淑言の、寶曆十三年の著にて、體用等の活語の説を載せたり。てにをは紐鏡の、明和八年の著にて、係結を

説明せり。詞の玉緒の、安永八年の著にて、助辭法を説明せり。御國詞活用抄の、天明二年の著にて、活語を二十七會に分類せり。

てにをは網引綱

助辭法を説明せり。梅井道敏のものしたるものにて、明和七年の著なり。

ふり分のみ

小澤蘆庵のものしたるものにて、寛政八年の著なり。

詞八衢

詞の通路

右の本居春庭の著なり。詞八衢の、活語を四段中二段一段下二段の五種に分ち、例證をあけて、説明せり。文化三年の著なり。詞の通路

ハ、活語の轉用、自他の區別を示せり。文政十一年の著なり。

詞のやちくさ

珠阿彌の著なり。

詞本末

元木阿彌の著なり。

語學新書

言語の法格を九品九格と定めて。實體言虚體言代名言連體言活用
言形容言接續言指示言感動言を九品といひ、この九品を六十八等
に再列し、又三百餘種の細目は區分せり。能主格所生格所奪格所與
格所役格招呼格現在格過去格未來格を九格といへり。これ我國言
語學者の西洋文典よりて、説をなしたるはじめなり。鶴峯戊申の

ものしたるものにて、天保二年の著なり。

詞の緒環

林國雄のものしたるものにて、天保七年の著なり。

助辭本義一覽

てはをば童蒙訓

右は橘守部の著なり。助辭本義一覽は、音義を以て、助辭は解釋を加
へたるものなり。天保六年の著なり。てはをば童蒙訓は、その名の如
く、童蒙は知らしめんとて、助辭を簡略に説明せるものなり。

玉の緒繰分

山口葉

活語指南

てよをい友鏡

活語雜話

右の僧義門の著なり。玉の緒繰分、天保六年、山口葉、天保七年、活語指南、天保十二年、てよをい友鏡、天保十三年の著なり。活語雜話、天保九年より同十三年にいたる、活語よかゝる雜話をかきあ
るしたるものなり

解の音の貌

音義を以て、語意を解き、轉用延約例を詳明せり。井面守訓のものしたるものにて、天保十一年の著なり。

玉の緒延約

幻裡庵の著なり。

玉の緒末分節

活語初の葉

右の長野義言のものしたるものにて、玉の緒末分節、天保四年、活語初の葉、弘化三年の著なり。

てよをは係辭辨

萩原廣道のものしたるものにて、弘化三年の著なり。

言語四種論

活語斷續譜

右の鈴木朗の著なり。

詞の捷徑

鈴木重胤の著なり。

てゝをい玉襟

同添紐

八衢捷徑

助辭音義

詞の玉橋

右の富樫廣蔭の著なり。

詞の玉緒補遺

詞の八衢補遺

詞玉緒補遺續篇

轉語考

右の中島廣足のものしたるものにて、詞の玉緒補遺は、嘉永五年、詞

八衢補遺は、同六年、他の二書はその後の著なり。
言靈のあるべ

黒川翁濶のものしたるものにて、嘉永六年の著なり。

辭格考

物集高世のものしたるものにて、安政四年の著なり。

助辭音義考

假字本義考

ひかげ藪

語學階梯

右の堀秀成のものしたるものにて、助辭音義考は、安政六年の著なり。他とその次々に出たるものなり。

玉の繼そへ

中村尚輔のものしたるものにて、慶應四年の著なり。

詞の經緯圖

語學自在

右の權田直助の著なり。

語彙別記

語彙活語指掌

右の文部省の出版なり。

詞のくみたて

谷千生の著なり。

自他捷覽

横山由清の著なり。

日本文典目錄

聲音及文字

音標文字

母音

子音

父音

鼻音

濁音

半濁音

五十連音圖

一

三

三

四

八

八

九

一一

拗音	一三
約音	一五
延音	一七
略音	一九
通音及通韻	二一
音便	二四
變音	三八
合略字	三八
言語	
總論	四一

體言

名詞	四二
代名詞	四六
副詞	四七
接續詞	四八
歟詞	四九
用言	
作用言	五一
形狀言	六二

用言の變化	六六
良行變格一格	七〇
作用言轉用格	七四
用言自他格	八一
用言命令格	八七
用言崇敬格	八九
用言活例	九一
助辭	
動助辭	一六九

文章

靜助辭	一七一
助辭の分類	一七二
體言所屬の助辭	二三一
用言所屬の助辭	二三八
用言と助辭と接續上の特例	二五九
命令詞所屬の助辭	二六六
助辭と助辭との關係	二六八
助辭の時	二七九
語格全圖	二八九

係結法	三〇一
跨續法	三三三
反轉法	三三八
省略法	三四六
對語法	三五八
疊語法	三六〇
重語法	三六二
添詞法	三六六
懸詞法	三七二
解剖法	三七四

附

假名遣	三八三
字音假名遣	三九九
送假名法	四一五
句讀法	四二三
語格問答	四三三

日本文典目錄終

日本文典

落合直文合著
小中村義象

聲音及文字

音標文字

我國の言語を言ひあらわすところの、純正なる聲音は、其數五十よりして、これを書きあらわすところの、音標文字は二種あり。一を平假名とよび、一を片假名とよぶ。即ち左のごとし。

平假名

片假名

あ い う え お

ア イ ウ エ オ

か	き	く	け	こ	カ	キ	ク	ケ	コ
さ	し	す	せ	そ	サ	シ	ス	セ	ソ
た	ち	つ	て	と	タ	チ	ツ	テ	ト
な	に	ぬ	ね	の	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
は	ひ	ふ	へ	ほ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ま	み	む	め	も	マ	ミ	ム	メ	モ
や	ゆ	ゆ	よ		ヤ	ユ	ユ	ヨ	
ら	り	る	れ	ろ	ラ	リ	ル	レ	ロ
わ	ゐ	ず	ゑ	を	ワ	ヰ	ヱ	ヲ	

此中、平假名よてい、うとす、えとに、いとに、片假名よてい、ワとテ、エと氏、イとレ、その音相似たるやういふあれど、その間、自ら單複

輕重の別あり、混同すべからず。

母音

此五十の聲音を別ちて、二とす。一を母音といひ、一を子音といふ。母音は、其數五個あり。あいいうえお即ちこれあり。此五個の聲音は、單純なる喉音として、いゝゑは長くよびのむすも、(アーア)(イーイ)のごとく、その聲音變ずることあり。故にまゝ、これを單音ともいふ。

子音

五十音より、五個の母音を除きたる、四十五個の音を、子音といふ。この四十五個の音は、もと父母兩音の配合して、生じたるものあれば、その

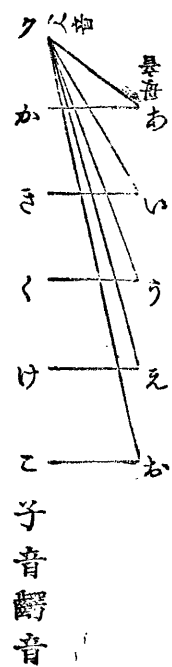
音、單純ならず。(カーア)(キーイ)のごとく、長くひきのばすとき、その韻に、ことごとく母音はあへるなり。故に、また、これを、複音ともいふ。

父音

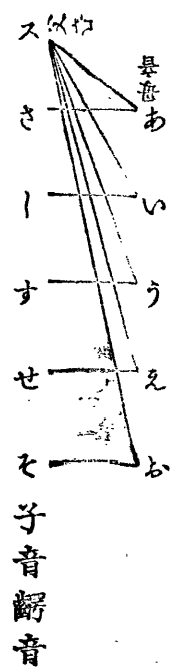
こゝにまた、五十音の外は、母音と配合して、子音を生ずる、九個の聲音あり。これを父音といふ。その音幽微にして、いまだ明に、音聲はあらざれたるものはあらむ。されば、これにあつる文字のあることなし。今假に、片假名をもて、これを書きあらわす時に、ク ス ツ ヲ フ ム ユ ル 子 九個の音の幽微なるものあり。此音、母音は配合して、子音を生ずるものなれば、一はこれを原音ともいふ。今左は母音と配合して、子音を生ず

るさまを示さむ。

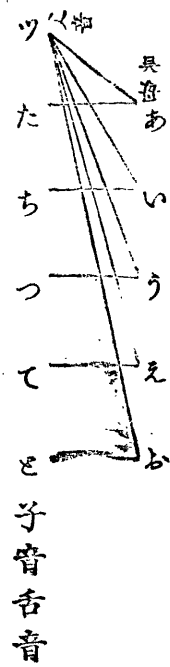
加行



佐行



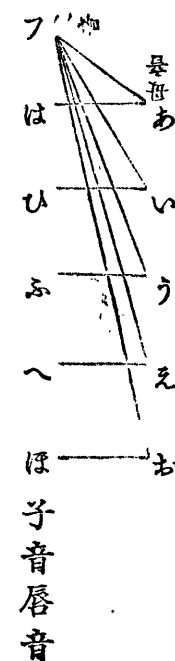
多行



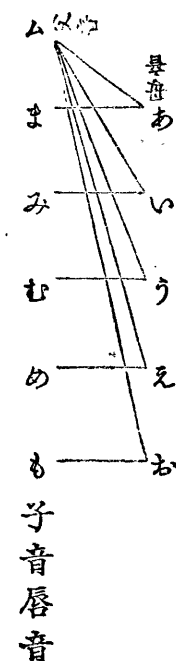
奈行



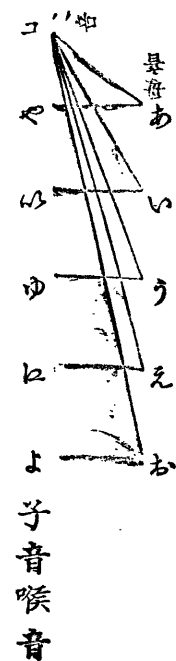
波行



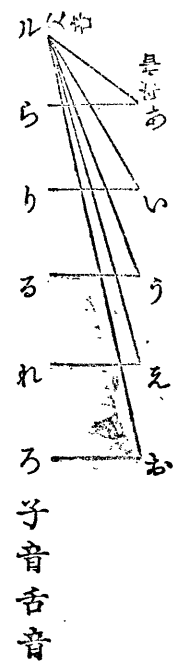
麻行



也行



良行



和行



かくのごとく、クとあゝ配合して、かを生じ、クといゝ配合して、きを生じ、クとうゝ配合して、くを生じ、クとえゝ配合して、けを生じ、クとおゝ配合して、こを生じ、かきくけこの子音成る。而して、此五個の聲音ハ、齶を用ゐてよぶ音なるが故に、これを齶音といふ。其他みなこれよおあじ。推して知るべし。

鼻音

五十音の外は、撥ぬる一音あり。これを鼻音といふ。平假名にて、んを書き、片假名にて、ンを書く。をべて、五十音の、口を閉ぢて、一音も發すること能はざるは、此音にかぎり、口を閉づるも、おほその音を發することを得るものなり。此音、もと麻行のむ音の變化は出づ。されど、今の五十音外、一個の音となり、概してむと同じく論をべからざるものあり。それの假名づらひ、音便等にて、區別あるを知るべし。

濁音

子音の中、加行佐行多行波行の四行は、濁音あり。此音は、元來我國の正

音はあらむ。故は、これが音標文字のあることなし。清音の音標文字の傍は、點を加へ、その標とせり。即ち左のごとし。

加行	が	ぎ	ぐ	げ	ご
佐行	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
多行	だ	ぢ	づ	で	ど
波行	ば	び	ぶ	べ	ぼ

半濁音

子音の中、加行佐行波行は、半濁の音あり。これも濁音とひとしく、我國の正音はあらざれば、音標文字のあることなし。故は、清音の音標文字は、○點を付して、清濁の音と區別す。即ち左のごとし。

加行	か	き	く	け	こ
佐行	さ	し	す	せ	そ
波行	は	ひ	ふ	へ	ほ

右の中、加行は、世人常は濁點を付して通用し、唯音聲の上のみ區別して、これを書きあらはす時は、濁音字と區別せざるがごとし。されど、己は一の半濁音なる以上、波行とひとしく、○點を施し、濁音と區別する方至當なるべし。すべて、濁音半濁音とも、我國の正音にあらず。漢字音の連聲より生じたるものなれば、今後各國との交通、頻繁となるゝあたがひ、我國人が、彼人名地名物名等をよぶため、種種の新しき聲音を生ずることゝあるべし。故にまた、これはあつる文字も、この濁音半濁音のごとく、一定の符點を施して、我國正音より區別

する必要起るべし。されど、それのその時、その音ゝあたがひ、便宜上一定することゝなるべし。唯こゝより、我國人が言語上、普通發音するところの文字はつきて、いひしのみ。

五十連音圖

五十音の經緯を亂さず連ねたる圖を、五十連音圖といふ。即ち左に示すものの、五十連音圖なり。その經なる、あいうえお等の五字を、音といひ、緯なる、あかさたなはまやらわ等の十字を、韻といふ。この僅々たる五十の音韻は、我國言語の源泉となり、千變萬化は應ずるも、それのその例格ありて、その規律の紛亂することなきは、我國聲音の微妙なる所以なり。

五十連音圖

阿行	あ	い	う	え	お	喉音
加行	か	き	く	け	こ	齶音
佐行	さ	し	す	せ	そ	齶音
多行	た	ち	つ	て	と	舌音
奈行	な	に	ぬ	ね	の	舌音
波行	は	ひ	ふ	へ	ほ	唇音
麻行	ま	み	む	め	も	唇音
也行	や	ゆ	ゆ	に	よ	喉音
良行	ら	り	る	れ	ろ	舌音

和行 わ ゐ 字 ゑ を 喉音

拗音

拗音といふ、五十連音なる、直音は對するものとして、即ち左に示すがごとく、第二韻なる、いきしちにひみゆりゐ、及び、第三韻なる、うくすつぬふむゆる字を、父音とし、ヤレユルヨ、及び、ワヰヲを、母音とし、圖のごとく配置して、生ずる音なり。我國、上古の拗音はよぶべきものなかりしは、中世このかた、漢字音をよむむがため、二音を合して、一音はよぶ音を生じたり。あるは、これはあつる音標文字あらざれば、五十音中の二字を配合して、これを表すことゝなれり。

シヤ ○ シユ シエ シヨ 圖中いきしちにひみゆりゐ、

ウ	キ	ク	シ	ス	チ	ツ	ニ	ヌ	ヒ	フ	ミ	ム	ウ	ヨ	リ	ル	ア	ウ
井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井
ウ	キ	ク	シ	ス	チ	ツ	ニ	ヌ	ヒ	フ	ミ	ム	ウ	ヨ	リ	ル	ア	ウ
ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ
ウ	キ	ク	シ	ス	チ	ツ	ニ	ヌ	ヒ	フ	ミ	ム	ウ	ヨ	リ	ル	ア	ウ
エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
ウ	キ	ク	シ	ス	チ	ツ	ニ	ヌ	ヒ	フ	ミ	ム	ウ	ヨ	リ	ル	ア	ウ
ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ

レの配合せる拗音と、うくすつぬふむゆるずよ、子の配合せる拗音とのおき、父音の位にあるもの、母音の位にある音と、同韻中よあればなり。

約音

約音とい、二音の、一音は約りたる音なり。而して、その約るはも、一定の方法ありて、亂るゝことなし。この方法を稱して、反切と名く。その反切するところの二音、上なるを、父位とよび、下なるを、母位とよぶ。若しこの父母同音中よあるとき、母位は歸し、父母同韻中よあるとき、父位は歸し、父母兩位他音中よあるとき、母位と同じき父位の音は歸す。左よその例を示さむ。

父位母位同音中よある例

た	ち	つ	て
	父位		母位
			音
			と

ちての約りて、てとあるは、ちて(以を、もてといふ類あり。

父位母位同韻中にある例

あ	い	う	え	お 父位
は	ひ	ふ	へ	ほ 母位

おほの約りて、おとあるい、おほぢ(祖父)を(おぢ)といふ類あり。

父位母位の韻列より上にある例

た 父位	ち	つ	て 母位
は	ひ	ふ	へ 母位

たへの約りて、とあるい、つたへ(傳)を(つて)といふ類あり。

父位母位の韻列より下にある例

か 母位	き	く	け	こ
さ 母位	し 父位	す	せ	そ

しろの約りて、さとあるい、しろ(然)を(さ)といふ類あり。

右の外、おほ、こ、よ一の反切あり。父母兩位とも、同音同位にして、直よその音は歸するものなり。これを稱して座切といふ。即ち左のごとし。

か 父位	き 母位	く	け	こ
---------------------	---------------------	---	---	---

あいの約りて、あとあるい、あいの約りて、とあるい、と(あるが故)といふ類あり。

延音

延音とい、一音の、二音は延びたる音なり。その延りたるは、正則なると、不規則あるとあり。左はその例をあげむ。

開。	さく	を	きおく
思。	おもわき	を	おもわさく

待。 まつ。	知。 あらぬ。	思。 おもふ。	見。 みむ。	戀。 こふる。	以上正則の例なり。	笑。 あみ。	忌。 いむ。	紅紫。 もみぢ。	坐。 いませ。	宣。 のれ。
を	を	を	を	を		を	を	を	を	を
またく。	あらかく。	おもく。	みま。	こふらく。		あまひ。	いもひ。	もみだひ。	いまさへ。	のらへ。

以上不規則の例なり。

略音

略音とい、連聲の便より、音の略るをいふ。約音とい、混同すべからむ。約音は、二音以上の音、連聲の便より、反切の法より、一音を歸するものなり。略音は、全く連聲の便よりして、消滅するものなり。而して、その例多くは、合名詞はありて、その略る方法は、正則なると、不規則なるとあり。左はその例をあげむ。

同音二音重りたるとき一音略る例

水。漬。	みつゝく	を	みつゝく
金。鯛。	あかゝべ	を	あかへ

河。原	を
お。ろ	を
お。人	を
た。ひ。と	を

か。ろ
た。ひ。と

子音の下の母音略る例

今。朝	を
け。あ。さ	を
手。洗	を
た。あ。ら。ひ	を
盆。荒。雄	を
ま。ま。ら。を	を
長。雨	を
お。が。あ。め	を
明。石	を
あ。の。い。し	を
假。庵	を
か。り。い。ほ	を
池。上	を
い。け。の。う。へ	を
山。背	を
や。ま。う。しろ	を

け。さ
た。ら。ひ
ま。ま。ら。を
お。が。め
あ。の。し
か。り。ほ
い。け。の。へ
や。ま。しろ

大。内	を	お。ほ。ち
お。ほ。う。ち	を	
蓬。生	を	よ。も。ぎ。ふ
よ。も。ぎ。お。ふ	を	
陸。奥	を	み。ち。の。く
み。ち。の。お。く	を	

以上正則の例なり。その他、おほれほし。

息。響	を	い。び。き
い。き。ひ。き	を	
足。踏	を	あ。ぶ。み
あ。し。ふ。み	を	
綱。代	を	あ。じ。ろ
あ。み。しろ	を	

以上不規則の例なり。

通音及通韻

通音通韻とい、同音同韻相通じたるものなり。いひあふれば、或音韻の、

或音韻は訛りたるものなり。されど、その訛りも、我國五十音の妙用として、その規律を亂ることなし。即ち音は、同行音は通じ、韻は、同列韻は通じ、決してその行列を紛亂することなし。或種の通音に至りては、その相通じたる音の、階級定りたるものあり。即ち合名詞おどの、二言の合して、一言とされるものゝ、上の語尾、第四音として、通音なるとさひ、悉く第一音は通じて、よぶがごとし。今これらの例を左に示さむ。

・同音相通じたる例

○亮 ずさぎ	を	をさぎ
○父 ちゝ	を	てゝ
海原 うのそら	を	うおえら
○最中 まあ	を	もある

第四音の第一音は通じたる例

○夢 いめ	を	め
丸 まるし	を	まろし
竹 たけやぶ	を	たかやぶ
風音 かぜおと	を	かざおと
○手枕 てまくら	を	たまくら
新宿 ふねやど	を	ふおやど
上領 うへあど	を	ういあど
木先 つめさき	を	つまさき
冷木 ひよみづ	を	ひやみづ
群鳥 むれどり	を	むらどり

聲。色
こゑいろ

を

こゑいろ

同韻相通したる例

春雨。

はる何め

を

はるきめ

。大人

を

ぬじ

大兄。

を

おね。

。幾何

を

そさばく

天地

を

あめつし

同。

を

おやじ

忘。

を

をらら。

音便

音便とい、連聲の便より、或音の變じ、急促り、省け、添りて、よべる音あり。此音の、もと、我國の正音にあらむ。漢字音を、よびたる習慣の自然に移りて、今の雅言にも、この音をよぶものおほし。されど、一の慣例ありて、その數もかぎりあり。左に其例を示さむ。

さしをいとよぶ例

幸。福

さきはひ

を

さいはひ

埼。玉

を

さいたま

横。立

を

ついたて

つきたて

を

ついたち

書。

を

かいて

かきて

を

あかいて

以上はきをいとよぶもの

髪應もてあしを

指。さしてを

長。あがしを

短。みじあしを

熱。あつしを

寒。さむしを

以上はしをいとよぶもの

お、か、く、そ、ひ、ふ、へ、ほ、ま、み、む、り、や、ゐ、を、等、を、う、と、よ、ぶ、例

妹。いもおとを

此はおをうとよぶもの

もてあい。

さいて

あがい。

みじあい。

あつい。

さむい。

いもうと

冠。かゝふりを

此はおをうとよぶもの

拍子。ひやくしを

格。かくしを

長。あがくを

寒。さむくを

以上はくをうとよぶもの

幕。はくしを

編。かはほりを

以上はをうとよぶもの

高麗。こまひとを

かうふり

ひやうし

かうし

あがう

さむう

はうき

かうほり

こまうと

眞。人
まひと
おひと

を

もうと
かうと

以上いひをうとよぶもの

法。師
はふし

を

はうし

候。さ
さふらふ

を

さうらふ

以上いふをうとよぶもの

卿。まへつぎみ

を

まうつぎみ

仕。つかへまつるを

つゐうまつる

以上いへをうとよぶもの

直。衣
おほし

を

かうし

直。會
おほらひ

を

かうらひ

賜。以上いほをうとよぶもの

たまはり

を

たうはり

山。田
やまゝ

を

やうゝ

以上いまをうとよぶもの

髪。掻
かみゐい

を

かうかい

神。戸
かみべ

を

かうべ

以上いみをうとよぶもの

柑。子
かむし

を

かうし

日。向
ひむか

を

ひうか

以上いむをうとよぶもの

漸。々
やうく

を

やうく

此^取にやをうとよぶもの
とりて を どうて

此^參にりをうとよぶもの
まゐで を まうで

此^申にゐをうとよぶもの
まをを まうを

此にををうとよぶもの

以上はあげたる諸例のごとく、いゝの音便に、さ、し、の二音、うゝの音便に、お、か、く、は、ひ、ふ、へ、ほ、ま、み、む、や、り、ゐ、を、等とあるべし。右の中、さ、し、の、いゝとなり、く、ふ、む、の、うゝとなるに、父音の母音は吸收せられたる音として、音便はあらむといふ説あり。一理なきはあらざれば、こゝは

一言して、疑を存し置く。

いゝん。うゝを添へてよぶ例

詩歌
あか を あいか
四時
あゝ を あいじ

以上いゝを添ひてよぶもの

眞字
まな を まんな
不者
すば を まんば
假床
さじさ を さんじさ

以上いゝんを添へてよぶもの

夫婦
ふふ を ふうふ
八日
やか を やうか

以上のうを添へてよぶもの
んを省きてよばざる例

文。字
もんじ を

もんじ

本。意
ほんい を

わい

察。内
さちない を

あかい

念。師
ねんし を

ねぶつ

急促る聲よぶ音便の例

全
またく を

まったく

最
もども を

もども

訴
うたへ を

うったへ

以上の單は急促りてよぶもの

夫。
をひと(をうと) を

をッど

追。而
おひて(おうて) を

おッて

従。而
あさがひて(あたがうて) を

あさがッて

真。人
まひと(まうと) を

まッど

以上のひの急促れるもの

貴。
たふとし を

たッとし

此のふの急促れるもの

以。而
もちて を

もッて

立。而
たちて を

たッて

以上のちの急促れるもの

奴。
やつこ を

やつこ

此のつゝの急促れるもの

欲。ほり。を

ほッを

則。のり。を

のッを

怒。ありて。を

いッて

以上のりの急促れるもの

濁音及半濁音によぶ音便の例

橋。に。を

にッを

日。に。を

ひッを

月。に。を

つきづを

人。に。を

ひとびと

以上の濁音によぶもの

専。も。を

もッばら

可。あ。を

あッばれ

以上の半濁音によぶもの

ひ。み。へ。を。を

をん。を

女。を。を

商人。あ。を

あきんど

座。か。を

かん。を

頭。か。を

かん。を

仕。つ。を

右の外、字音の音便あり。その二字音の重りたるとき、上の音尾急促る

か、又い撥ぬる時に、下の音、半濁音となり、又上の音尾撥ぬるとき、下

の音、阿行也行和行の喉音あるとき、奈行となる音便あり。今左に數例を示さむ。

下の音半濁音とある音便の例

貧富。	を	ひんぶ。
半白。	を	そんむく
はんそく	を	はんぼ。
反哺。	を	せんぶく
はんほ。	を	
潜伏。	を	
せんぷく	を	
以上上の音尾撥ねたるもの		
一般。	を	いッむん
いちそん	を	いッびん
一品。	を	にッぽん
いちひん	を	
日本。	を	
にッぽん	を	

一本。	を	いッぽん
いッぽん	を	はッぶん
発奮。	を	りッぶく
はッふん	を	
立腹。	を	
りッぶく	を	

以上上の音尾急促りたるもの

奈行よぶ音便の例

仁和。	を	にんか。
にんご	を	そんね。
輪回。	を	てんのう
そんご	を	いんねん
天皇。	を	うんぬん
てんごう	を	
因縁。	を	
いんえん	を	
云云。	を	
うんうん	を	

また我國の言語も、上の語尾撥ねるときは下の音濁る、通例なり。

かつその例もいとおほし。されど煩しければ省きつ。

變音

五十音中、一字よして、兩音あるもの二個あり。即ちひへ、これなり。たひ(鯛)はへ(蠅)等の如きは、全くいゑ音のごとき音よべり。この連聲の便より、かくよびなせるものなれど、この音よかざれむひへの變音として、こゝよかゞげつ。

合略字

我國の言語を記するよ、五十音標字外よ、二字以上の合略文字あり。左よ示さむ。

平假名

く

一言語を折返して、あるすときよ用ゐる文字なり。例へば、かへすくをりく等のごとし。但し、一字を折返すときいゝを用ゐるなり。ちゝはゝ等のごとし。この片假名よも通用せり。

と

ことを合略せるものなり。

へ

ありと同意義なり。也の草體なり。片假名よも通用せり。

片假名

ト

コトを合略せるものなり。

ト

トモを合略せるものなり。

ト

トキを合略せるものなり。

ノ

シテと同義を用ゐるなり。

言語

總論

我國の言語を大別して、左の三種とす。

- (一) 體言
- (二) 用言
- (三) 助辭

體言といふ、形體の有無を撰むず、すべて語尾の動ぬものをいひ、用言といふ、事物百般の作用と形狀とをあらとす言として、語尾の動き活くものをいひ、助辭といふ、體言と用言とに附屬して、その活を助くる短きことばをいふ。今その順序に従ひ、各別にこれを説明すべし。

體言

體言をわかつて、左の五種とす。

- (一) 名詞
- (二) 代名詞
- (三) 副詞
- (四) 接續詞
- (五) 數詞

今その順序に従ひ、左にこれを説明すべし。

名詞

名詞といふ、事物一切の名をいふは用ゐる語なり。これに有形名詞、無形名詞の別あり。有形名詞といふ、人、獸、草木、日、月、山川の類をいひ、無形名詞といふ、年、時、心、功、色、禮の類をいふなり。

又名詞を、普通名詞、固有名詞の二種に分つことあり。普通名詞といふ、物の種類によつて、名けたる名目にて、例へむ草、木、鳥、蟲などのごとく、その種類により、一般に通用するをいひ、固有名詞といふ、その物、固有の名目にて、例へむ日本、支那、山城、大和、義經、辨慶などのごとく、他は通用せざるものをいふなり。

又名詞は、詞の成立上より、普通の名詞外は、居名詞、略名詞、合名詞の名稱を下すことあり。居名詞といふ、作用言の言ひ居りて、一の名詞となりたるものにて、例へむ霞、烟、氷、紅葉、時雨、戀

形狀言の居名詞となるは、合名詞の上につく名詞にかぎる。

おどのこどし。今霞といふ言よつきていへむ、霞にもと用言よて、あを
まむ、あをみ、あをむ、あをめ、と活く言なるを、あすみと言ひ居りて、
 一の名詞となれるがごとし。略名詞といへ、もと用言よて、語尾の變化す
 るものなるを、その語尾の省りて、一の名詞となりたるものなり。例へ
 ば歌、淀、東、遠、近、赤、白、などのごとし。今歌といふ言よつきていへむ、
 歌にもと用言よて、うたとむ、うたひ、うたふ、うたへ、と活く言なるを、
 その語尾の省りて、一の名詞となりたるものなり。合名詞といへ、名詞
 と名詞との合して、一の名詞となりたるものをいふ。山川、船人、春霞、
 などのごとし。其合したるときは、おほめた、下の言のこじめを濁る例
 なり。清みて呼ぶとき、山と川と、船と人と、春と霞と、のこととなり
 て、合名詞といはならぬなり。猶この合名詞を委しくいへむ、左の九つよ

り成立するものなり。

普通の名詞と普通の名詞

普通の名詞と居名詞

普通の名詞と略名詞

居名詞と居名詞

居名詞と普通の名詞

居名詞と略名詞

略名詞と略名詞

略名詞と普通の名詞

略名詞と居名詞

さて又この合名詞は、上の名詞の語尾を變ずるものあり。ふねひと(船

山	川	春	風	朝	起	妻	戀	琴	歌	裏	白	待	合	聞	書	飯	路	買	物	祝	歌	待	遠	長	歌	遠	淺	淀	川	遠	山	遠	吹	高	笑
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

人)を、ふかひといふがごとし。又略するものあり。ふみそこ(文箱)を、
ふむこといふがごとし。通音及略音のところを、合せて見るべし。

代名詞

代名詞とい、名詞は代へて用ゐる語にて、人の代名詞、指示の代名詞、疑問の代名詞の三種あり。人の代名詞とい、人の名は代へて用ゐる語にて、我、已、汝などの如きをいふ。我、已、語る人の名は代へていひ、汝、聴く人の名は代へていふなり。指示の代名詞とい、事物などの名は代へて用ゐる語にて、此は事物、場所、方角など、各、指すものによりて差別あり。事物は、これ、それ、あれ、かれ、等を用ゐ、場所は、ここ、そこ、あそこ、かしこ、などを用ゐるなり。さてこれをも、また語る人と、聴

く人とはよりて、かゝりあるは勿論、また遠近の別あるものとあるべし。疑問の代名詞とい、人、事物、場所、方角、時などの、さだかならぬ時、代へて用ゐる語にて、人、誰、事物、何、いづれ、場所、いつ、いづこ、方角、いづち、時に、いつおどを用ゐるなり。

副詞

副詞とい、動作と形容との、有様の如何をいふは用ゐる語にて、その種類甚だ多し。形状は、明か、幽か、等、順序は、次、漸く、等、分量は、頗る、聊か、等、願望は、せめて、いかで、等、推量は、蓋し、若し、等、疑問は、など、など、等、應答は、うべ、實は、等を用ゐるなり。又反復の意をあらわすは、愈、猶、屢、頻、等を用ゐ、物の集合は、すべて

皆共は、なべて等を用ゐ、又特別は取り出でゝいふときにも、特り、殊は、まきて等を用ゐ、又反動の意をあらゑすときも、豈、却て、いかでか等を用ゐるなり。そもく副詞の種類々よて、その用處もまた一ならず。故は作用言と形狀言との上におき、或は他の副詞の上におくこともあり。又名詞、代名詞にして、副詞となるあり。又名詞用言など、助辭の添りて、副詞となれるもあるなり。

接續詞

接續詞といふ、上の語、又句の下に語、又句は接續するに用ゐる語なり。此も其種類甚た多し。又、また、あると、あるひと等、語又句を並べていふに用ゐ、かつ前事を再びいひ起すに用ゐ、そも、そもく

に、語をあらためていふ時に用ゐ、然れに斯れに等、前事をうけていふに用ゐるなり。

歎詞

歎詞といふ、あ、あゝ、や、やゝのごとく、すべて感嘆を呼ぶ語なり。

用言

用言を二のちて、左の二種とす。

(一) 作用言

(二) 形状言

作用言とい、鳥はつきていへば、飛ぶ、翔る、鳴くなど、すべてその動作を意味する語なり。形状言とい、その鳥を、白し、黒しなど、すべてその形容を意味する語なり。

作用言

作用言を二のちて、正格、變格の二種とす。正格は、左の五種あり。

(一) 四段活

(二) 上一段活

(三) 下一段活

(四) 上二段活

(五) 下二段活

變格もまた、左の四種あり。

(一) 加行變格

(二) 佐行變格

(三) 奈行變格

(四) 良行變格

正格とい、語尾變化の規則正しきものをいひ、變格とい、その語尾變化

の規則錯雜なるものをいふ。

正格

(一) 四段活

四段活とい、五十連音圖中、おの韻列を除き、他のあいいうえの四韻列よりたりて、活くものをいふ。例へば書く、推すといふ語の、かゝん、かき、かく、かく、かけ、おきん、おし、おき、おき、おせとやうに活くをいふ。

加行 書 か き く け

佐行 推 さ し を せ

多行 打 た ち つ っ て

波行 飼 そ ひ ふ ふ へ

麻行 住 ま み む む め
良行 釣 ら り る る れ

この四段活い、か、さ、た、む、ま、らの六行いとして、あ、お、や、あの四行いなし。

(二) 上 一 段 活

上一段活い、五十連音圖中、いの韻列い、るの添りて、活くるもの
よて、着る、似るといふ語の、き、き、さる、さる、さる、さる、に、に、に、に、
にれとやうい活くをいふ。

加行	(着)	き	き	さる	さる	さる
奈行	似	に	に	に	に	に
波行	干	ひ	ひ	ひ	ひ	ひ

麻行	(見)	み	み	みる	みる	みれ
也行	鑄	い	い	いる	いる	いれ
和行	居	ゐ	ゐ	ある	ある	あれ

この上一段活い、か、な、む、ま、や、あの六行いとして、あ、さ、た、ら
の四行いなし。圖中 (一) 印を附したるい、他は活くへ
きことむのあきあるしあり。

(三) 下 一 段 活

下一段活い、五十連音圖中、えの韻列い、るの添りて、活くるもの
をいふ。

加行 (蹴) け け ける ける けれ

この下一段活い、加行のみよして、他の九行いなし。奈行い
殆、波行い、綿いなどの活ありといふ説あれど、それい寝いる、經いる

と同語よて、下二段活の俗語なるべし。

(四) 上二段活

上二段活とい、五十連音圖中、いうの二韻列よ、るの添りて、活くも
 のよて、起き、落つといふ語の、おき、おき、おく、おくる、おくれ、おち、お
ち、おつ、おつる、おつれとやうに活くをいふ。

加行	起	き	く	くる	くれ
佐行	(堀)	じ	む	むる	むれ
多行	落	ち	つ	つる	つれ
波行	戀	ひ	ふ	ふる	ふれ
麻行	恨	み	む	むる	むれ
也行	悔	い	ゆ	ゆる	ゆれ

良行 戀 り る るゝ るれ

この上二段活い、か、さ、た、も、ま、や、らの七行よしして、あ、お、わ
 の三行よしあし。

(五) 下二段活

下二段活とい、五十連音圖中、う、えの二韻列よ、るの添りて、活くも
 のよて、授く、瘦すといふ語の、さづけ、さづけ、さづく、さづくる、さづく
れ、やせ、やせ、やを、やをる、やをれとやうに活くをいふ。

阿行	(得)	え	え	う	うる	うれ
加行	授	け	く	くる	くれ	
佐行	瘦	せ	を	をる	をれ	
多行	捨	て	つ	つる	つれ	

奈行 無ね ね ぬ ぬる ぬれ
 波行 與へ へ ふ ふる ふれ
 麻行 譽め め む むる むれ
 也行 消え え へ へる へれ
 良行 枯れ れ る るる るれ
 和行 植ゑ ゑ ず ずる ずれ

この下二段活い、わ、か、さ、た、お、も、ま、や、ら、わの十行、悉く活くあり。

以上、上二段活、下二段活は活くべき動詞は、る、れを添ふるに、必い、わ、か、さ、た、お、も、ま、や、ら、わむう、く、も、つ、ぬ、ふ、む、ゆる、う、よて、例へば下二段活は、て、授け、授け、授く、授くる、授くれの如く、上二段活は、て、

起き、起き、起く、起くる、起くれのどとし。さるを、世人のこの二段活は活くべき語を、一段活は活るを、いさく非あり。例へば起さる、落ちる、又授ける、瘦せるなどのどとく、おわあとい、えの韻列は添ふるあり。顧るべきこととおそ。

變格

(一) 加行變格

加行變格とい、五十連音圖中、か、い、うの三韻列は、る、れの添りて、活くものなり。この活の、變格なる故に、き、くと活く、四段の活きざま、く、くれと活く、下二段の活きざまとして、更におの韻列なること活けはなり。

この變格活に、かの一行はかざるなり。

佐行變格とい、五十連音圖中、え、い、うの三韻列は、るれの添りて、活くものなり。この活の、變格なる故に、し、すと活く、四段の活きぎま、せする、すれと活く、下二段の活きぎまなればなり。

佐行爲せしすすれ

この變格活なり、さの一行はかざるなり。こゝは活くべき動詞
に、爲なりの外、坐あひすの一語あるのみ。但し國語と外國語とを問
を、一の體をなしたる語の、用言は用ゐらるゝとき、をべて
こゝは活く例あり。例へば、國語はては、罪せせし、罪せを、罪

走る、罪をれ、月見せん、月見し、月見走、月見走る、月見走れの
 ごとし。又外國語にてハ、論ぜん、論じ、論ず、論する、論ずれ、
 關係せん、關係し、關係す、關係する、關係すれのごとし。

奈行變格とい、五十連音圖中、あ、い、うの三韻列は、る、れの添りて、活くものなり。その活の、變格なる故に、な、に、ぬ、ねと活く、四段の活きざま、に、ぬ、ぬる、ぬれと活く、上二段の活きざまあれなり。

奈行死な
にぬぬるぬれ(ね)

この變格は、なの一_レ行はるゝるなり。こゝは活くべき動詞、死_レの外_レ去_レの一語あるのみ。ぬれの傍はねとあるは、命令の意は用ゐるものなり。

(四) 良行變格

良行變格とい、五十連音圖中、あ、い、う、えの四韻列よりとりて、活くものなり。この活の、變格なる故に、ら、り、る、れと活く、四段の活きざまながら、第三段のところ、りとなりて活けむなり。

良行有 ら り り る れ

この變格に、らの一行よりざるなり。こゝは活くべき動詞に、有の外、侍、居の二語あるのみ。

形 狀 言

形狀言の活をとりて、久活、志久活の二種とす。即ち左のごとし。

久 活 善 く く し き けれ

志久活 嬉 し く し き けれ

この活に、まべて、事物の性質、品位、分量等を意味する、形狀言は屬する語の活くところあり。この活を、先人の、音雜活ともいへり。音雜とい、まべて、いづれの活も、かの音に、かの一行、さの音に、さの一行のみ活きて、外の行に、一音も雜らざるを、この活に、例へむ、善しといふ語に、よく、よし、よき、よけれと活きて、く、きりか行あれど、しりき行よて、か行とさ行と、その音雜り居れむなり。

この活に、久活の一行のみよて、足するを、志久活を加へたるもの、第三段のところよて、久活と異かれむなり。その例へば、嬉しといふ語を、久活は活のする時に、その第三段はれい

て、嬉しとあるべし。然るよしと二音重りたる時に、一音省けて、しとのみいふ例あれむ、こゝは志久活を加へて、嬉しと活く活段を設け置くゝ至當なるべし。最もしと活きたる例なきはあらむ。その永長二年、東塔東谷歌合の歌は、秋ふるみ夜風そけしむべしこそ四方の里人衣うつあれ」又俊基集は、家つとよさのみお折りを櫻花山の思もん事もさし」あどのごとし。されど、普通の例はあらむ。

形狀言は變格ありて、この活きざまは、適にざるものあり。けし(蓋)は、けしきともいひ、もし(若)は、もしきともいへど、けしき、もしきといふをざるなり。又をこし(少)は、をこしきともいひ、らしきともいへど、をこしきらしき

といふをざるなり。

形狀言の語尾、み、さ、あ、げ、らとありて、一種の體言格とされるもの多し。例へむ、ふあさ(深)ややさ(遠)ふあみ(深)あさみ(淺)さむげ(寒)うれしげ(嬉)きよら(清)うまら(味)そるゝ(遠)あつり(靜)あどのごとし。されど、形狀言はあざるはあらむ。他の體言、及び作用言も、このみ、さ、あ、げ、らのつきて、形狀體言とあるものあり。例へば、よしみ(縁)いやみ(否)あそれさ(隣)これさ(是)たし(是)あまの(幽)ありげ(有)よそげ(外)かにげ(何)さき(先)まれら(稀)あどのごとし。又ある場合より、助辭ともあることあり。頼をそやみ、けふのうれしき、水のふあさあどの類のごとし。

用言の變化

作用言と形状言とを問ひ、をべて用言の語尾に、五段は變化するこ
と、既よいへるがごとし。さてこの段毎に、各名稱ありて、語の格を變
るなり。今その例を、四段活の用言よとれむ、左のごとし。

	第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五變化
書	か	き	く	く	け
推	さ	し	を	を	せ
打	た	ち	つ	つ	て
學	は	ひ	ふ	ふ	へ
住	ま	ミ	む	む	め

釣 ら り る る れ

第一變化を未然段といふ。

未然段とい、未だ然らむといふ義にて、將は然せむとする意と、然せ
ざる意とを、あねたる段なり。

又この段は、或助辭を付すれば、願の意とあるなり。例へむ、書のあ
む、推さあむ、書のむや、推さむやなどのごとし。但し、作用言はかご
るなり。

第二變化を續用段といふ。

續用段とい、用言よつゞくといふ義にて、用言より用言よつゞくよ
り、必ずこの段よりするなり。例へむ、書きつくを、推し倒をなどの
ごとし。

又居名詞、即ち用言をいひ居ゑて、體言とするより、常はこの段よりするなり。但し、作用言はかざるなり。

第三變化を斷止段といふ。

斷止段といふ、斷れて止まるといふ義にて、語の切れて、下はつゞかざるをいふなり。例へむ、文をく、花ちるなどのごとし。

又、用言として、人名などとなるもの、作用言、形狀言とも、この段よりするなり。例へば、順融競等などのごとし。また、未然、已然とやうは、時をもて區別するとき、この段は現在となるなり。

又、も、に、を、は、の、がの助辭、上はありて、この段にて受くるとき、結となるなり。例へむ、文ををく、花もちる、風がふくなどのごとし。

第四變化を續體段といふ。

續體段といふ、體言はつゞくといふ義にて、用言より體言はつゞくには、必む、この段よりするなり。例へむ、書く、文、ちる、花、思ふ、人などのごとし。この段も、時をもていへば、現在あり。

四段活、上一段活などの、第三變化と、第四變化と、その語尾同じければ、格も別はかゝりたるやうはあらねど、他の活段は照し合せて、その差別あるを知るべし。

又、のが、ぞ、や、る、あむの助辭、上はあるとき、必むこの段にて結ぶなり。例へむ、花ぞちる、文なむかく、人と思ふなどのごとし。

第五變化を已然段といふ。

已然段といふ、未然段の反對にて、已に然ある段なり。例へむ、未然段

て、花さかばといへば、咲るを見よるむなどいふことゝなるを、この段よて、花さけべといへむ、咲けば人の訪ひくるなどいふことゝなるよて知るべし。

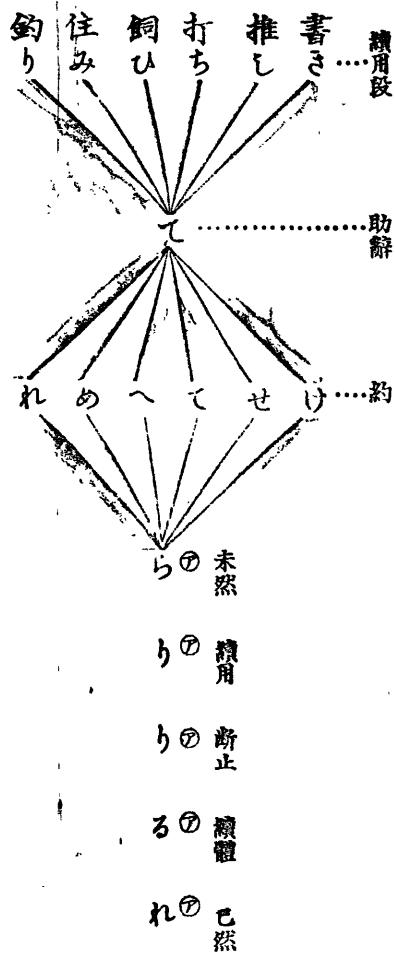
又、こそといふ助辭、上にある時、必ずこの段よて結ぶあり。例へむ、花こそちれ文こそ書け君をこそ思へなどのごとし。

變格良行一格

變格良行の一格とい、他の用言の、變格良行は重りて活くものをいふなり。これより作用言よりするものと、形状言よりするものとの、二種あり。

作用言よりするもの、四段活の第二變化、即ち續用段の、き、じ、ち、ひ、

み、りの音よ、ての助辭のありて、變格良行の、ありといふ詞よ、うつりてたらくなり。例へば、四段の加行よて、書きてあらむ、書きてありといふを、そのき、ての約りてけとなり、あの省られて、母音、子音の下にある部參看。書けらむ、書けりと活くがごとし。左よ、その圖をあらげん。



この約りたるものを、更_レ正圖は改むれむ、左のごとし。

未然	續用	断止	續體	已然
咲けら	けり	けり	ける	けれ
推せら	せり	せり	せる	せれ
打てら	てり	てり	てる	てれ
飼へら	へり	へり	へる	へれ
住めら	めり	めり	める	めれ
釣れら	れり	れり	れる	れれ

この一格を、四段活の已然段の、け、せ、て、へ、め、れより、う、つりたるものと、こゝろえひがめたる人あり。されど、その、大なる誤なり。日本紀は、さやげりとあるを、古事記はさやきてあり

と書き、又、萬葉集は、而有の字ををけり。續用段は、ての助辭のかゝりて、約れることのみ明なり。

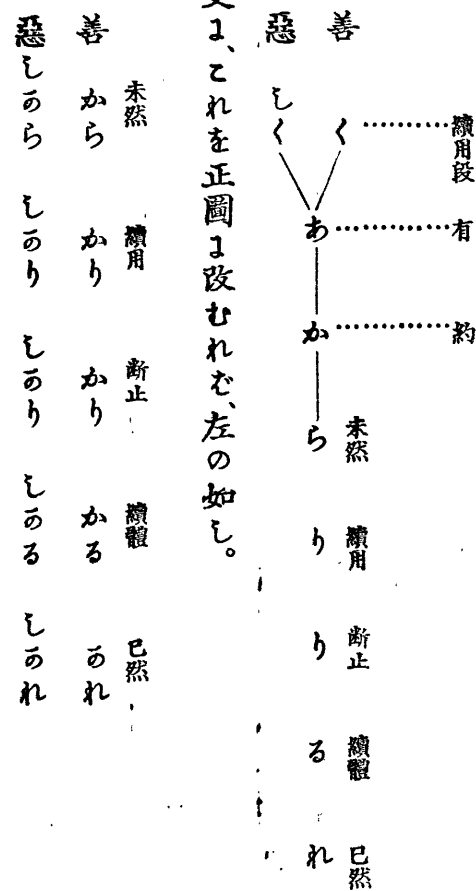
又、ゐく活くは、四段活の動詞のみにて、他の作用言は、なきものなるを、世人ともすれむ、下二段活の用言をも、活らせて、

受けり、捨てり、瘦せり、埋めり、見えり、枯れり、飢ゑり、いづれも、受けたり

捨てたり、あといふべきところなり。などいふことあり。いみじきひのごとなり。

次は、形状言よりするもの、形状言の第二變化、即ち續用段の、く、し、くの音より、變格の良行の、ありといふ詞はつゞきて、善くあらむ、善くありといふを、そのく、あ、の約りて、かとなりて、善からむ、善ありとなるなり。左はその圖をかゝげむ。

更ふ、これを正圖は改むれむ、左の如し。



し。

(二)の方、上一段活、下一段活、上二段活、下二段活、變格活等の未然段より、させ、さすとうつるものなり。上一段までいへば、さ、に、ひ、み、いゐより、させ、させ、さす、さする、さすれとうつり、着させ、着さす、煮させ、煮さすといふが如し。最も、變格活の有居、および、上一段の、着、似、見、い、せ、せ、を、を、を、を、と、(一)の方、うつることもあるなり。左は圖をかゝげて、下二段佐行はかゝる、(一)と(二)との、轉用を示さむ。

の	(一)		四段活		上一段活		變格活	
	推さ	書か	(着)き	去な	推さ	書か	(着)き	去な
似た	似に	未然	續用	断止	續體	已然	未然	續用
		せ	せ	を	を	を	を	を

圖
住ま
飼と

釣ら (見)み 有ら

上一段活 下一段活 上二段活 下二段活 變格活
(着)き 起き (得)え (采)て

(二)
似よ (掘)じ 受け
腹せ

落ち捨て

戀ひ 蕪ね

の (見)み 恨み 譽め

未然 續用 断止 續體 已然
させ させ さを さをる さをれ

圖 鑄い 老い 消え
枯れ

居る 下り 飢ゑ 爲せ

下二段良行の轉用格とい、前のごとく、作用言の未然段より、下二段良行の活なる、れ、れ、る、る、るれよりつりて、活くをいふ。これよりまた、左の二種あり。

(一) れ る る、るれ

(二) られ られ らる、る、るれ

(一)の方、四段活、及び變格活の奈行、良行より、うつるものよて、その活きざまをいへば、四段活の未然段の、ゐ、さ、た、そ、ま、らより、このれ、る、る、るれとうつり書かれ、書かる、勝たれ、勝たるといふがごと

し。

(二)の方、上一段活、下一段活、上二段活、下二段活、變格活等の未然段より、うつるものよて、上一段よていへば、き、に、ひ、み、い、ゐより、られ、られ、る、る、るれとうつり、着られ、着らる、似られ、似らるといふがごとし。こゝよまた、圖をかゝげて、下二段良行よかゝる、(一)と(二)との轉用を示さむ。

四段活

書か

(一) 推さ

打た

の 飼と

變格活

去な

未然 續用 断止 續體 已然
れ れ る る、る れ

圖 住ま
釣ら
有ら

上一段活 下一段活 上二段活 下二段活 變格活

(着)き 起き(得)え(来)こ

(二) 似に (掘)じ 受け

干ひ 落ち 捨て 瘦せ

の (見)み (蹴)け 戀ひ 無ね

恨み 辨へ

圖 鑄ゆ 老い 消え

未然 續用 漸止 續體 已然
られ られ らる らるゝ らるれ

用言自他格

をべての用言を、その性質上より二かちて、左の三種とす。

第一 然る詞

第二 然るる詞

第三 然せらるゝ詞

居る 枯れ
下り 植ゑ 爲せ

第一、然る詞は、またおのづから然る詞と、みづから然る詞との二種あり。おのづから然る詞とい、例へむ、みゆる、きこゆるなどのごとく、己が、目耳はみゆる、きこゆるよて、自然を主としていふ詞なり。みづから

然る詞とい、例へむ、みる、きくのごとく、已がみる、きくよて、已を主としていふ詞なり。

第二、然する詞は、また二種あり。みづから然する詞と、他は然せきする詞となり。みづから然する詞とい、例へむ、きかする、みずるなどのごとく、已が書畫、又ハ談話を、他はみえる、きかするよて、已を主としていふ詞なり。他は然せきする詞とい、例へば、みかする、きかするなどのごとく、他は景色、又ハ音楽を、みかする、きかするよて、他を主としていふ詞なり。

第三、然せらるゝ詞は、おのづから然せらるゝ詞と、他は然せらるゝ詞との、二種あり。おのづから然せらるゝ詞とい、例へば、みらるゝ、きかるゝなどのごとく、書のみらるゝ、琴の音のきかるゝよて、自然を主

としていふ詞なり。他は然せらるゝ詞とい、例へむ、已が書畫の、他はみらるゝ、已が琴の音を、他はきかるゝなど、他を主としていふ詞なり。今以上を圖はあらわせば、左のごとし。

第一 然る詞

おのづから然る詞
みづから然る詞

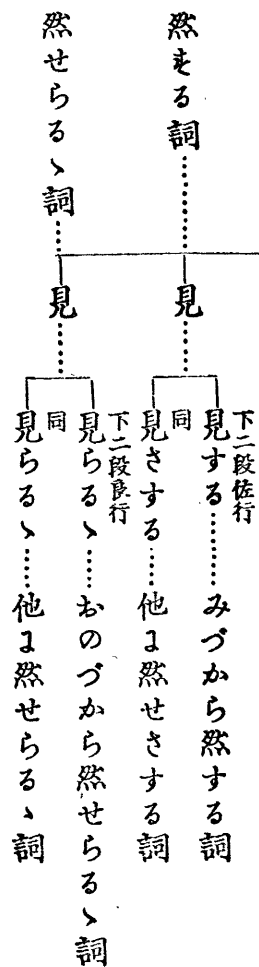
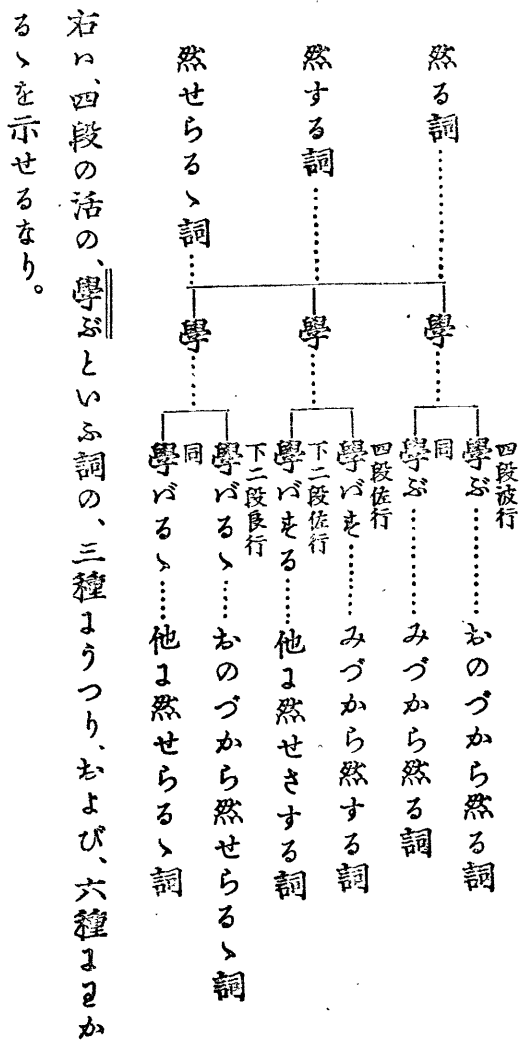
第二 然せる詞

みづから然する詞
他は然せきするゝ詞

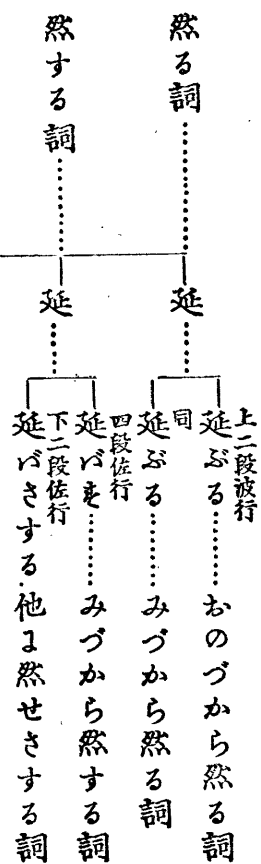
第三 然せらるゝ詞

おのづから然せらるゝ詞
他は然せらるゝ詞

これを合せて、自他の六種といふ。この六種を以て、詞の自他を區別するなり。今その例をあぐれば、左の如し。



右に、上一段のそたらさの、見といふ詞の、三種よりつり、および、六種
よりかるゝを示せるなり。



然せらるゝ詞……延……

延下二段良行ばさるゝ、おのづから然せらるゝ詞
延同ばさるゝ、他は然せらるゝ詞

右に、上二段のそたらきの、延ひといふ詞の、三種はうつり、および、六種はとかるゝを示せるなり。

然る詞………解………

解下二段加行くる………おのづから然る詞
解同くる………みづから然る詞

然する詞………解………

解四段加行く………みづから然する詞
解下二段佐行る………他は然せさする詞

然せらるゝ詞………解………

解下二段良行るゝ………おのづから然せらるゝ詞
解同るゝ………他は然せらるゝ詞

右に、下二段のそたらきの、解けといふ詞の、三種はうつり、および、六種はとかるゝを示せるなり。

用言命令格

作用言の命令詞となるに、四段活はありて、第五變化、即ち已然段を以て、命令詞とするなり。又、上一段、下一段、上二段、下二段活は、第一變化、即ち未然段を以て、命令詞とするなり。又變格は、加行佐行は於ては、未然段。奈行良行は於ては、已然段を以て、命令詞とするなり。

されどこれら多くの、命令辭のよの添へりて、初て命令詞となるものとして、單は作用言のみよて、命令詞となるもの、四段活、および、變格の加行、奈行、良行のみなり。但しよを添へても、いふなり。左よその

例をあぐれば、

四段活 汝に行け

汝に取れ

加行變格 汝に來

奈行變格 汝に去ね

汝に死ね

良行變格 汝にあれ

汝に居れ

などのごとし。但し、下二段に、古くは、よを添へずして、直に命令となしゐることあり。
 古今俳諧「ふしのねのならぬおもひもえどもえ
 神だよけたぬむなしけふりを」、堀川百首「そやこどもをふねさし
 よせゐのみゆる島根のそちす折らまくもほし」順集「ゑごひする君
 がとしたかしたかれの野よな放ちを早く手よをゑ」、などの、もえ、よ
 せ、をゑの如し。

又變格佐行も、古くはよを添へずして、直に命令となしたることあり。
 萬葉集「まをらをのふしめなげきてつくりたるまたり柳のゐつらせ
 じぎも」、などのせなり。

又、形狀言の、變格良行の一格は活きて、已然段のゐれとなる時、命令
 となるなり。即ちよかれ、あしゐれなどなり。されど、よけれ、あしけれ
 といふ、いそぬ例なり。

用言崇敬格

用言は、崇敬の意をあらわすものあり。それは二種あり。一は、詞の轉用
 よりするもの、一は、たまふ、まつる、たてまつる、あそむす、とべる、ます
 などいふ詞を添ふるものなり。

是

狹衣物語

薯蕷圖

かゝる人

金葉集

2、琴ひ

源氏物語

10 20 30 40 50

四段活

加行は活くべき詞

あく

あざむく

あへく

あむく

3

い
だ
く

52

館

欺

噤

發

生

把

齋

あゝ

あふく

ありく

いそが

いたゞく

いなく

明

御

步

急

戴

嘶

いたづく

うく

うまらぐ

うづく

うめく

おく

おほめく

およぐ

かく

かぐ

かしぐ

勞

浮

薄

痛

呻吟

置

惚

游

搔

嗅

吹

うごく

うそぶく

うなづく

うづまく

おどろく

おもむく

かく

かぐやく

かしづく

動

肅

點頭

渦巻

驚

趣

書

煙

崇

かたぶく

かまぐ

きく

きづく

くゝ

くつろぐ

くるめく

こぐ

さく

さゝめく

さやぐ

傾

乾

聽

築

漏

寛

眩

漕

咲

躡

噪

かつく

きしめく

きらめく

くだく

くどく

さく

さゝやく

さまぐ

被

轟

耀

碎

口説

裂

私言

騷

さゞやぐ

まぐ

まのぐ

ありぞぐ

まぐ

まぐ

まだぐ

せぐ

そぐ

そむぐ

そよめぐ

爽

敷

疲

退

好

耕

集

塞

殺

背

動揺

まどく

まはぶく

まぐ

まゝぐ

せめぐ

そゝぐ

そよぐ

退

咬

透

灌

聞

灌

戦

たく

たなびく

たをやぐ

つく

つぐ

つぎく

つまづく

つぶやく

とく

とづく

とろゝく

焼

棚引

窺脱

付

繼

續

蹶

聶

解

塚

蕩

たゞく

たひらぐ

つく

つゝく

つなぐ

つらぬく

とぐ

とろく

敵

平

突

啄

繫

貫

研

轟

なく
なげく
なまめく
ぬく
ぬるづく
ねく
のく
のぞく
そく
そく
そたく

泣
敷
妍
拔
叩頭
祈
退
覲
吐
剝
霹靂

なぐ
なびく
ぬく
のぞく
そく
そく
そく
そぶく

和
靡
腕
除
掃
彈
省

そるく
ひく
ひしぐ
ひしめく
ひらく
ふく
ふさぐ
ふせぐ
ほく
まく
まじろく

達閑
引
拉
犇
開
吹
塞
防
祝
蔭
瞬

ひざまづく
ひきく
ひらめく
ふく
ふたぐ
ふく
まねく
まく

踴躍
響
閃
拭
塞
吹雪
捲
招

佐行は活くべき詞

みがく
みつぐ
むく
やく
ゆく
まぐ
まのやぐ
まらぐ
まぐ

磨 貢 向 焼 行 避 分 若 咲笑 招

みちびく
やたらぐ
ゆらく
まぐ
まなぐ
まのく

導 柔 動揺 沸 戦慄 戦慄

あをを
あまを
いのを
いたを
いまを
うごを
うつぶを
うながを
うのを
おを
おくらを

明 餘 令活 致 坐 動 俯 促 令濟 押 令後

あそむを
あらを
いそがを
いだを
うつを
うつろを
うるほを
うもらを
おを
おこを

遊 顯 令急 出 移 令移 潤 令埋 壓 起

おとを	おどろを	おほを	おもほしめを	おろを	かを	かざを	かへを	からを	きこを	きざを
落	令驚	生	思召	下	貸	頭挿	返	令枯	聞	萌
おどを	おびやを	おほを	おもほを	おとしまを	かくを	かを	かよを	かまを	きこしめを	きやを
威嚇	劫	思	及	坐	隠	替	令通	乾	聞食	消

くだを	くづを	くらを	けを	こを	こゝろざを	こらを	さを	さとを	さらを	あめを
腐	崩	暮	消	越	志	懲	挿	諭	晒	示
くだを	くろまを	けがを	こがを	こぼを	ころを	さがを	さまを	さぶらを	さぶらを	あぶらを
下	令黒	織	焦	覆	殺	探	醒	令侍	令澁	

あるを	記	あろしめを	知召
をるを	賺	まぐを	過
をまを	清	まほを	濟
そゝのを	唆		
たを	糺	たを	令爛
たふを	倒	たまを	令賜
ためを	試	たらを	令足
たゝよを	令漂		
ちらを	令散		
つゐを	違	つくを	盡
つひやを	費	つぶを	潰

てらを	照	てらを	街
とぎを	鎖	とろを	令轟
とほを	通	ともを	燈
なを	爲	なを	産
ながを	流	なびを	令靡
なほを	直	なやまを	令惱
ならを	鳴	ならを	平
ならを	馴		
まがを	令逃	まほを	令勾
ぬらを	濡		
ねぎを	根刺	ねたまを	令妬

のこを

残

のむを

延

そたを

果

そづを

外

そたらを

令活

そしらを

令走

そやを

難

そらを

晴

そなを

放

そらを

曇

ひたを

浸

ひたを

餐

ひを

令響

ふるを

古

ふを

卧

ふるを

亡

ふらを

令降

ほころばを

令綻

ほを

干

ほろばを

亡

ほとを

施

ほろばを

亡

まを

増

まよを

令迷

まざらを

令紛

まを

任

ましを

坐

まを

廻

まを

申

まろむを

轉

まどを

令惑

みそなを

覽

みめを

見巡

みそなを

覽

みだを

亂

みそなを

覽

むを

産

めを

廻

めを

召

めを

廻

もどを

戻

もらを

漏

もてなを

饗

もよほを

催

やつを	やどを	宿
やを		
ゆるを		
よさを		
まのを	またを	渡
まなゝのを		
をを		
をを		
多行は活くべき詞		
あやまつ		
うつ	うがつ	穿
打		
過		
食		
令醉		
令慄		
涌		
任		
免		
和		
寢		

かつ	かこつ	托
けつ		
こぼつ		
そだつ		
たつ	たつ	斷
たもつ	たぎつ	瀑
となつ		
ひづ	ひたつ	日立
ひとりごつ		
へだつ		
まつ	まつりごつ	政
待		
隔		
獨言		
浸		
放		
保		
立		
盲		
療		
消		
勝		

波行は活くべき詞

みつ

満

もつ

もみづ

紅葉

まゐつ

分

あきなふ

商

あげつらふ

論

あざむらふ

冷笑

あそぶ

遊

あたふ

與

あたふ

能

あたなふ

仇

あつゐふ

扱

あひしらふ

應接

あへしらふ

應答

あらふ

洗

あらがふ

争

あらそふ

争

あそれふ

憐

いふ

云

いこふ

憩

いさゐふ

争

いざなふ

誘

いとふ

厭

いとふ

祝

いらふ

辭

いらふ

窺

うゐふ

浮

うゐふ

占

うしなふ

失

うたふ

譁

うたがふ

疑

うらなふ

奪

うつろふ

移

うむふ

諾

うるふ

潤

うべなふ

追

うやまふ

敬

おふ

負

おふ

おぶ
おそふ
おほふ
およぶ
かふ
かゝづらふ
かたらふ
かよふ
きとふ
きらふ
くらふ

帯 襲 覆 及 養 懸 語 通 競 燃 食

おこなふ
おとなふ
おもふ
おぎなふ
かふ
かこふ
かなふ
きほふ
くらふ

行 音信 思 補 買 圓 叶 競 喰

くらふ
こふ
さめふ
さすらふ
さまよふ
あたふ
あつらふ
あのは
まふ
ままふ
そふ

狂 乞 逆 左遷 吟 慕 修理 忍 吸 住 添

ころふ
さけふ
さそふ
さむらふ
あたがふ
まなふ
まくふ
ままふ
そこなふ

噴 叫 驚 侍 順 藝 救 爭 傷

そろふ
 たぶ
 ちがふ
 つかふ
 つくふ
 つたふ
 つみなふ
 てらふ
 とふ
 とこふ
 とふらふ

揃
 給
 違
 遣
 償
 傳
 刑
 衙
 問
 咀
 訪

たがふ
 つがふ
 つくろふ
 つどふ
 とふ
 とゝのふ
 ともなふ

違
 番
 繕
 集
 飛
 調
 伴

なづらふ
 ならぶ
 まぎらふ
 にほふ
 ぬふ
 ねがふ
 ねらふ
 のごふ
 のろふ
 もふ
 もらふ

准
 並
 賑
 匂
 縫
 願
 睨
 拭
 呪咀
 這
 計

ならふ
 になふ
 ねぞらふ
 のたまふ
 もこふ
 もらふ

習
 擔
 勞
 宣
 運
 拂

そちらふ

耻

ひろふ

拾

ふさふ

ふるふ

振

ふるまふ

起居

へつらふ

諂

まふ

舞

まがふ

紛

まのなふ

賄

まじなふ

禁壓

まじらふ

交

まつろふ

服順

まどふ

惑

まとふ

纏

まなふ

學

まねふ

學

まひなふ

賂

まよふ

迷

まろふ

轉

むろふ

向

むをふ

𠂔

むせぶ

咽

もらふ

貰

やしなふ

養

やすらふ

休

やとふ

雇

やらふ

逐

ゆふ

結

ゆるふ

弛

よぶ

呼

よそふ

粧

よむふ

呼

よろふ

具

よろこぶ

悦

よろぼふ

弱

まづらふ

煩

まらふ

笑

麻行は活くべき詞

ゑふ

醉

あむ

編

あゐむ

あざむ

驚

あそれむ

あやしむ

怪

あやぶむ

あゆむ

歩

あゐらむ

あをむ

青

赤 危 隣 赤

いむ

忌

いさむ

いそしむ

功

いたむ

いつくしむ

愛

いとむ

いとなむ

譽

いとほしむ

勇 痛 挑 勞

いむむ

聚

うむ

うむ

産

うづむ

うつくしむ

倦

うとむ

うべなむ

話

うらやむ

うるそしむ

麗

うれしむ

おいむむ

老

うれしむ

かむ

嚙

かゞむ

かこむ

圍

かしこむ

かまむ

霞

かなしむ

さざむ

刺

さむむ

さむむ

黄

さむむ

續 埋 疎 羨 嬉 屈 畏 悲 黄

くむ

組

くむ

汲

くゝむ

含

くゝむ

悔

くるしむ

苦

くろむ

黒

くぼむ

窪

このむ

好

こむ

込

このむ

好

さいなむ

可責

さしくむ

差組

あむ

滌

あがらむ

柵

あゝあむ

縮

あづむ

沈

あぼむ

萎

あらむ

白

あまむ

皴

あむ

濟

あむ

清

あむ

濟

あさむ

荒

あさむ

進

あさむ

涼

あさむ

進

そむ

滌

そねむ

妬

たくむ

巧

たしなむ

曙

たゝむ

疊

たむ

手袂

たのむ

頼

たのしむ

樂

たゆむ

弛

たむ

撓

たゞすむ

才

ちりむむ

鏝

ちむ

縮

ちりむむ

摘

つむ

積

つむ

慎

つゝむ

攫

つゝしむ

慎

つぼむ	とむ	なぐさむ	なづむ	なえむむ	にくむ	まらむ	ぬまむ	ねたむ	のむ	のぞむ
-----	----	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	----	-----

蕾	富	慰	泥	萎	憎	睨	盜	垢	飲	望
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

つぼむ	とよむ	なごむ	なやむ	にむむ	のむ
-----	-----	-----	-----	-----	----

蒼	響	和	惱	鈍	祈
---	---	---	---	---	---

そむ	そさむ	ひがむ	ひるむ	ふむ	むしむむ	もむ	やむ	やまむ	ゆがむ	よむ
----	-----	-----	-----	----	------	----	----	-----	-----	----

食	夾	頑	痺	路	蟲食	揉	病	休	曲	讀
---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---

そぐゝむ	そげむ	ひそむ					やむ	ゆるむ	よどむ
------	-----	-----	--	--	--	--	----	-----	-----

養育	勵	潛					止	綴	迄
----	---	---	--	--	--	--	---	---	---

良行は活くべき詞

ゑむ	をがむ	をろがむ	あがる	あざける	あたゝまる	あなづる	あまる	あらたまる	いる
笑	拜	拜	上	嘲	暖	蔑	餘	改	入

をしむ	あさる	あたる	あつまる	あぶる	あやめる	あやまる	いる
惜	求食	當	集	焚	宵	誤	煎

いかる	いたる	いつてる	いろどる	うる	うづくまる	ある	おくまる	おこる	おそる	おとる
怒	至	偽	衆	費	蹲	織	興	燃	懼	覆

いきどわる	いたる	いのる	うけむる	おくる	おこる	おどる	おこたる	おとる
憤	勞	祈	自任	贈	起	奢	怠	劣

おもねる

かる

かる

あざる

かぶる

かげる

かしこまる

かたる

かなぐる

かへる

きたる

諂

借

莉

屈

被

陰

畏

語

揺投

歸

切

かる

あざる

かざる

かける

かざる

かさなる

かたまる

かゝる

かゝる

きたる

標

懸

限

翔

飾

重

固

代

薫

来

くる

くゝる

くさる

くつがへる

くむる

くびる

くゆる

けづる

こる

こどる

こぼる

繰

絞

腐

覆

配

繼

薫

削

凝

舉

氷

くる

くゝる

くだる

くねる

くもる

くもる

くらがる

こる

ことどる

こもる

鑿

潜

下

倭曲

加

曇

闇

糞

判

籠

さる
 さがる
 さかる
 さづかる
 さへづる
 ある
 あげる
 あむる
 あまる
 あかる
 ある

去 下 離 授 臂 知 茂 縛 緊 吃 招

さかのぼる
 さぐる
 さだまる
 さとる
 さやる
 あさる
 あたゝる
 あぼる
 あめる
 あをる
 あぐる

湖 探 定 悟 障 頻 滴 絞 濕 呵 選
 賣

走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る

吸 居 刺 譏 潔 足 辨 助 尋 便 散

走べる
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る
 走る

之 及 添 垂 手 崇 計 溜 契

つる
つゞる
つもの
つらなる
てる
とる
となる
とまる
なる
なのる
なじる

釣 縷 募 連 照 取 辭 留 鳴 名告 詰

つくる
つゞまる
つもる
とゞこほる
とほる
なる
なぶる
なほる

作 約 積 滯 通 成 騁 直

なまる
にざる
にぶる
ぬる
ねる
ねむる
のる
のどなる
のむる
そる

訛 握 鈍 塗 煉 瞞眠 告 罵 寛 延 張

にざる
にくがる
ねぶる
のる
のこる
のゝしる
のぼる
そる

濁 惡 紺 乘 殘 罵 登 計

入る
 走る
 促る
 憚る
 早る
 光る
 枯る
 夏延る
 降る
 耽る
 焔る
 入る
 走る
 促る
 憚る
 早る
 光る
 枯る
 夏延る
 降る
 耽る
 焔る

入る
 走る
 促る
 憚る
 早る
 光る
 枯る
 夏延る
 降る
 耽る
 焔る

入る
 走る
 促る
 憚る
 早る
 光る
 枯る
 夏延る
 降る
 耽る
 焔る

入る
 走る
 促る
 憚る
 早る
 光る
 枯る
 夏延る
 降る
 耽る
 焔る

堀る
 誇る
 近る
 罷る
 交る
 廻る
 参る
 亂る
 貪る
 洩る
 守る
 堀る
 誇る
 近る
 罷る
 交る
 廻る
 参る
 亂る
 貪る
 洩る
 守る

堀る
 誇る
 近る
 罷る
 交る
 廻る
 参る
 亂る
 貪る
 洩る
 守る

堀る
 誇る
 近る
 罷る
 交る
 廻る
 参る
 亂る
 貪る
 洩る
 守る

堀る
 誇る
 近る
 罷る
 交る
 廻る
 参る
 亂る
 貪る
 洩る
 守る

もどる
やる
やままる
やぶる
ゆる
ゆづる
よる
よこぎる
よどる
よしる

戻 遣 休 破 揺 護 寄 横斷 弱 破 趨

やる
やどる
ゆる
よどる
よこなる
よめる
よめる
よたる

破 宿 揺 過 訛 分 渡

またのまる
ある
をる
をどる

蟠 彫 居 踊

をる
をる
をる

折 終

上一段活

加行は活くべき詞

きる

着

奈行は活くべき詞

にる

似

にる

煮

波行は活くべき詞

ひる

ひる

簾

ひる

干 嚏

麻行は活くべき詞

みる

見

也行は活くべき詞

いる

射

いる

鑄

和行は活くべき詞

ひきある

率

まある

參

もちある

用

ある

居

ある

率

下一段

加行は活くべき詞

ける

蹴

上二段活

加行は活くべき詞

いくる

活

おくる

起

まぐる

過

つくる

盡

とくる

解

なぐる

よくる

まくる

左行は活くべき詞

こむる

多行は活くべき詞

おつる

くつる

とづる

ねづる

もづる

和

避

分

堀

落

朽

閉

捻

耻

おづる

懼

ひづる

もみづる

よづる

波行は活くべき詞

何あらぶる

うとぶる

おふる

おらぶる

こふる

あふる

あのぶる

浸

紅葉

攀

赤

疎

生

叫

戀

強

忍

あらぶる

荒

おとなぶる

長

こぶる

媚

あふる

盲聾

まゝぶる

煤

たけぶる

猛

のぶる

延

ほころぶる

ほろぶる

亡

むつぶる

睦

まぶる

佗

をさなぶる

効

麻行は活くべき詞

うしろむる

後見

うらむる

恨

こゝろむる

試

也行は活くべき詞

おゆる

老

くゆる

悔

こゆる

卧

むくゆる

報

良行は活くべき詞

おるゝ

下

こるゝ

懲

ふるゝ

舊

下二段活

阿行は活くべき詞

加行は活くべき詞

うる

得

こゝろうる

心得

あくる

あぐる

あづくる

あらくる

いくる

預

うくる

活

うくる

淳

おもむくる

受

かくる

懸

かゝぐる

掲

くだくる

碎

さくる

避

さぐる

提

さゝぐる

捧

さづくる

授

さまたぐる

妨

まゐぐる

退

まらくる

白

まゝぐる

精

そむくる

煤氣

たくる

背

たをくる

關

たをくる

助

たむくる

奸

たひらぐる

平

つくる

手向

つゐくる

附

つゐる

告

つゐくる

續

とくる
なぐる
にぐる
ぬくる
ねじくる
のくる
そがる
ひしくる
ひらくる
ひろがる
ふくる

解 救 逃 抜 倭 退 剝 拉 開 廣 更

とがる
なづくる

遂 號

そがる

禿

佐行は活くべき詞

ほどくる
まくる
まうくる
むくる
やくる
よくる
まくる
いまくる
うくる

解 負 設 向 焼 避 分 淺 坐 失

まがる

曲

むくる
やそらがる

剝 和

あそくる

蓬

おほえ	著	仰	
きえ	さかえ	聞	
くえ	令食		
しらえ	知		
たえ	令撓		
つえ	盡		
とらえ	令取		
ならえ	習		
にえ	令似	にほえ	令句
のえ	載		
え	馳	えしらえ	令馳

多行は活くべき詞

ふえ	卧		
まゑ	交	まかえ	仕
まゐらえ	參		
むえ	啜咽		
やえ	瘦		
よえ	寄		
あつ	當	あまつ	周章
いづ	出		
くえだつ	企		
えつ	捨		

奈行ゝ活くべき詞

そだつる
たつる
なづる
ひいづる
へだつる
まゐづる
いぬる
ゐぬる
たがぬる
つゐぬる

育 立 撫 秀 隔 詰 寝 無 東 東

ゐさぬる
たづぬる
つらぬる

重 尋 連

波行ゝ活くべき詞

ぬる
そぬる
ゆだぬる
わがぬる
あふる
あがまふる
あつらふる
うたふる
おきふる
かふる

寝 刻 姿 東 合 崇 訛 押 換

あふる
あたふる
うらふる
おとろふる
かぞふる

能 與 ト 衰 算

かまふる

かまふる

くぶる

くらぶる

こしらふる

さきとふる

あたがふる

まぶる

そふる

たふる

たがふる

かなふる

かむるふる

くもふる

こたふる

さゝふる

あらぶる

そろふる

たぶる

たくとふる

叶

考

加

答

支

調

揃

食

貯

たゝふる

たつきふる

たまふる

ちがふる

つゐふる

つどふる

とゝのふる

とらふる

なぶる

なむらふる

ならぶる

たゝふる

たとふる

つたふる

となふる

ながらふる

なぞふる

構

譬

傳

唱

存生

准

麻行は活くべき詞

のぶる
えふる
ひるふる
ふる
まがふる
まじふる
むるふる
ゆるぶる
わさまふる
あかむる

延 延 扣 歴 紛 交 迎 縁 辨 赤

えらふる
よこたふる
をふる
あがむる

襖 横 終 崇

あきらむる
あえむる
いさむる
うかむる
かすむる
からむる
さそむる
くるしむる
こむる
さむる
しむる

明 輕 諫 泛 掠 縛 極 令 籠 醒 占

あたくむる
あらたむる
いましむる
うつむる
かたむる
きよむる
きたむる
しむる

暖 改 誠 埋 固 清 寔 閑

したゝむる

しづむる

すゝむる

せむる

そむる

そむむる

たむる

たしなむる

たゆむる

ちりむむる

つとむる

しゝむる

しづむる

そむる

たむる

たのむる

たゞむる

縮 沈

初

撓

憑

撓

とむる

とぢむる

なむる

ながさむる

なやむる

えむる

こやむる

ひがむる

ひろむる

ふかむる

ほむる

留

極

嘗

慰

惱

食

早

僻

弘

深

譽

とがむる

とゝむる

ながむる

なだむる

こゝむる

ひそむる

咎

止

諫

宥

始

潜

もとむる

やむる

ゆがむる

をさむる

也行は活くべき詞

あゆる

いゆる

おびゆる

おもほゆる

きゆる

こゆる

やまむる

休

求 止 勾 治

宵

愈

魔

思

消

越

おほゆる

覺

きこゆる

聞

こゆる

肥

さかゆる

そびゆる

たゆる

たゆる

ひゆる

ふゆる

ほゆる

まみゆる

みゆる

もゆる

良行は活くべき詞

榮 聳 絶 生 冷 殖 吼 見 見 燃

もゆる

萌

あるゝ

あふるゝ

いるゝ

うかるゝ

うづもるゝ

おくるゝ

おとづるゝ

かるゝ

きるゝ

くるゝ

くさるゝ

あきるゝ

あらとるゝ

うまるゝ

うもるゝ

おそるゝ

おぼるゝ

かくるゝ

くるゝ

くづるゝ

呆 顯

生 埋

恐 溺

隱

吳 崩

けがるゝ

こがるゝ

こぼたるゝ

しるゝ

まぐるゝ

たるゝ

たふぶるゝ

つかるゝ

なるゝ

ぬるゝ

のがるゝ

織

焦

破壊

知

勝

垂

戯

勞

馴

濡

遁

こぼるゝ

しぐるゝ

またるゝ

たぐるゝ

たふるゝ

つぶるゝ

ながるゝ

零

時雨

廢

爛

倒

潰

荒

えるゝ
 なるゝ
 ふるゝ
 ほるゝ
 まざるゝ
 みだるゝ
 むすぼるゝ
 もるゝ
 やるゝ
 やぶるゝ
 わるゝ

晴 離 鯛 堀 紛 亂 結 洩 破 破 割

腫
 膨脹
 惚
 ほるゝ
 ふくるゝ
 やつるゝ
 わかるゝ
 別 勞

わするゝ
 をるゝ
 和行は活くべき詞

志 折

うゝる
 まうる

飢 居

うゝる

植

變格活

加行は活くべき詞

くる

来

佐行は活くべき詞

おとする

坐

走る

爲

奈行は活くべき詞

いぬる

去

あぬる

死

良行は活くべき詞

有り

有

とべり

侍

をり

居

久活志久活

久活は活くべき詞

何かし

赤

あさし

浅

あつし

熱

何つけし

熱

あきらけし

明

あまし

甘

あをし

青

いちじるし

著

うすし

薄

うれたし

慨

うしろめたし

後護

おそし

晚

おもし

重

かたし

堅

かたし

難

からし

辛

かろし

輕

くろし

黒

けやけし
 さむし
 しろし
 あづけし
 まし
 せまし
 たかし
 ちかし
 つよし
 つゆけし
 とほし

異 寒 白 静 酸 狭 高 近 強 露 速

さむけし
 あげし
 寒 繁
 まみやけし
 速
 たひらけし
 平
 つめたし
 冷

ながし
 にがし
 ねたし
 のどけし
 こやし
 ひくし
 ふかし
 みじかし
 むくつけし
 めでたし
 やすし

長 苦 妬 長閑 早 低 深 短 醜 愛 安

ねぶたし
 はるけし
 ひろし
 廣 遙
 やすらけし
 安

ゆたけし

豊

よまし

弱

よし

善

らうたし

可愛

わろし

惡

をしけし

惜

志久は活くべき詞

何たらし

新

あやし

怪

いやし

賤

うるそし

美

うらめし

恨

おそろし

怖

おとなし

黙

かなし

悲

くもし

くるし

苦

さびし

さびがし

駭

あたし

親

まどし

涼

せとし

忙

たくまし

逞

たどし

正

たのし

楽

ともし

迄

ねがとし

願

とづかし

耻

ひさし

久

まづし

質

むつまじ

睦

むなし

空

めづらし

珍

やまし

病

やぎし

桑

あづらし

煩

あびし

佗

右に用言の活語あり。落合直澄氏のあつめられたる動詞例證によれむ、活語の數三千二百あり。こゝより、その普通のものをあつめたるあり。

何りく何るく、まといまつふなどの如き、二語同意なるは、何りくまといふの方をとりて、何るくまつふの方に省きつ。

用言中四段と、下二段と、二かたゝ活くが如きもの數多あり。この時

意もおのづから異なるなり。まれは、意同じくて、四段と上二段

と、二かたゝ活くものもあり。この四段の方古くして、上二段の方新し。

その證は、忍むむ忍び忍ぶ忍ぶ忍べといふは、四段活なり、これを上二

段よては、忍び忍び忍ぶ忍ぶ忍ぶれといふ。この忍ぶるといふ活

は奈良朝以前よりあることなし。これあるは平安京以来なり。序なれ

むこゝよりいひおくなり。

助 辭

助辭とい、體言用言などは添そりて用ゐらるゝ、短きことをいふ。こを大別して、動助辭、靜助辭の二種とす。

動助辭

動助辭とい、用言の如く、五段に變化するものなり。例へば左のごとし。

第一變化 第二變化 第三變化 第四變化 第五變化

あら あり あり ある あれ

て て つ つる つれ

お に ぬ ぬる ぬれ

○ ○ らむ らむ らめ

第一變化を未然段、第二變化を續用段、第三變化を斷止段、第四變化を續體段、第五變化を已然段といふこと、用言は同じ。又、第三變化即ち斷止段は、ものにばはのが徒の結となり。第四變化即ち續體段は、のがどやかあん(おも)の結となり、第五變化即ち已然段は、こそ其の結となるも、また用言とかへることなし。又、第二變化即ち續用段より、用言はつぎ、例へば行きて見ち、見てかへち、あどのごとし。第三變化即ち斷止段は、そこよてその意斷れ、例へば人もかへりつ、花を折りつあどのごとし。第四變化即ち續體段は、體言はつぎ、例へば折りつる花を、もれなむ。さて又、らむの上は○の印あるは、活くべきことをむあきを示したるものなり。

靜助辭

靜助辭とい、動助辭の反對にて、動き活ぬものをいふ。たとへば、左のごとし。

がな
やそ
だに
さへ
も
に
を

は ば

助辭の分類

動助辭と、靜助辭とよるゝを、助辭は數多の種類あり。今、これを分類して、左の十四とす。

- (一) 不然辭
- (二) 感歎辭
- (三) 希求辭
- (四) 命令辭
- (五) 禁止辭

(六) 疑辭

(七) 想像辭

(八) 決定辭

(九) 反動辭

(十) 抑揚辭

(十一) 接續辭

(十二) 連辭

(十三) 強辭

(十四) 雜辭

(一) 不然辭といふ、打消の意をあらへず助辭あり。即ち左のごとし。

ざら ざり ざり ざる ざれ

む づ ぢ ぬ ね

まじく まじく まじ まじき まじけれ

なく

で

(に) じ

(一) 中にある助辭は、きこめて、古くのみ用ゐられし助辭あり。
以下これよりあらへ。

(二) 感謝辭とい、物に感じたる情をあらわす助辭あり。即ち左のと
し。

な

も

や

よ

を

あな

(あ)も

あ

そく

とも

(あ)

(三) 希求辭とい、心は欲することを、他は請ひ求むる助辭にて、即ち左

のごとし。

なん

ばや

あがな

もがな

しが

もが

(こそ)

(こそ)

(四) 命令辭とい、他よいひおほまる助辭あり。即ち左のごとし。

しめ

しめ

しむ

しむる

しむれ

○

○

○

○

ね

をよ

(五) 禁止辭とい、然をあと止むる助辭あり。即ち左のごとし。

なな

な

(六) 疑辭とい、疑の意をあらとし、又、疑問の意をあらとする助辭をいふ。
即ち左のごとし。

や

あ

この疑辭の上はあらとるゝとき二段係辭とあるなり。

(七) 想像辭とい、目前ならぬこと、又い、定めてなきことを、推し測る助辭あり。即ち左のごとし。

あ	○	○	○	○	○	○	べく	まじく
	○	めり	○	○	○	○	べく	まじく
む	めり	あむ	てむ	けむ	らむ	べし	まじ	
む	める	あむ	てむ	けむ	らむ	べき	まじき	
め	めれ	あめ	てめ	けめ	らめ	べけれ	まじけれ	

(八) 決定辭

じ || ら || (べ || (べ || も ||
し || ら || み ||

た	ち	○	て	か
たり	あり	○	て	に
たり	あり	き	つ	ぬ
たる	ある	し	つる	ぬる
たれ	あれ	しゐ	つれ	ぬれ

けら けり けり ける けれ

○ てふ てふ てへ

ぞ あり

この他おほほし、推して知るべし。又なて、ならたら、けら、未定の助辭にて、助辭の添へりかたより、不然辭とも、想像辭ともなるものなれむ。印を付して他と別てり。以下之はおらへ。

(九) 反動辭といひ、打返りて、その意の裏をいふ助辭なり。即ち左のごとし。

や

そや やも あり あり (おも)

この反動辭は、上にあるとき、二段の係辭となるなり。

(十) 抑揚辭といひ、いひつらねたる意を抑へて、言外の意を起す助辭なり。即ち左のごとし。

つ につ に 在

(十一) 接續辭とい、上の係を結びて、下へいひ續くる助辭なり。

即ち左のごとし。但し下はあげたる接續辭中。との助辭い、他の接續辭と、その性質を異にし、已に結び終りたるものも、更に下へ續くる助辭あり。

と || て || そ || む || ど || に || を || が ||

(十二) 連辭とい、體言と體言とを合せて、一の體言よりつらぬる助辭な

り。即ち左のごとし。

が || の || つ || や ||

(十三) 強辭とい、語勢を強め、又つ、語の調を助くる助辭なり。即ち左のごとし。

し || を || や || (い) ||

(ろ) (ら)

(十四) 雜辭といふ、以上十三種の外、種々の助辭をいふ。その數いとおほく、一々名稱を付するに煩もしければ、今これを雜辭と名づけ、他の助辭と區別せり。即ち左の助辭どもをいふ。

そ || も || の || が || ぞ || なん ||

(なも)

を ||

こそ ||

に ||

へ ||

(がね)

(がに)

だに ||

だも ||

さへ ||

えら ||

の||み||
む||かり||
も||の||ゆ||ゑ||
も||の||か||ら||
ゐ||ら||
な||が||ら||
よ||り||
ま||で||
ご||と||
が||て||
が||て||ら||

(ち)||
(よ)||
と||
さ||
み||
げ||
ら||

以上十四種の、即ち助辭の分類なり。今左に十四種の中の助辭どもを、
一々實例に照し、その意を説明をべし。同種の助辭は、その中の一を説明せり。他は註してあるべきあり。

(一) 不然辭

ざ||ら||
ざ||り||
ざ||る||
ざ||れ||

〔正統記〕一、上古のこといたしめし記しとめざるよや云々」とあり、す何ら、すあり、すある、す何れの約りたる助辭にて、俗といふナイデアルといふ意なり。但し、ざれに打消の命令となることあり。〔拾玉集〕一、あらざれしと思ふ人のみ」とあるに、これなり。

すぬね

〔正統記〕一、三歳よなるまで脚立たず云々」とあり。俗言のナイといふ意の助辭なり。

まじくまじまじきまじけれ

〔正統記〕一、一日も日月をいたぐまじきいそれなり」とあり。俗言のマイといふ意の助辭なり。

なく

〔萬葉集〕一、百あきの大宮人のにぎたつふなのりしけん年のしらなく」とあり。ぬの延りたる助辭なり。

じ

〔正統記〕一、草木の色のあらたまるよもあらじ云々」とあり。未来のことを、然らむといふ助辭なり。

で

〔正統記〕一、御中らひ心よからでまりぞかせ給ひき」とあり。すしてといふ意の助辭なり。

に

〔萬葉集〕一、まをらをと思へる我も草枕旅よしあれを思ひやる

たつきもしらに云々とあり。俗言のナイノデといふ意の助辭なり。

(二) 感歎辭

な

拾遺集 一、あだなりおとりのこわりはかりあるを下よりとく
ることいしらぬ云々とあり。俗にヨナアといふ意の助辭なり。

も

拾遺集 一、時鳥かくや五月のみじの夜もひとりし寐れむあら
し云々ねつ云々とあり。俗にいふマアの意なり。

や

古今集 一、雲をれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこ

そやまめとあり。俗にいふヨナアなり。但し、なもよりの輕さ
かたとしるべし。

よ

後撰集 一、絶えそつるものといひ見つゝさゝがよの糸をたのめ
るころがそさよとあり。やよかなじ。

を

萬葉集 一、足引の山より出づる月待つと人はいひて妹まつ
われを云々とあり。俗言のマアはかなじ。又、ものをといふ意は用
ゐることあり。古今集 一、つひはゆく道といふねて聞きしあ
ど昨日今日とは思わざりしを云々とあるに、これなり。

かな

〔正統記〕は、運の極りぬるゝゝることよこそと不思議も侍りしものゝあ」とあり。慨嘆は用ゐる助辭にて、俗といふザヤナアの意なり。また通ひしては、嘆賞の意はも用ゐるなり。〔拾遺集〕は、まさむくのひむらの霞たちゝへりゝくこそに見ゆあかぬ君のあ」とあるに、これなり。

（あも）

萬葉集は、あら人の衣襟むといふ紫のころろしみておもゆるあも」とあり。悲嘆の意にて、俗といふカマアと同じ義なり。又賞嘆は用ゐることあり。〔同書〕は、山たかみ白木綿花は落ちたざつ瀧のかうちと見れとあるぬあも」とあるに、これなり。

古今集は、あゐなくはまたきも月のゝくるゝゝの山の端はげて入れをもあらなん」とあり。悲嘆は用ゐる助辭にて、俗といふカマアの意なり。又賞嘆は用ゐることあり。〔同書〕は、あさみどり糸よりゝくる白露を玉はもぬける春の柳の」とあるに、これなり。

こや

拾遺集は、君のむむ宿の梢のゆくゝもゝくるゝゝまでゝゝへり見しこや」とあり。俗言のハマアといふ意なり。

こも

古今集は、春日野の雪間をまけて生ひ出つる草のそつかは見えし君こも」とあり。こやはおなじ。

(五)

萬葉集 一、山のそゝあぢむら騷きゆくなれど我そさびしゑ君
よしあそねむ」とあり。やゝおあじ。

(三) 希求辭

まむ

古今集 一、人まれぬ日が通路の關守そよひくごとうちも
寐まふん」とあり。俗言のナラヨイといふ意なり。

ばや

後拾遺集 一、心あらん人に見せむや津の國のなにはわたりの
春のけしきを」とあり。俗言のタイコトヨといふ意なり。

しがな

竹取物語 一、このかぐや姫を得てしがみ見てしがみと音に聞
きつゝ云々」とあり。俗言のタイモノヂヤといふ意なり。

もがな

後撰集 一、名よしおとゞ逢阪山のさねゐづらんよしられてく
るよしもがみ」とあり。しがなゝおあじ。

しが

古今集 一、思ふとぢ春の山邊よりちむれてそこともいとぬ旅
寐してしが」とあり。前はおあじ。

もが

伊勢物語 一、世の中よりさらぬ日あれのなくもがな千世もとい
のる人の子のため」とあり。前はおあじ。

(こせ)

伊勢物語 一、飛ふ螢雲のうへまでいぬべく秋風ふくとあり
 一告げこせ」とあり。俗言のテクレイといふ意にて、命令は近
 き希求辭あり。この助辭は、こせこもと、下二段佐行は活く詞か
 り。されど慣用によりて、助辭の部はあけおくなり。

(こそ)

萬葉集 一、吾妹子がみつゝあぬむん沖の藻の花咲きたらむ我
 一告げこそ」とあり。こせの轉じたるものなり。

(四)命令辭

あめ あむ あむる あむれ

正統記 一、又天の明玉の神をして八坂瓊の玉をつくらしめ天

の日鷲の神をして青幣白幣を作らしめ手置帆負彦狹知の神を
 して大峽小峽の材を切りて瑞の殿を作らしむ」とあり。他は然
 せさほることはいふ助辭なり。

ね

源氏物語 一、はや船出してこの浦をさりねとの給へば云々と
 あり。あのなせと、戀は命令する助辭あり。

よ

正統記 一、我を見る如くせよと勅し給ひける事云々とあり。あ
 るせよといふ命令の下はつけて、上の意を促す助辭なり。

や

古今集 一、聲絶えむなけやうくひま一とせよ二たびとだよ来

べき春のは」とあり。よまなじ。

(を)

萬葉集 一、またりもり舟渡せをとよぶ聲のいたらねのもの
ちの音せぬ」とあり。前まおなじ。

(五) 禁止辭

あそ

正統記 一、端出の繩を引きめくらししてな歸りましそと云々と
あり。な勿れといふ意、そそれと急がしたる助辭なり。

あ

正統記 一、口女今より釣食ふあ又天孫の饌まゐるあとなん
いひふくめける」とあり。俗言のナまおなじ。

(六) 疑辭

や

正統記 一、あゝるたやひまや侍りけん云々とあり。疑ひしく、定
めかたく、思ふ意をあらそを助辭なり。又、問は用ゐる助辭あ
り。同書 一、尊とれよくれんやと宣ふ」とある、これなり。但し、
疑はまれ、問はまれ、この助辭は、何、幾、誰、如何の類の下に、置
かぬ定めなり。その時、まべて、次のゐる用ゐる例なり。

あ

正統記 一、帝王いづくをあらせ給ふべきに」とあり。やと
おなじく、二の意あり。この疑を意味せる用例なり。問のゐ
たる同書 一、皇孫いづくゐいたりまし、まをべきと問ひしゐ

む云々」とあるに、これなり。

(七) 想像辭

まじく まじ まじき まじけれ

正統記 一、まして末の世はまさしき御譲なくて保たせ給ふまじき事と心得奉るべきなり」とあり。不煞辭のよおなじき意なり。

べく べし べき べけれ

正統記 一、餘の七州をもすべて邪麻土といふなるべし」とあり。俗言のベイよおなじ。

まし ましろ

正統記 一、磐長姫恨みいかりて我をもめさましろの世の人の

命長くて磐石の如くあらまし」とあり。俗言のマシヤウよおなじ。

らむ らめ

古今集 一、久ゐたのひかりのどけき春の日よまづ心かく花のちるらむ」とあり。俗言のデアラウよおなじ。

けむ けめ

正統記 一、深き御心をとめ給ひけむぞるし」とあり。過去を想像する助辭なり。

てむ てめ

古今集 一、春日野の飛ぶ日の野守出て見よ今幾日ありて若葉つみてむ」とあり。あおせんといふ意の助辭なり。

なむ なめ

〔正統記〕 1、木の花のことくは散り落ちなむ云々」とあり。ならんといふ意の助辭なり。

めり める めれ

〔正統記〕 2、宗の長をも天台座主といふめり」とあり。俗言のヤウスデヤといふ意の助辭なり。

む め

〔正統記〕 1、能思ひならしせる故はこそあらめ」とあり。俗言のウは同じき助辭なり。

な

〔萬葉集〕 1、梅の花咲きたるそのゝあを柳をかづらよしつゝあ

そびくらさな」とあり。むはかなじ。但し、己よつきてのみいひて、他よつきていゝとぞ。

も

〔萬葉集〕 1、あみつけのさのだのなべのむらなへよこととさためつ今いいかよせも」とあり。前よかなじ。

べみ

〔古今集〕 1、さほやまのこゝその紅葉散りぬべみ夜さへ見よとてらを月のげ」とあり。べしの居りて靜助辭となれるものよて、高み、善みなどの格は同じ。べきよよりてといふ意なり。

べら

〔古今集〕 1、おきとむる花しなければうくひをもては物うく

ありぬべらなり」とあり。未來のことを想像していふ助辭にて
旨ら強らなどの格も同じ。但しこの助辭は、古今集時代のみ、
用ゐしものにて、その前後は、全く見えぬ。

らし

後漢集 一、撫子の花ちりかたはなりはけりまかまつ秋ぞちか
くなるらし」とあり。俗言のラシイはおなじ。

じ

正統記 一、私を先として公を忘るゝ心あるならば世は久しき
理侍らし」とあり。俗言のナイグラウといふ意にて、未來のこ
とを想像する助辭なり。

(八) 決定辭

な に ぬ ぬる ぬれ

正統記 一、あの東宮の御末ぞ繼體せさせ給ひぬる」とあり。自
然は過ぎされることをいひきこむる助辭なり。

て つ つる つれ

正統記 一、姉もあたち見よくかりければあへしつ」とあり。あ
まざの過ぎ去れることをいひきこむる助辭なり。

き し しあ

正統記 一、まことは國の費えところなり侍りしあ云々」とあり。
あとかたもなく、過ぎ去りしをいひきこむる助辭なり。

なら なり なる なれ

古今集 一、秋の野は人まつ蟲の聲をなりまればかに行きていざ

とふらとん」とあり。第三變化斷止段をうけて。慥よいひ定むる助辭なり。又、體言及び用言動助辭の第四變化續體段をかけて、にありといふ意とあることあり。**正統記** 一、功徳を施せる人ありき云々、又、**同書** 一、宗廟の御心をあらんと思ひ、唯正道をさきとまべきあり」とあるに、これなり。但し、なれに、命令の意をあらとすことあり。

たら たり たる たれ

正統記 一、後漢書は、大倭王を耶麻堆と居ると見えたり」とあり。て何りの約りたる助辭なり。但、たれに、命令ともなることあり。

けら けり ける けれ

正統記 一、一人の少女を居ゑてかき撫でつゝ泣きけり」とあり。

俗言のタワイといふ意の助辭なり。

てふ てへ

古今集 一、思ふてふ人のこゝろのくまごとと立あくれつゝ見るよしもがな」とあり。といふの約りたる助辭なり。この歌のみいひて、文章には用ゐぬ。但し、てへに命令ともなるなり。**同書** 一、今さらは問ふべき人もおほえむやへむくらして門させりてへ」とあるに、これなり。又、この助辭、古くに、ちふ、とふといへり。**萬葉集** 一、あら國の虎ちふ神をいけどりよハとりもちき云々」とあり。又、**同書** 一、みよし野のみゝゐの山は時じくぞ雪いふるとふ云々」とあり。いづれも、てふはおなじ。

あし

〔正統記〕は、二神御とめありぬべき事ぞありとあり。上よて斷れて定りたるを、再びかし極むる助辭なり。

ぞ

〔正統記〕は、二神の御とがめあるべきぞとあり。のしとかなじく、一段強くいひ極むる助辭なり。

(九) 反動辭

やこ

〔正統記〕は、この人の歌道なども譽ありしもの物ゝぬ程の事やとあるべきとあり。決して然らむといふ意をもてる助辭なり。但し、このやこは、疑辭のやとかなじく、何、幾、誰、如何の類の下よは、のしといひて、用ゐる例あり。

やも

萬葉集 1、かく山のまきの葉しぬき降る雪の降りはますともつちよおかめやもとあり。前よおなじ。

や

〔正統記〕は、いろは天の下の君たるものをうまざらんやとて云云とあり。前よおなじ。

のし

古今集 1、聲絶えむ鳴けや鶯一年よふたゝびとたよくべき春のはとあり。前よおなじくして、いさゝの切なり。

のも

萬葉集 1、橋の下ふく風のゐくとしき筑波の山を戀ひざらめ

のも」とあり。前はおなじ。

正統記 一、末代いうであつしませ給はざるべき云々」とあり、前はおなじ。

(十) 抑揚辭

つゝ

古今集 一、山里は秋こそことよまびしけれ鹿のなくねよめをさましつゝ」とあり。ての重りたる助辭にて。ての音轉なり。多くの、下は形狀言を含む。又句の中はある時に、多く、あゐらの意なり。但し、その時に、抑揚辭はあらむ。正統記 一、一人の少女を居ゑるさなでつゝ泣きけり」とあるに、これなり。

に

古今集 一、あるしなきねをもなくかなうぐひまの今年のみ散る花あらなくに」とあり。俗言のノニマアといふおなじ。多くの、歌は用ゐるなり。

を

古今集 一、つひは行く道とゐゐねて聞きしかど昨日今日とゐ思ひざりしを」とあり。ものをといふ意の助辭なり。これも、大方に歌は用ゐるなり。

(十一) 接續辭

と

正統記 一、この御時に攝政し給ふと見えたり」とあり。意詞共

は切れたるを受けて、更はいひ起を助辭なり。

て

正統記 は、正位は即き給ひけるにこそ即麿戸の皇子を皇太子として萬機の政をまかせ給ふ」とあり。上の意を結ひてむて、下へいひつゞくる助辭なり。

そ

徒然草 は、のこる松さへ峯はさびしきといへる歌をぞいふなるに誠はをこしくたけたるをがたよもや見ゆらん」とあり。前はななじ。

む

正統記 は、七代まで保てるこそ彼が餘黨なれば恨むるところ

なしといひつべし」とあり。前はおなじ。

ど

正統記 は、これぞ正しき重祚あれど二代とて立てむ」とあり。前はおなじ。

に

正統記 は、その使を遣隋大使となん名つけられしは二十七年己卯の年隋滅びて唐の世よりつりぬ」とあり。前はおなじ。

を

古今集 は、夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいつこは月やどるらむ」とあり。前はおなじ。

が

〔正統記〕よ、もとの鯨倉のたちよなん下りしがその後征夷將軍
よ拜任せ」とあり。前よおなじ。

(十二) 連辭

の

〔正統記〕よ、大倭の磯城島の金刺の官よましませ」とあり。上の
詞の意を挾め、下の詞を主としていふ助辭なり。

が

〔正統記〕よ、あの義國が孫なりし義氏に云々」とあり。詞と、詞と
の間よありて、上の詞を主としていふ助辭なり。

つ

〔正統記〕よ、元亨甲子の九月の末つ方云々」とあり。のよおなじ。

や

〔古今集〕よ、何ふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君
が千歳に」とあり。前よおなじ。

(十三) 強辭

し

〔古今集〕よ、なきとむる花しなれば驚もてはものうくなり
ぬべらなり」とあり。それととり出で、強むる助辭なり。

を

〔古今集〕よ、萩が花ちるらん小野のつゆしもよぬれてをゆかん
さ夜はふくとも」とあり。前よおなじ。

や

新古今集 2、きりくまふくしもよのさむしろは衣かたし
きひとりかもねん」とあり。前はおなじ。

(い)

萬葉集 2、まがせこが何とふみもとの追行かば紀の關守いと
ゝめてんのも」とあり。前はおなじ。

(ろ)

萬葉集 2、何らをらの妻子のなりをば思をろ年の八とせを
待てどきまさむ」とあり。前はおなじ。

(ら)

萬葉集 2、子をら妻をらかきてらもさぬ」とあり。前はおなじ。

(十四) 雜辭

と

正統記 1、平氏ほろびて後内侍所神重とるへりいらせ給ふ」と
あり。物を二つに分つ意のある助辭なり。

も

正統記 1、皇子もうしなそれ給ひぬ頼政も滅びぬ」とあり。物
二を、一は合せる意の助辭なり。

の

正統記 1、未秋のをさめよも及とぬよ世の中のをほりにける
とあり。上の詞の意を、主としていふこと、連辭ののをおなじ。

が

古今集 1、うつゝよいさもこそあらめ夢よさへ人めをもると

見るがどひしき」とあり。前よおなじ。
ぞ

〔正統記〕よ、ためしなきほとよど作り調べさせ給ひける」とあり。廣き物の中よて、その一を指し意の助辭なり。

なむ

〔正統記〕よ、御中らひあしくて何やぶみ思し召を程のことになむありける」とあり。それと、一つおさへて、いふ意の助辭なり。

(なも)

萬葉集よ、いつそなもこひむあるとはあらねどもうたてこのごろ戀の繫きも」とあり。なむの古言なり。

おそ

〔正統記〕よ、今こそこの天皇うたがひなき繼體の正統よ定らせ給ひぬれ」とあり。ぞとおなじけれと、それよりと、猶一きと強き助辭なり。さて、以上ともと一段係辭よて、のがと一段二段の係辭なり。ぞ、なむ、なも、二段係辭よて、このこそ、三段係辭なり。

を

〔正統記〕よ、いよ／＼傲をきはめ權をほしまゝにま」とあり。物を引よまる意の助辭なり。故よこの助辭の下よ、必む、然まる詞のあらとるゝ定めなり。

に

〔正統記〕よ、在位の君又位よそなをり給へるむありなり」とあり。

り。下の詞を、上の詞はそへよまる意の助辭なり。又、如くといふ意なるあり。古今集は、夕ぐれに雲のたてはものと思ふ天つそらなる人を戀ふとて」とあるに、これなり。

へ

伊勢物語は、昔男東へゆきけるに云々」とあり。に同意なれと。に直はそのものを指し、へはそのまたを、大あたよさを助辭なり。

(がね)

古今集は、我せこがあなしの山の山人と人も見るがね山うつらせよ」とありて、あねといふ詞の居りたるなり。豫じめ、しかく意にて、萬葉集は、あねてより君さまさむとしらませば門は

宿はも玉しあましを」とあるに、あなは伊勢物語は婿がね

源氏物語は后がねなどもあり。然れども、慣用は從ひて、下なるがにがてがてらと共に、はく助辭の部はあけおくなり。

(がに)

古今集は、なく涙雨とふらなむるたり川水まさりなにかへりくるがに」とあり。がねの音轉はして、その意、前はおなじ。

(がて)

古今集は、夜やくらき道やまとへるほととぎす我宿をしも過ぎがてはなく」とあり。これもあねの音轉にて、下二段は活く詞なり。夫れ故は、萬葉集は、ありがてましむ、又、知りがてぬるも」と、未然段。或は續用段の動助辭へもつくくなり。意味

に萬葉集は、流るゝ涙とゝめぬねつも」などあるは同じく、難
きといふ義なりと知るべし。

がてら

古今集は、我宿の花見がてらよ来る人の散りなむのちぞ戀し
あるべき」とあり。これも、かねの居體言よらの添そりたるも
のにて、意味は俗言のカチルと同じ。

だに

正統記は、上古の事の慥は記しとゞめざるにや應神の御世は
渡れる經史だも今も見えむ」とあり。ひたすら、又、せめて、こ
れなりとも、といふ意の助辭なり。

だも

三部抄は、我をたのまんものよだもあらば云々とあり。または
の意の助辭なり。

さへ

正統記は、御みつゝら旗の銘をゐゝしめ給ひさまゝの兵器
をさへ下し給そり云々とあり。あるが上は、ものゝ添はる意の
助辭なり。

まら

正統記は、只東を仁ありて命長しよりて大弓の字を従ふとい
乳子の時をらこなたの事を知り給ひければ云々とあり。俗にい
ふサへの意の助辭なり。

のみ

〔正統記〕は、顯密の兩宗は歸し給ひしのみならず云々とあり。上のことむをゐけて、其をおしきそめて、切よいふ助辭なり。

むあり

枕草紙 一、大藏卿むあり耳とき人になし蚊の眉毛の落るやともきつけ云々とありとあるといふ詞の、居りたるよて、ほどといふ意の助辭なり。又俗言のバツカリといふ意なるもあり。

正統記 一、中古よりこのあたその名むかりよて戒體を守ること絶えよけるを云々とあるに、これなり。

ものゆゑ

伊勢物語 一、とるかなるほとよも通ふ心かなさりとて人のしらぬものゆゑとあり。ものながらといふ意の助辭なり。又もの

よよりといふ意なるもあり。源氏物語 一、いざやこの世よながあらざらんものゆゑなをくならんほたしなとのあらんこそいとをしゐるべけれとあるに、これなり。

ものあら

古今集 一、時鳥がなくなさとのあまたあればなほうとまれぬ思ふものあらとあり。ものゆゑよおなじ。

あら

貫之集 一、うきて行く紅葉の色のこきあらは川さへふかく見えたるをなとあり。ニヨリテの意なり。

ながら

正統記 一、御孫ながら御子の儀なれば重服を着させ給ひけり

とあり。そのまゝなるをいふ意の助辭なり。

より

〔正統記〕は、近衛の御門かくれ給ひし頃より内覧をやめられたりし云々」とあり。あらゝかなじ。

まで

〔正統記〕は、文武の官の衣服の色までも定められき」とあり。俗言のマデゝかなじ。

ごと

堀川百首 は、宿もせは朝こと稻をほそよりいこてをゆひてぞかくべかりける」とあり。毎といふ意の助辭なり。

(ゆ)

〔萬葉集〕は、田子の浦ゆ打出てゝ見れば真白よぞ富士の高根よ雪にふりける」とあり。よりといふ意の助辭なり。

(よ)

〔萬葉集〕は、をつくそのしげき木の間よ立つとりの云々」とあり。ゆゝかなじ。

と

〔正統記〕は、名と器とを人よかさむ云々」とあり。ものと、ものを、相對比して、いふ意の助辭なり。

さ

〔古今集〕は、うつゝいさもこそあらめゆめよさへ人目をもると見るがまびしさ」とあり。俗言のイヨナアといふ意なり。

み

〔夫木集〕は、花の香も袖を露けみ小野の山の山の上こそおもひ
やらるれ」とあり。俗言の、サニといふに同じ意の助辭なり。

け

〔落窪物語〕は、物おもひしるげはきくを云々」とあり。俗言のヤウ
スといふ意なり。

ら

〔古今集〕は、まびしらまましらあきそ足引の山のかひある今
日はやいあらぬ」とあり。詞の調は用ゐる助辭なり。

以上の十四分類の助辭の説明なり。この外二以上の助辭の合さりて、
一助辭となるもの數多あり。されど、其意の合はざるとき在意と、ま

かちあらざれば、大かたに省きつ。但し。合はさりて、意味のかゝるもの
はその分類中にあけたり。

體言所屬の助辭

助辭と體言用言等は附屬せざれむ、語をなさむ。されと妄は屬するはあらむ。各所屬ありて、屬を。今左は、體言は屬をべきところの、助辭を示さむ。

決定辭

○	たら	なら
○	たり	なり
てふ	たり	なり
てふ	たる	なる
てへ	たれ	なれ

感嘆辭

も

や ||
 よ ||
 を ||
 な ||
 (な) ||
 ゐ ||
 そ ||
 希求辭
 も ||
 が ||
 も ||
 が ||

禁止辭
 な ||
 そ ||

疑辭

や ||

反動辭

や ||

や ||

ゐ ||

接續辭

と ||

連辭

の || が || つ || へ ||

強辭

|| 一 || を || (い) || (ろ) || (ら) ||

雜辭

そ || も || の || が || ぞ || なん || (な) || も || こ || そ || を || に ||

へ だに だも さへ まら のみ ゐあり ながら より まで

ごと (ゆ) (と) と さ み げ ら

以上の體言所屬の助辭なり。さて、これ等の助辭が、體言よつゝさまをいこむる、例へば、決定辭の、あらありあるおれの助辭が、櫻といふ體言に屬せむる、櫻から、櫻あり、櫻ある、櫻おれ、となるることし。又

感嘆辭はありて、櫻を、希求辭はありて、櫻もが、禁止辭はありて、櫻を、疑辭はありて、櫻を、反動辭はありて、櫻を、接續辭はありて、櫻と見し、連辭はありて、櫻の花、強辭はありて、櫻を、雜辭はありて、櫻を、美しきなどなるがごとし。他のおしてあるべし。

用言所屬の助辭

用言と、いづれも、五變化を有するものなることと、前はいへるが如し。第一變化を未然段といひ、第二變化を續用段、第三變化を斷止段、第四變化を續體段、第五變化を已然段といふことも、前はいへるがごとし。さて、用言所屬の助辭と、用言の變化は従ひ、各別なり。左はその所屬の

助辭を示さむ。

用言第一變化未然段所屬の助辭

不然辭

ざら
ざり
ざり
ざる
ざれ

𪛗 ||
 𪛗 ||
 𪛗 ||
 𪛗 ||
 𪛗 ||

なく

11

て 11

12

希求辭

李人

むで

命令辭

しめ しめ しむ ちむる しむれ

ね

よ

想像辭

ませ まく まし まし ましめ

む む む め

な

も

接續辭

む

用言第二變化續用段所屬の助辭

希求辭

しが

しがあ

もが

もがあ

(こせ)

(こそ)

禁止辭

なそ

な

疑辭

や

や

や

あ

あ

あ

想像辭

○

○

けむ

てむ

けむ

てむ

けめ

てめ

決定辭

○

○

なむ

なむ

なめ

な

て

○

たら

けら

に

て

○

たり

けり

ぬ

つ

き

たり

けり

ぬる

つる

し

たる

ける

ぬれ

つれ

し

たれ

けれ

抑揚辭

つ

強辭

し

を

辭辭

そ

も

ぞ

なん

(なも)

こそ

に

だに

だも

さへ

のみ

ながら

がて

がてら

み

げ

用言第三變化斷止段所屬の助辭

感歎辭

な

も

や ㌞

禁止辭

な ㌞

疑辭

や ㌞

想像辭

まじく ㌞

べく ㌞

○

○

まじく ㌞

べく ㌞

○

めり ㌞

まじ ㌞

べし ㌞

らむ ㌞

めり ㌞

まじき ㌞

べき ㌞

らむ ㌞

める ㌞

まじけれ ㌞

べけれ ㌞

らめ ㌞

めれ ㌞

㌞ (べみ)

㌞ (べら)

らし ㌞

決定辭

○

○

㌞ あり

○

○

㌞ なり

㌞ てふ

㌞ なる

㌞ てふ

㌞ なれ

㌞ てへ

反動辭

㌞ へ

㌞ へ

抑揚辭

に

接續辭

と

強辭

(ろ)

(ら)

雜辭

(がね)

(がに)

むあり

用言第四變化續體段所屬の助辭

感歎辭

よ

を

あな

(おも)

あ

そや

疑辭

あ

決定辭

なら

なり

なり

なる

なれ

ぞ

反動辭

ゐ

抑揚辭

を

接續辭

と

に

を

が

強辭

しや(い)

雜辭

と

も

の

が

ぞ

なん

(な)も

こそ こそ
に こそ
がね こそ
がに こそ
だに こそ
だも こそ
さへ こそ
をら こそ
のみ こそ
むあり こそ

用言第五變化已然段所屬の助辭

ものや
ものゝ
あら
ながら
より
まで
ごと
や
と

感歎辭

な

あ

疑辭

や

あ

反動辭

(やも)

や

接續辭

む

ど

以上の、用言所屬の助辭なり。さてこれ等の助辭が、用言に附屬せるさまを、いへむ、已に前にもいへるがごとく、用言に五變化ありて、その變化は從ひ、各所屬の助辭にも別あれば、その用言の、第一變化の語尾に、第一變化の所屬、即ち、未然段の助辭を附し。第二變化の語尾に、第二變化の所屬、即ち、續用段の助辭を附し。第三第四第五の變化に、同じく、第三、第四、第五の助辭を附せるなり。今こゝに、變格奈行の動詞を舉げて、それを説明せん。變格奈行の動詞を、例はあけたるに五段とも、その語尾ごとかりて、まぎらひしをらざればなり。

去 第一變化 第二變化 第三變化 第四變化 第五變化

死 な に ぬ ぬる ぬれ

右の用言は、その所屬の助辭を附くれば、左のごとし。

^去死_な ^ぬむ ^ぬね
^死に ^むむ ^ぬぬ
 ば

るくのごとく、死なむ、死なぬ、死なね又死おじ、死おむや、死おばあど、動
 助辭と靜助辭とを問てむ、つゞくなり。その他おして知るべし。

^去死_に ^しが ^ああ
^死に ^なな ^そそ
 つ

て つ つる つれ

るくのごとく、死にて、死につ、死につる、死につれ、又死にしがあ、死に

あせそ、死につゝあど、いつれもつゞくなり。

^去死_ぬ ^ななり ^{なる}なる ^{なれ}なれ
^死に ^とと ^むむ
 り

かくのごとく、死ぬあり、死ぬなる、死ぬなれ、又死ぬな、死ぬらし、死ぬ
 と、死ぬむかりなと、いづれもつゞくなり。

^去死_ぬ ^らら ^しし
^死に ^なな ^らら ^しし
 ぬ

なら なる なれ

死

を

ものゝら

かくのごとく、死ぬるから、死ぬるあり、死ぬるある、死ぬるおれ、又死ぬるゐる、死ぬるぞ、死ぬるを、死ぬるものゝらおと、いつれもつゝなり。

去
死ぬれむ
ど

かくのごとく、死ぬれや、死ぬれば、死ぬれじなど、いづれもつゞくなり。

以上より、その變化は従ひて、それ／＼所屬の助辭の異なること、知

らるゝならむ。されど、こゝは注意をべきことあり。その用言の中より作用言と形状言との二ありて、何れも同じく、五變化を有まれども、所屬助辭と、作用言のみ所屬して、形状言は所屬せざるものあり。又形状言のみ所屬して、作用言は所屬せざるものあり。されど、その所屬をさすは、一樣なれば、語格全圖につき、各その所屬の助辭を區別をべし。

用言と助辭と接續上の特例

用言の變化をるゝ従ひ、その所屬の助辭も、各差別あること、已に前よりいへり。然るに、或場合に至りては、全く普通の例を以て、論をべからざるものあり。今左より用例をあげ、その特例なるものを示さむ。

べき

らむ
らめ

らし

と

右の、用言第三變化、即ち、斷止段より、つゞくべき助辭なり。されと、上一段の動詞に限り、第三變化、即ち、續用段が、斷止段の資格となりて、つゞくこともあるなり。その用例をあぐれば、

後集

来て見へき人もあらしなまかやとの梅の初花折りつくしてむ

源氏物語

ともかくも用ゐべきことならむ

古今集

春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝よりぐひをのな

く

萬葉集

しもつけのまぬのそりそらゆくさくさ君こそ見らめまぬのそりそら

同書

春日野は烟たつ見ゆ少女等し春野のうそき摘て煮らしも

同書

萬代は見ともあかめやみよしのゝたきつかうちの大宮と
ころ

の如し。又、土佐日記にも、似へきなと見え云々、六帖にも、松か枝の常

磐は似べき云々なとあり。元来、普通は、見るべき、用ゐるべき、見るらむ、見るらめ、煮るらし、見るともといふべきなり。これを特例の第一とす。

まで

右の、用言第四變化、即ち、續體段より、つゞくべき助辭なり。されど、變格加行の動詞は限り、第三變化、即ち、斷止段が、續體段の資格となりて、つゞくこともあるなり。その用例をあくれば、

萬葉集

父母といひてまたねつくしなるあえびしらたまとりてくまでよ

同書

庭なかのあまその神よこしむさしあれいそむかへりくまでよ

のことし、元來、普通より、来るまでといふべきなり。されど、くまでといふは、歌などの時にかぎり、大かたにつかぬものと知るべし。これを特例の第二とす。

右の助辭は、用言の第三變化、即ち、斷止段より、つゞくべき助辭なり。然るは、形狀言はかぎり、第二變化、即ち、續用段が、斷止段の資格となりて、つゞくこともあるなり。例へば、善しといひ、惡しといひなどの、しよりつゞくは、普通なり、されど、古くより、遠くとも、近くとも、善くとも、惡くともなどのごとく、くよりとよつゞくことあり。これを特例の第三とす。

と

や

てふ

右の助辭は、用言第三變化、即ち、斷止段より、つゞく助辭なり。變格加行の第三變化、即ち、斷止段の語尾は、りなればありと、ありや、ありてふ

など、いづれも、つゞくなり。然るゝこの三助辭を除き、他の斷止段所屬の助辭はつゞくとさへ、りの語尾、るゝ轉じてつゞくなり。故ゝあるらむ、あるべくと、つゞけと、ありらむ、ありべくなどゝ、つゞかざるなり。これを特例の第四とす。

し
あ
そ

右に、用言第二變化、即ち、續用段より、つゞく助辭なり。然るゝ、變格加行佐行はかぎり、常は、第一變化、即ち、未然段が、續用段の資格となり、つゞくなり。今その用例をあぐれば、

古今集 今こそあれ、れもむかしに男山さかゆく時もありこしも
のを

古今集

花の色はうつりよけりあいとつらよしか身世はふるな
めせしまよ

宇津保物語

まき孝の子ならぬ氷とけて魚出てこ孝の子ならまは
な出てこそと泣く云々

同書

天狗の走るよこそあらめなかとせそ云々

などのごとし。普通なれば、来し、来そ、爲し、爲そと、續用段より、つゞくべきなれと、變格加行、佐行はかぎり、未然段が、續用段の資格となり、つゞくを普通とす。されど、加行のかたに、時として、第二變化をうくることもあり。と見え、**源氏物語**、またに**後拾遺**などゝ、まじ方行末「なとありこももと、来し方とありしを、まじ方とよみあやまり、かけるものならむといふ説あり。佐行のかたに、決して、第二變化より、つゞくこ

となし。即ち普通を以て論をべからざる、特例の第五とす。

命令詞所屬の助辭

命令詞所屬の助辭とい、命令の意ある動詞は、所屬する助辭をいふものとして、命令詞はあらざる動詞は、所屬して、命令の意をあらとす、助辭はあらざるなり。今その助辭どもを、左に示をべし。

決定辭

てふ 　てふ 　てへ

あし

感歎辭

な

命令辭

よ

や

(を)

接續辭

と

以上の、命令詞所屬の助辭なり。これらの助辭が、命令詞はつゞくさまに、甚簡單なるものとして、已に用言の部はひたるかごとく、命令格に、四、及び變格奈行、良行にて、已然段下二段及び變格加行、佐行にて、未然段なること、一定し居れば、その下はこの助辭ともを、附するは過ぎず。例へに、決定辭はありて、行けてふ、行けのし、感嘆辭は

て、行け、命令辭はありて、行け、行け、接續辭はありて、行けとあることし。他の準へて知るべきあり。

助辭と助辭との關係

前にもいひたるごとく、助辭は、動助辭と、靜助辭との二あり。今助辭と助辭との接續をのべむにも、左の二の關係を生むべきなり。

(一) 動助辭と助辭との關係及特例

(二) 靜助辭と助辭との關係及特例

(一) 動助辭と助辭との關係

動助辭は、その活きざま、すべて、用言とおなじきものなれば、おれか助辭ふ、くさまも、またかはりたることなし。即ち第一變化よりは、未

然段所屬の助辭はつゞき、第二變化より、續用段所屬の助辭はつゞき、第三變化より、斷止段所屬の助辭はつゞき、第四變化より、續體段所屬の助辭はつゞき、第五變化より、已然段所屬の助辭はつゞきなり。今動助辭一二を取り出て、これか助辭はつゞきさまを説明せむ。

第一變化 第二變化 第三變化 第四變化 第五變化

て て つ つる つれ

な に ぬ ぬる ぬれ

右の動助辭の第一變化は、てとあり。このてとあり、未然段所屬の助辭はつゞきなり。たとへ、

若菜摘みてまし 若菜摘みてば

我行きあまし

我行きあば

などのことく、てとなとの下なる、まし_ば等_り、皆未然段所屬の助辭なり。

又第二變化_り、てと_にとなり。てと_にとより_り、續用段所屬の助辭_はつゞくなり。たとへ_り、

若菜摘みてけり

若菜摘みてき

花散りよけり

花散りにき

などのことく、てと_にとの下なる、けり_き等_り、皆續用段所屬の助辭なり。又第三變化_り、つと_ぬとなり。つと_ぬとより_り、斷止段所屬の助辭_はつゞくなり。たとへ_り、

人の歸りつべし

人の歸りつらし

花咲きぬらむ

花咲きぬと

などのごとく、ぬとつとの下なる、らむ_{べし}とらし_き等_り、皆斷止段所屬の助辭なり。

又第四變化なる_り、つると_ぬとなり。つると_ぬとより_り、續體段所屬の助辭_はつゞくなり。たとへ_り、

まが行きつるあり

まが行きつるを

花の咲きぬるなり

花の咲きぬるさへ

などのごとく、つるぬるの下なる、なりをさ_へ等_り、皆續體段所屬の助辭なり

又第五變化_り、つれと_ぬれとなり。つれ_ぬれとより_り、已然段所屬の助辭_はつゞくなり。たとへ_り、

我行きつれど

花咲きぬれば

などのごとく、つれぬれの下なるど、等、皆已然段所屬の助辭あり。

特例一

こゝはまた、動助辭と、助辭との接續上にも、用言と、その所屬助辭との接續上の特例と、全くおなじき特例あり。今左、その特例ある動助辭を示さむ。

○	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ
	けら	けり	けり	ける	けれ
	たら	たり	たり	たる	たれ
○		なり	なり	なる	なれ

なら なり なり なる なれ

右五動助辭なり。さてこの特例は、用言と、その所屬助辭と接續上の特例なる、第四と同一なり。故に、第三變化のりある語尾よりつゞく、斷止所屬の助辭は、と、や、てふのみよして、この他は、りの語尾、悉くるは轉じて、つゞくなり。されは、なりとなりや、なりてふなど、いへど、なりべく、なりらしなど、いへざるなり。なるべく、なるらしといふべきなり。

特例二

又感嘆辭なるよるもの、第四變化なる續體段所屬の助辭なり。然るも、不然辭なるむといふ動助辭は、かぎり、第三變化なる斷止段が、續體段の資格となりて、つゞくこともあり。これにあるといふ詞を含ませて

もきこゆるなりその用例をあぐれば、

實方集

忘れむよ又るそらむよそらやのしたゝく烟しとむせび

つゝ

萬葉集

あともへるあしくま山のゆつる葉のふくまる時風ふるむのも

のごとし。普通は、忘れぬよ、又ふるぬるもと、つゝくべきなり。

特例三

又連辭なるのは、體言所屬の助辭なるは、第一變化なる未然段所屬のむといふ動助辭、及び第二變化なる續用段所屬のてといふ動助辭はかぎりのよつゝくことあり、その用例をあぐれば、

天曆御集

いきての世しよての後のゝちの世もとねをかこせる鳥

となりなむ。

萬葉集

丹波路の大江の山のさねかつら絶えむの心まれおもそな

くよ

のごとし。

(二) 靜助辭と助辭との關係

靜助辭より、つゝくべき助辭は、靜助辭のみとして、動助辭より、二三の特例を除きては、一切おしと知るべし。靜助辭より、靜助辭はつゝくさまは、甚簡單として、前もいひしごとく、靜助辭は動き活かぬものをいふなれ、用言又は動助辭のごとく、定りたる所屬の助辭あらざるなり。故に、用處によりては、いづれの靜助辭はつゝくるも妨なし。かつ二箇以上の靜助辭のつゞきて、列は一種の意をあらとせるもの、大

かたは、分類中は説明しおきたれば、こゝにはいふべきほどのものなし。直に特例よりつりて、説明すべきなり。

特例一

希求辭なるこせに、靜助辭なり。然るも、こせぬなど、動助辭なるぬもつゞくこと、前より分類中は説明せるごとく、こせに、こせこま、佐行下二段より活くべき用言なるを姑く靜助辭とせしものなれば、普通の靜助辭とことなり、動助辭もつゞくこともあるなり。

特例二

雜辭なるがて、むありに、靜助辭なり。然るも、がてぬ、むありなりなどと、動助辭なるぬ、なりもつゞくに、がてに、あね、あぬと、下二段奈行より活くべき用言の、轉じたるもの、むありに、四段良行より活くべき用言の、

居りたるもの、靜助辭となれるものなれば、普通の靜助辭とことなり、動助辭ももつゞくことあるなり。

特例三

想像辭なるべらに、靜助辭なり。然るも、べらなりなどのごとく、動助辭なるなりもつゞくに、べらに、べきといふ動助辭の、居りたるものなれば、普通の靜助辭とことなり、動助辭もつゞくこともあるなり。

特例四

雜辭なるとに、靜助辭なり。然るも、とてにてなと、動助辭なるてもつゞくことあり。この特例に、前よりあげたる三つの例と、全く性質をこゝとよめるものとして、或詞の略ありて、直に動助辭もつゞきたるなり。たとへば、

古今集

さくら花ちらばちらなむちらまとして故郷人のきても見なくに

古今集

久方の雲の上よて見る菊にあまつ星のとあやまたれぬる
のごとし。初のい、といひての、いひを略きたるもの、後のい、よひての、
しを略きたるものよて、いづれも、用言の略ありて、つぎきたるものな
れば、普通靜助辭といふことなり、直に動助辭よつぐくことゝなるなり。

助辭の時

時といふ、今いひ出でんとする事と、をいひ出づる時の前後、又いふ、同時
なるをいふものよして、即ち左の三とす。

(一) 過去

(二) 現在

(三) 未来

この時をあらわすは、二種あり、一は用言の語尾の變化よりあらわさる
るもの、一は用言は、時を有する助辭を附するものなり。用言の時、用
言五段變化のところよいへり。こゝより、單に助辭の時のみいふと
するなり。さて過去をあらわす助辭は、左の如し。

○ き し しゐ
 ぬ ぬる ぬれ
 つ つる つれ
 たり たり たる たれ
 けり けり ける けれ

又現在をあらわす助辭は、左の如し。

なら なり なる なれ

○ めり める めれ

てふ

又未来をあらわす助辭は、左の如し。

む め

まし

ましか

過去の助辭中、またかのづゐらその差別あり。きししゐは全過去ともいふべきものとして、今日より昨日のことをいひ、本年より昨年のことなどをいふをり、用ゐるものなり。又ぬぬるぬれとてつづつれとい、半過去ともいふべきものとして、現在より近き過去に用ゐるものなり。されど、その用所同じあらむ。ぬぬるぬれは自然の事の過ぎしは用ゐるなり。さてきしは用ゐ、てつづつれは使然の事の過ぎしは用ゐるなり。さてはまた強弱緩急の別もあるなり。又たたりたるたれは過去の現在に残るに用ゐるなり。その故に、てありの約りたるにて、そのては過去、ありは現在なればなり。されどもなほ過去の助辭は屬するなり。又けりけりけるけれは過去の事を今見聞して、驚歎するに用ゐるものなり。

り。但し中古以来その用法二ゝわかれ、さししゝゝと同じき所は用ゐられしものもあり。されど本義はあらざるなり。左は過去の助辭の例を示さむ。

後撰集

山さとの 槇の板戸もさゝざりきたのめし人をまちし宵より

拾遺集

去年見てし秋の月夜にてらせれとあひみし妹にいや速さある

拾遺集

きのふこそ年の暮れし春かすみ春日の山はとやたちよけり

拾遺集

時ならて柝のもみちちりよけりいゝこのもとさびしゝるらむ

古今集

秋のさぬ今やまゝのさりとす夜なゝ鳴るむ風のさむさよ

千載集

妹ありと佐保の川邊をまれば行けば小夜のふけぬる小鳥なくなり

古今集

老いぬればさらぬ別のありといへばいよく見まくほしき君のな

拾遺集

春きてぞ人もとひける山さとの花こそやとのあるじなりけれ

拾遺集

行きやらで山路くらしつゝとゞぎは今一こゑのさゝまゝしきよ

後撰集

いとゝしく物思ふやとの萩の葉は秋と告げつる風のまじ

しさ

拾遺集

秋の野は花てふ花を折りつればまびしらよこそむしもな
まけれ

古今集

君の代はあふ坂山の岩清水木のくれたりとおもひけるの
な

古今集

吹風を鳴さてうらみよ驚けまれやと花は手だふふれた
る

拾遺集

今日までいいきの松原いたれどまの身のうきよなけき
てぞふる

古今集

我やどの道もなきまであれはけりつれなき人をまつとせ
しまよ

古今集

山高みつねはあらしの吹く里のまひもあへむ花ぞちり
ける

古今集

こゝろさし深く深めてし居りければ消えあへぬ雪の花と
見ゆらむ

たけらの二助辭は、過去の過去なれど、その段の未然段なれば、時も
さだめのたきものなり。さて又過去の助辭を二つのさぬことあり。
その大過去ともいふべきものとして、過去を過去と確まいひ定むる
時は用ゐるものなり。例へば書をよみたりき。字をよきにたりなどの
如し。又過去の想像を現すは過去の助辭は想像の助辭を接續す
るなり。例へば書をよみつらむ。字をかきたりけむなどの如し。次は現
在の助辭の例を示さむ。

古今集

秋の野は人まつ蟲の聲すなり我ゐと行きていざとふらむ

拾遺集

もろり舟今どなごさよさよすなるみきとのたつの聲さにくなり

後撰集

まなのなる淺間の山ももゆなればふしの烟のゐひやならむ

後撰集

我やとの庭の秋萩ちりぬめり後見ん人やくやしゐるらむ

後撰集

故郷の野へ見はゆくといふめるをいざもろともは若菜つみてん

拾遺集

うもれ木の中むしとむといふめればくめちの橋のこころ

して行け

古今集

まのぶれはくるしきものを人まれを思ふてふことたれはあたらむ

なりなるなれと、めりめるめれとい、共に現在辭なれど、おのづからその差別あり。なりの方、確はいひ定むる時、めりの方、いさゝの想像の意を含む時は用ゐるなり。ならいとも未然段なれば、たらけらなどの如く、時もさだめられたきものなり。次は未来の助辭の例を示さむ。

古今集

君やこむ我や行ゐむのいざよひは槇の板戸もさゝむねはけり

拾遺集

あさやらば濁りこそせめ淺き瀬の水屑はたれうをませて

も見む

古今集

秋の野は道もまよひぬ松むしの聲する方よやどやからまし

拾遺集

おろかよも思ひましかば東路のふせやといひし野邊はねなまし

むめとましましかとの差別に、むめいたゝ未来をいひあらとすゝ用ゐるもの、ましましかに未来にかけて、切に請ひ望むゝ用ゐるものなり。

以上あけたる如く助辭の時、全く動助辭はかざるなり。靜助辭なるゝも時ありといふ説あれど従ひがたし。

語格全圖

一上	活段四	活段		
加奈波	加佐多波麻良	活行		
着似千	書貸勝飼咀刈	活語		
かき	かき	第一變化未然段		
き	き	第二變化續行段		
に	に	第三變化中止段	第一段結	
さ	さ	第四變化體段	第二段結	
る	る	第五變化已了段	第三段結	
は	は			
た	た			
は	は			
み	み			
ち	ち			
し	し			
き	き			
く	く			
む	む			
ふ	ふ			
つ	つ			
ま	ま			
を	を			
る	る			
に	に			
る	る			
さ	さ			
れ	れ			
に	に			
れ	れ			
は	は			
れ	れ			

格變	活 段 二 下							
佐加	和	良	也	麻	波	奈	多	佐加
爲采	飢	枯	消	埋	辨	蕪	當	瘦受
せこ	系	れ	え	め	へ	ね	て	せけ
しき	系	れ	え	め	へ	ね	て	せけ
まく	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	まく
まくる	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	まくる
まくる	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	まくる
まくれ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	まくれ

	活 段 二 上					下一 活	活 段	
阿	良	也	麻	波	多	佐加	加	和也麻
得	下	老	恨	生	落	堀起	蹴	居射見
え	り	い	み	ひ	ち	しき	け	ゐいみ
え	り	い	み	ひ	ち	しき	け	ゐいみ
う	る	ゆ	む	ふ	つ	まく	ける	ゐいる
うる	る	ゆ	む	ふ	つ	まくる	ける	ゐいる
うれ	る	ゆ	む	ふ	つ	まくれ	けれ	ゐいみ

助辭と接續上作用	久活 志久活 惡善	活	
		良有	奈去
な て ざ ら し め な ら ○ ○ む	し く く	ら な	
に て ざ ら し め な ら ○ む む	し く く	り に	
ぬ っ ざ ら し む な ら ら む む む	し し	り ぬ	
ぬ る つ る さ ら し む る な ら ら む む ぬ	し き	る ぬ	
ぬ れ つ れ ざ ら し む れ な ら ら む む ぬ	し け れ	れ ぬ れ	

言とひとしき動助辭

助辭と接 續上形状 言とひと しき動助 辭										
べく まじく ませ ○	け ら	た ら	○	○	○	○	○	○	○	○
べく まじく まく ○	け り	た り	○	○	○	○	○	○	○	○
べし まじ まし き	け り	た り	な む	て む	け む	て ふ	な り	め り		
べき まじき まし し	け る	た る	な む	て む	け む	て ふ	な る	め る		
べけれ まじけれ ましゐ しゐ	け れ	た れ	な め	て め	け め	て へ	な れ	め れ		

體言所屬助辭									
動助辭					靜助辭				
第一變化未然段	なら				○	たら			
	なり					たり			
第二段結	なれ				○	たれ			
	せれ					たれ			
第三段結	なれ				○	たれ			
	せれ					たれ			
第四變化續體段	なる				○	たる			
	せる					たる			
第五變化已然段	なれ				○	たれ			
	せれ					たれ			

げ	ど	な	が	も	④	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	ふ
ら	り	な	つ	が	禁	も	や	ふ	な	う	ふ	う	も	う	も	も	も	が	

⑤も や よ な うふ (うも) う そや とも 希もがふ
 ⑥が ⑦なぞ な ⑧やう ⑨やと やうと ⑩接と ⑪連の
 が ⑫つ や ⑬強しな (い) (る) (ら) ⑭ももの がぞ なむ
 (なも) こそ な に へ だに (だも) さへ まら のみ
 ⑮ごり うら ながら (ゆ) より まて こと (よ) と さ み
 げ ら ろ

命令詞所屬助辭				
動助辭		靜助辭		
第一變化未然段	○	⑤な ⑥と		
		⑦決らし		
第二段結	○	てふ		
		てふ		
第三段結	○	てふ		
		てふ		

⑤命
 ⑥な
 ⑦決
 ⑧と
 ⑨ら
 ⑩し

右の圖中、二重の横線を引きたるは、變化せる段、及、係結のひとしきを、示さむがためなり。但し、助辭の部分なる二重の横線は、唯變化せる各段の所屬なることを、示したるなり。係結は關したること、文章の部を合せ見るべし。

又助辭中、△印を付したるものは、作用言、及び、助辭と接續上、作用言

とひとしき動助辭のみ、所屬せる助辭なり。○印を付したるもの、形狀言、及び、助辭と接續上形狀言と、ひとしき動助辭のみ、所屬せる助辭なり。他の印なき助辭は、すべて通して、所屬せる助辭とあるべし。

又、助辭と接續上、形狀言とひとしき動助辭中、ませ及び、きの行のだから、形狀言と、その所屬の助辭ひとしければ、間々つかざるものもあり。されど、煩雜を恐れて、別印を付せず、その實際はつき、區別すべきものなり。

又一段結、二段結、三段結とあるの係結の區別は、その助辭の前もいひたれど、猶くこしく、文章の係結法を見て知るべし。

文章

文章といふ、句の集合より成り立つものにして、句は、種々の言語の集合より成り立てり。故に、思想を正しくあらんとせんは、先づ言語の排列を誤らざるやう、注意すべきなり。されど、疑問の意をあらんかんと、疑問は屬したる言語、命令は命令、崇敬は崇敬、希求は希求、想像は想像、感嘆は感嘆、過去現在未來等、各々混同せざるやう、それ／＼は排列しゆくとき、こゝは完全なる句をなし、やがて完全なる文章をなすべし。あかるは、これ等各言語の性質及び關係は、己は言語の部は説明しかきたれば、こゝはこれらを排列して、一の文章を組織せる方法を講むべきなり。而して、今こゝは講むべき文章組

織上は關したる方法の、左の十種とを。

- (一) 係結法 かゝりけりすひ
- (二) 跨續法 またぎ
- (三) 反轉法 かへり
- (四) 省略法 はぶき
- (五) 對語法 むかひことば
- (六) 疊語法 たゞみことば
- (七) 重語法 かさねことば
- (八) 添詞法 そへことば
- (九) 懸詞法 かへりことば
- (十) 解剖法

係結法

係といふは、上はありて、事物をいひ起す助辭なり。結といふは、上の係をいひ結ぶこととなり。さて、その係は、三段の別あり。

第一段係

第二段係

第三段係

第一段係といふ、左の助辭どもをいふ。

を || に || も ||

は || ば || の || が || 徒 || の || ぞ || が || の || や || る ||

第二段係とい、左の助辭どもをいふ。
徒(一段の結のみありて係のなき場合をいふなり)

なむ

なも (なむの古きものよて係りざまもひとし)

第三段係とい、左の助辭をいふ。

こそ

以上第一段係り、三の中、最も輕きものとして、第二段係り、第一段係より重く、第三段係り、最も重きものなり。この係辭り、すべて雜辭として、その意り、共は分類中は説明しおけり。結も、また、三段の別あり。

第一段結

第二段結

第三段結

第一段結、第一段係。第二段結、第二段係。第三段結、第三段係を結ぶなり。されど、結の助辭はかぎらむ、用言はてもむをぶなり。即、第三變化斷止段、第一段結となり、第四變化續體段、第二段結となり、第五變化已然段、第三段結となるなり。左は用言、及び、助辭の結となるものを示さべし。

用言

第一段結

第二段結

第三段結

四段活

く ま つ

く ま つ

け せ て

下一段活

上一段活

ふ む る きる にる ひる みる いる ある

ふ む る きる にる ひる みる いる ある

へ め れ きれ けれ ひれ みる いれ くれ

上二段活

ける

ける

けれ

く

くる

くれ

ま

まる

まれ

つ

つる

つれ

ふ

ふる

ふれ

む

むる

むれ

ゆ

ゆる

ゆれ

る

るゝ

るれ

下二段活

う

うる

うれ

變格活

く

くる

くれ

す

する

すれ

つ

つる

つれ

ぬ

ぬる

ぬれ

ふ

ふる

ふれ

む

むる

むれ

ゆ

ゆる

ゆれ

る

るゝ

るれ

う

うる

うれ

く

くる

くれ

久志久活

る め る

る める る

れ めれ る

し し

しき き

しけれ けれ

助辭

不然辭

を

ぬ

ぬ

ざり

ざる

ざれ

まじ

まじき

まじけれ

命令辭

あむ

あむる

あむれ

想像辭

べし

べき

べけれ

まし

まし

ましめ

らむ

らむ

らめ

けむ

けむ

けめ

てむ

てむ

てめ

なむ

なむ

なめ

めり

める

めれ

む

む

め

決定辭

に	なく	てふ	けり	たり	なり	き	つ	ぬ
---	----	----	----	----	----	---	---	---

てふ	ける	たる	なる	し	つる	ぬる
----	----	----	----	---	----	----

てへ	けれ	たれ	なれ	しあ	つれ	ぬれ
----	----	----	----	----	----	----

不然辭

感嘆辭

とも	そや	か	(かも)	かな	を	よ	や	も	な
----	----	---	------	----	---	---	---	---	---

希求辭

(系)

なむ

むや

しがな

もがな

しが

もが

(こせ)

(こそ)

命令辭

ね

よ

や

禁止辭

なを

な

疑辭

や

か

想像辭

らし

らし

らし

(な)

(も)

決定辭

ど

反動辭

や

や

(やも)

か

か

(かも)

抑揚辭

つゝ

け

を

雜辭

さ

(がね)

(がに)

助辭の中、決定辭のてふ以上の、動助辭として、不然辭のなく以下の、靜助辭なり。左は係結の例を示さむ。

第一段係結

も

正統記 むかしもかゝるためしありき

同書 詩歌の御製もあまた人の口より侍るめり

同書 皇子もうしなれ給ひぬ頼政も滅びぬ

同書 妙音院の師長の大臣も京中を出さる

同書 内宮へも毎日送り給へり

に

正統記 尾張よとゞまり給ふ

同書 かの國は宮簀姫といふ女あり

同書 琴彈原よとゞまれり

同書 大和の國よまし〜き

を

同書 桓武の御世は焼きてられしなり

正統記 熊襲をうたしめ給ふ

同書 三年の春竹内宿禰を大臣とす

同書 芥々よしてあまたの惡神をころしつ

同書 熊襲また反きて邊境をおかしけり

同書 賊徒を焼きころしよき

は

正統記 延喜天曆よりこなたよそまことよかしこき御事なり

同書 主上幼くおとしませ時をひとへは執柄の政ありき

同書 上皇御座の本所とて定められよけり

同書 長者の他人よりたること攝政關白をじまりてをその例なし

ば

正統記 世をそやくましゝしかばこの帝立ち給ふ

同書 かの國は鎮守のつかさをおかれしかば西蕃相通して國家富みさかりなりき

の

古今集 秋萩をまからみふせて鳴鹿のめはい見えむておとのさやけさ

後撰集 夕されば路はゆくをしの獨して妻こひなる聲のかなしさ

が

古今集 うつゝはいさもこそあらめ夢よさへ人めをもると見るがまびしさ

後撰集 風をだまちてぞ花のちりおまし心づからよりつらふがうさ

徒

古今集 秋の野は人まつ虫の聲をなりまれかと行きていざとふらむ

同書 我心なくさめかねつさらしあや壞捨山よてる月を見て

新古今集 春日野の若紫のまり夜忍のみたれかきりしられむ

同書 木の下の苔の緑も見えぬまで八重ちりしける山さくらあ

なほこゝ、一段係の結となるものあり。即ち釣るを釣らく恨むるを恨むらくと延べていふとき、をべて、一段係のみ結ふなり。又、行け恨めおとの命令詞も、一段係のみ結ふ例なり。

第二段係結

の

正統記 いま秋のをさめよも及むぬよ世の中のおほりよ

たる

が

萬葉集 さゝがよの志賀のさゝなみしく、常よと君がお

もほせりける

ぞ

正統記 ためしなきほとよぞ作り調へさせ給ひける

や

正統記 父の法皇晏駕の後七ヶ日むかりやありけむ

古今集 月やあらぬ春やむかしの春ならぬよが身一ついもと

の身よして

る

正統記 いかなる御こゝろさしあありけむ

同書 なとの父を申したをくる道なかるべき

なむ

正統記 御中らひあしくてあやぶみ思しめま程のことよなむ
ありける

第三段係結

こそ

正統記 人よことなる陰徳こそおかしけれ

同 書 興衰をしるべき道とこそ見えなれ

同 書 能思ひあらそせる故よこそあらめ

同 書 まことは國の費とこそなり侍りしる

同 書 今こそこの天皇うさかひあき繼體の正統よ定らせ給
ひぬれ

同 書 神も萬姓をまなほならしめんとこそし給へ

同 書 今より行くさきもいとたのもしくこそ思ひてべれ

以上の第一、第二、第三の係を、第一、第二、第三の結を以て結べる例なり。あかれども、必む、あかのみとよに限らむ。まゝ一段係の、二段係又ハ三段係は重なることあり。左よその例を示さべし。

一段係と一段係と重りたる例 この時の一段の結、一を以て結ぶなり。

正統記 一代一度宇佐へも勅使をたてまつらる

同 書 おほよそ心正なれば身口におのづから清まる

一段係と二段係と重りたる例 この時の二段の結、一を以て結ぶなり。

正統記 院中の禮などいふこともこれよりぞ定りよなる

同 書 院號ありしことハ小一條院ぞましける

一段係と三段係と重りたる例 この時の三段の結、一を以て結ぶなり。

正統記 今のこの御末のみこそ繼體し給へ

古今集 駒なべていき見ゆかむ故郷の雪とのみこそ花のち
るらめ

この一段係の輕く係なれば、何れの係も重なるなり。但し二段の、二段及び三段。三段の、二段及び三段と重なることなし。

さて、一の係結内は、また、係結の現るゝことあり。その時の一段係の、一段結。二段係の、二段結。三段結の三段結よて結ぶなり。左よその例を示さべし。

後撰集 あのゝめよあかてまかれしたもとをぞつゆやまけし
と人のとかむる

中務集 花をこそ人やをとととかめしか數ならぬ身をいか

よかてせむ

新葉集 影こほる霜夜の月ぞ秋をおきて時こそあれときやけ
ありける

又、係のみありて、結のなきものあり。その、下の三の場合よかざるべし。係を終結として、結をなぶくもの。

正統記 人民の安からぬ事の時の災難なれば神の力及てせ給
えぬよや

同 書 此大臣も漢才の高く聞えしかとも本性あしくおかし
けりとぞ

同 書 清盛一家非分の業天意よをむきけるよこそ
體言を終結として、結をなぶくもの。

古今集 神お月時雨ふりけるならの葉の名にあふ宮のふる事
ぞこれ

同書 谷風よどくる氷のひま毎よりち出つる波や春のそつ
花

物名及び所の名等はいひかけて、結をそぶくもの。

後撰集 これやこのゆくもかへるもまかれつゝ知るも知らぬ
もあふ阪の關

同書 難波津をけふこそみつの浦毎にこれやこの世をうみ
渡る舟

又、結を接續辭よつゝくることあり。左よ、その例を示さべし。

ひ

落窪物語 まかゝなむの給ひて心は入りぬぞときいなむと
さへ

徒然草 のこる船さへ峯よさびしきといへる歌をぞいふある
に誠よまこしくたけたる姿よも見ゆらむ

む
正統記 七代まで保てるこそ彼が餘黨なれば恨むる所なしと
さひつべし

ど
後拾遺集 逢阪の東路とこそまゝしめど心づくしの關よぞあ
りける

に

正統記 後宇多の御門こそゆかしき稽古の君よまし〜し
その御跡をばよく繼ぎ申させ給へり

を

古今集 雨ふれと露ももらじを笠取の山いかにてか紅葉しぬ
らむ

が

正統記 もとの鯨倉のたちよなむ下りしがその後征夷將軍よ
拜任を

こゝよ、また、係結も、一二の特例あり。左よその例を示すべし。
二段の係なくて二段よて結べる例

ぬる

新古今集 くらゐ山跡を尋ねてのばれども子を思ふ道は猶惑

ひぬる

千載集 宮木ひく梓の杣をかきとけて難波の浦を遠りぬる

後撰集 降る雪のみのしろ衣うちきつゝ春采よけりとおどろ
かれぬる

つる

拾遺集 鹿島なる筑摩の神のつく〜とよか身一つよこひを

つみつる

同 集 ぞへきくよちすの露をかきとへて丸品までうつろ
としつる

千載集 やかた尾のましろの鷹をひきまゑてうたの鳥立をか
りくらしつる

なる

古今集 あひまあひても思ふころの吾袖よやどる月さへぬ
るゝ顔なる

玉葉集 戀ひまびてまれとながむる夕暮もなるれば人のかた
みがほなる

ける

源氏物語 妹背山ふかき道をば尋ねむて緒絶えの橋よふみま
どひける

萬葉集 秋田刈るかり廬をつくりわがをれば衣手さむく露お

きよける

新古今集 ときめより逢ふにまかれときゝながら曉しらでひ
とをこひける

せる

後撰集 日くらしの山路をくらみ小夜ふけて木の末ごとま紅
葉てらせる

るゝ

新古今集 秋の夜のそやながつきよなりまけりことまじりなり
やねぎめせらるゝ

ぬ

源氏物語 古を吹きつたへたる笛竹よさへづるとりのねさへ

かゝらぬ

新古今集 うめの花香をのみ袖よとめかきてるが思ふ人の
音づれもせぬ

風雅集 これやさそかゝるなるらんそのふしと見えぬものか
らありしも似ぬ

三段の係を二段まで結べる例
し

後集 紅葉ををしき錦と見しかども時雨とくも降りてこ
そ来し

以上の係結の特例なり。これらの特例は、古人の殊更に意を強めんと
てなしたるものなり。初學者のまねぶべきことならむ。

跨續法

跨續法といふ語、又ハ意を、直ハ、次の語はつゞけをして、中間にある語
をまたぎて、下はつゞくる法なり。その方法は、二つあり。一ハ、言語の
接續上より来るもの、一ハ意義上より来るものなり。左ハ例をあげて、
それを説明せむ。

言語の接續上より跨かるもの

て
を
く

以上、てを、動助辭の續用段、く、形狀言、及び、これとかなじき動助

辭の續用段として、直は用言はつゞくべきものなり。あかると、或言語の中間は挟まることあり、そのとき、それを跨ぎて下はつゞく格となるなり。左はその例をあぐべし。

ての跨續なるい

古今集

をがるあゝ秋の萩原朝立ちて旅ゆく人をいつとるまゝむ

同書

よひくはぬきて哉ぬるあり衣あけて思ふぬ時のまもあ

同書

人やその道あらなくは大なるいさうしといひていざのへまむ

むの跨續なるい

古今集

山たかみ峯のあらしの吹く里はほひもあへむ花ぞちり

ける

同書

天の川雲の水脈はて早ければ光りとめむ月どなるゝ

くの跨續なるい

古今集

野邊ちかく家居しをれば鶯のなくある聲は朝あゝさく

同書

まび人のまきて立よるこのもと頼むるひあゝ紅葉ちり

同書

山科のかとこの山のかとまた人のしるべくまゝひめ

言語の意義上より跨がるもの

つゝ

を

の || ば ||

以上の、いづれも、語の格を定めて、動作をいひあらはす用言よ、つゞく
静助辭なり。然るよ、その間よ、他の語挾まるときに、その語を跨きて、
下の用言よ、つゞくことゝなるなり。その例をあぐれば、

つゝの跨續なるに

古今集

夜をさむみかく初霜を拂ひつゝ草の枕はあまゝびねぬ

同書

音羽山おとよきゝつゝ相坂の關のこあらは年をふるかお

をの跨續なるに

古今集

ぬれてほを山路のきくのつゆのまよいつる千とせを裁い

へよけむ

同書

とぶとりのこあらもきこえぬかく山のふるき心を人のあら

かむ

むの跨續なるに

古今集

しら玉と見えし涙もとふればから紅はうつろひまけり

同書

久あとのあまのゐららの渡守君まゝりあはるぢのくして

よ

の || の跨續なるに

詞花集

風をいゝみ岩打浪のかのれのみくだけでものをおもふこ

ろゐあ

萬葉集

心なき秋の月夜の物もふといのねられぬそてりつゝもと

あ

反轉法

反轉法とい、句を結びてきて、その意を、上にかへす法なり。而して、その反轉するは、多くの句を隔てゝかへるもの、又一句中にてかへるものあり。この格に、大かたは、下は續く助辭にて、とまるものなり。反動辭のありて、その意うらゝかへるものと、混同すべからむ。左は數例を擧げて、そのかへるさまを示さむ。

古今集

いて人のことのみぞよき月草のうつし心いろいろことよして

萬葉集

よしのなるなつみの川の川さとはかもぞ鳴ある山かけ

古今集

よして
夕くれの雲のそとては物ぞおもふあまつ空なる人をこふとて

を

金葉集

よとゝもよ玉ちるとこのをがまくら見せむや人よはのけしさを

後撰集

あゝよこそちると見るらめ君よみあうつろひにさる花の心を

の

（のの辭にて上にかへるときは大かた
上にかへて切れたる場合なり）

古今集

ふさまよふ野風を寒み秋そぎのうつりもゆくか人のこゝろの

好忠集

野がひせし駒の春よりあさりしよつきむもあるのふよ
どのまこもの

源氏物語

あらそれていとあさくも見ゆるのふあやめもどの
むながれるねの

榮花談語

とくとだは見えむもあるかふ冬の夜のかたしく袖よ
むまぶ氷の

に

古今集

さくら花ちらばちらなむちらむとてふる里人の来ても
見なくに

同書

あまひこのおとづれしとぞ今思ふわれか人かと身を
たとるま

同書

みまさかや久米のさらとしさらくは我名にたては萬
代まで

後撰集

今日さくら啼は我身いざぬれむかこめよさをふ風のこ
ぬま

に

古今集

うさながらけぬる沫ともなりなむ流れてとたは頼ま
れぬ身

同書

近江のやかみみの山をたてたればかねてを見ゆる君が
千歳

同書

花かたみめならぶ人のあまたあればあまられぬらむ
ならぬ身

拾遺集

さいとりは衣のまらむ雨ふれとうつろひかたしふかく
そめては

ば

古今集

おろかなるなみだは袖ぞ玉のなを裁かせきあへむたき
つせなれば

同書

蟬の聲きけばかなしな夏衣うまぐや人のならむとおも
へば

同書

春雨のふるは涙か櫻花ちるををしまぬ人しなれば

同書

世の中はいかよくるしとおもふらむこころの人よりうら
みらるれば

と

古今集

鶯の笠は縫てふ梅の花をりてかざむ老いかくるやと
鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身の老いやし
ぬると

同書

同書

名はしおとゝいさことゝそむ都鳥哉おもふ人のありや
なしやと

も

古今集

萩の花ちるらむ小野の露霜はぬれてをゆかむさ夜のふ
くとも

同書

君こそばねやへも入らじこむらさき哉もとゆひは霜の
おくとも

つ

古今集

宿りせし人のかたみか＝藤袴忘られかたき香は匂ひつゝ

後集

そらあらぬ雨もぬるゝ我身かな＝みかさの山をよそよ

きゝつゝ

べく

古今集

花の色は雪はまじりて見えむとも香をたは匂へ＝人のま

るべく

同書

山風は櫻ふきまきみたれなむ＝花のまきれはたちとまる

べく

拾遺集

かくれみのかくれ笠をもえてしがなき＝たりと人よあら

れざるべく

以上、ひをのにゐるゝとつゝべく等、いづれも、句のとまりとなりて。そ

の意上の句はかへるなり。さてこゝは、體言の句のとまりありて、そ

の意上はかへることあり。されど、こゝいづれも、上の助辭の中、いづれ

かを、略きたるものにて、それを添へて見るときは、意義も、反轉も、明な

るべし。今左はその例を示さむ。

古今集

さむしろは夜かたしきこよひもや我を待つらむ＝宇治の

橋姫（ハ）

拾遺集

わかせこそをこふるもくるしいとなあらば拾ひてゆかむ＝

戀とまれ貝（ヲ）

古今集

塵をだすふじとぞおもふ＝さきしより妹と我ぬる床夏

の花（ニ）

あかるゝ、副詞などの如、もと助辭を添へむして、文章上は用ゐらるゝ

のり、助辭を添へて、その意上にかへるなり。その例を左に示さむ。

古今集

ほととぎす初聲さけばあぢきなくぬし定らぬ戀せらる

はと

同書

戀しくぬあたにを思へむらさきのねむりの衣いろいつ

なゆを

省略法

省略法とい、句を簡略にさむがため、語を略く方法として、そのはぶきたるところに、いづれも、普通言語の接續上、たがひたるものとして、よく前後を味ひ、そのとぶきたる語の意を、含ませて見るときに、意義も、接續も、明瞭となるなり。故に省略法をあるとき、上下の語はふ

くみたる意も、おのづから、あらるべきものなり。この例に、歌も文章も、いとおほかり。左に大かたの例をあくれば、よく味ひて、他の略語ある歌文に引きあわせ、相應の語を挟み試みて、その含みたる意をあらべし。

體言を略きて、その意を含ませたる例。

伊勢物語

左兵衛督なりけるありそらのゆきひらといふ ヒト ありけり

同書

たかいこと申す ミコ いまそかりける

好忠集

人つまとわかのとふたつ思ふ シヤ いなれこし袖にあわれまされり

千載集

大かたのこひもる人 コヒスルヒト まなれてよのつねの

伊勢集

と君おもふらむ
竹の子はちりかゝらなむ梅花雪の中のタケノコをとると見
るべく

佛足石

くまりしはつねのクスリシもあれとまら人の今のくまり
たふとかりけり

拾遺集

日のうちよふたゝび物をおもふかなとくあけぬるトキと
おそくくるトキと

古今集

梅花さきてツの後の身なればやまきものとのみ人のいふ
らむ

同書

かねてモトより風よさきだつ浪なれや逢ふことなきよま
たき立ちむ

用言を略き、その意をふくめたる例。

古今集

おとよのみさくの白露よるにかきてナゲキひるにかもひ
よあへまけぬべし

同書

さくら花ちらばちらなむちらむとイヒてふるさと人の来
ても見なくよ

同書

花の中目よあくやとオモヒてわけゆけば心もともはちり
ぬべらなる

同書

久かたの雲の上よレて見るさくにあまつ星かとあやまた
れぬる

同書

よそよのみあわれとぞ見し梅花あかぬ色かゝをりてシラル
イなりけり

古今集

君やこむ我やゆかむトオモフのいさよひはまきの板戸もさゝむねまけり

後撰集

夕ざれば思ひどしげきまつ人のこむやこじやトオモフのさだめなければ

古今集

よしの川いに浪たかく行水のコトクはやくぞ人をおもひそめてし

同書

夕つくよきまや岡べの松の葉のコトクいつともわかぬ戀も走るかな

同書

世の中の人のこゝろに花ぞめのコトクうつろひやまさいろよぞあまける

同書

あしべより雲をさして行く雁のコトクいや遠ざゐる我

拾遺集

身のおしも
しのびつゝ思へばくるし住のえの松のコトク根をおらあらはれおむや

助辭を略きて、その意をふくめたる例。

古今集

立かゑりアあわれとぞおもふよそよても人はこゝろをおさつしら浪

同書

白雲のこゑとかゑとかよ立わかきア心をぬきせたくたびあか

萬葉集

世のあかをつねおきものと今をしる奈良の都のうつろふア見まに

後撰集

てる月のかかるゝア見まば天の川いつるみあせに海よぞ

あてける

萬葉集

もかて舟かきこきくらしいものしき形見の浦またつるけ
る^ガ見ゆ

古今集

さよ中と夜もふけめらし雁のねのきこゆる空は月わたる
^ガ見ゆ

後撰集

夏むしのしるくまと思をいこてぬ^ガあしと誰の見
さらむ

拾遺集

岩としのよるのちきりもたえぬべしあくる^ガわひしきか
つらきの神

古今集

春日野のせふひの野守出て見よまいく日ありて^カ若
菜つみてむ

同書

くるとあくためかれぬものを梅の花いつのひと聞は^カう
つろひぬらむ

同書

さみだれはものおもひをれば時鳥夜深くなきていつちへ
^カゆくらむ

同書

秋風よそつ雁かねぞ聞ゆなる誰か玉章をかけて^カ来つら
む

同書

雪ふれば水ごとく花ぞさきよけるいつれを梅とまきて^リ
をらまし

古今集

ときしも^{コソ}あれ秋や人のまかるへきあるをみるだよ
戀しきものを

後拾遺集

をみなへしおほかる野べは今日しも^{コソ}あれうしろめ

たくもおもほゆるかな

新勅撰集

けふしもコソあれ雪のふれゝば草も木も春てふまへ

花ぞちりける

種々の結を略きて、その意を含めたる例。

古今集

つの國のなほ思ひを山城のとしあひ見むことをのみ

こそオモヘ

拾遺集

さとしのみ年のふれともかしたづの心に雲のうへのみ

こそアレ

後撰集

ふる雪の身のしろ衣打きつゝ春来はけりとおとろかれぬ

るカナ

同書

数ならぬ身をおも荷てよし山たかきなげきを思ひと

りぬるカナ

拾遺集

谷の戸をどちやてつる鶯のまつはかとして春もくれぬ

るカナ

同書

かしまなるつくまの神のつくくとしが身ひとつこひ

をつみぬるカナ

伊勢物語

よあけなばきつよしめなぬくだかけのまだきよなきて

せおをやりつるカナ

古今集

朝ほらけあり明の月とみるまでよし野の里ふれる白

雪ナルカナ

同書

谷風よとくるこほりのしまことよりちいづる浪や春の初

花ナラム

伊勢物語

これやこの天の羽衣ナラムうべしこそ君かみけしとたてまつりけれ

拾遺集

とよかくは物の思ひをひだしくみうつをみなそのたゞ一筋オモヘサダメム

後撰集

いつこナラムとも春の光にまかなくはまだみよしの山に雪ふる

同書

くやくとまつ夕くれと今のカヘラムとてかへるあしたといつれまされる

古今集

大かたの月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるものナル

後撰集

ひたふると思ひなまびをふるさるゝ人の心はれぞよの

つねナル

同書

かく露のかゝるものとおもひともかれせぬものになでしこの花ナリケリ

古今集

いつにモノモフトキナリとの時になねど秋の夜のものがもふことの限なりけり

同書

我君の千代は八千代よさくれいのいとほとなりて苔のむをまでオハレマセ

同書

今のカヒナレとてかへを言の葉ひろひおきておのか物からかたみとや見む

拾遺集

世の中はあらましかばヨカラマレと思ふ人なきか多くもなりよけるかな

右の語を略きたる例の、大かたなり。よく前後を味ひて、その含める意を、考ひさだむべし。但し、歌の字數もかぎりありて、餘情を言外に含まざることを、專とせるものなれば、文章よりその例なきものあるべし。されど、文章にあるるぎりの例の、歌よりあるならむあるべければ、常は多きかたよつき、研究しおけば、實際はあたり、まことなるべし。故にこゝより、多く歌の例をとり。

對語法

對語法といふ、その語のさま、物の左右にならびたるがごとく、詞を正しく排列せる法なり。故にその句中の語、いづれも、同資格のものならざる以上の、對語といふべからむ。左の例をあげ、それを説明をべし。

萬葉集

すめみみのいつくしきくよことたまのさきほふくよとの
とりつきいひつがひけり

同書

ちのみのちののみことは、そはのはののみことおほろ
あよこゝろつくして

同書

あみつせよりのはをたてしもつせよきてさしむしやま
かともよりてつかふる

同書

ちとやふるのみをことむけまつろぬひとをやとしはさ
よめつかへまつりて

同書

おほみやのこゝときけともおやとのこゝといへどもは
るくさのあけくおひたる

同書

はるばあのだふとあらむともちつきのたらはしけむとあ

めのした

右のごとく、體言はもあれ、用言はもあれ、助辭はもあれ、その格の同じきもの、相對したるがうへは、共は次の詞はつゞく資格なるは、對語とを

疊語法

疊語法といふ、物を上下したゞみ上げたるとく、語をどこのへて、排列せる法なり。その對語と、ことなるゆゑは、語尾對ひ合をして、單は意の聯れるものをいふ。左は例をあげて、之を説明をべし。

萬葉集

はるべし花のざしもちあきたてのちみちのざせり

同書

なるさりし鳥もさあさぬさるさりしそあもさけれとやま

をしみいりてもをらむ

同書

あけまくもゆゑしきあもいはまくもあやのしこさあす

あ

右のごとく。上の語尾は續用段、下の語尾は斷止段、上の語尾は動助辭の斷止段、下の語尾は靜助辭、上の語尾は感歎辭下の語尾は續體段なるがごとく、全く相對にむ、されど、句中はある詞辭とも、對語のごとくとのいざれば、疊語といならぬなり。對語疊語共は、短歌は、その用例いと多くなく、長歌などは多し。二段連なりたる語の、同じ調なるときは、そのいづれかの中なるべければ、よく味ひ試みて、その區別をあるべし。

重語法

重語法とい、同じ語の二つ以上、重なりたるとき、他の普通なる語を、省きて、その意を含ませ、句を簡略する法なり。これを大列して、左の二の場合とす。

- (一) 終結の語の重る場合
- (二) 單一語の重る場合

(一) 終結の語の重るとい、上の語の結ともい、省けて、その語尾續用段となり。下の語のみ、斷止段にて結びをさむるなり。たとへば、

古今集序

天地をうごかし目に見えぬ鬼神をもあわれとおもひせ
男女の中をもやこらけたけき武士の心をもなくさむる
歌なり

後撰集

松もひき若菜もつまむなりぬるをいつしかさくらとやも
さかなむ

右のごとく上の句の語尾しせけ共はまるるくるとなり、は歌なり
とつゞきて、結びをさむるものなるを、上の結を省きて、語尾續用段と
なり、下の句のみ斷止段にて、結びをさむる例なり。又後例のごとく、
不然辭にて結ぶときも、上の句の結を省け、續用段となり下の句の結、
雙方は通むることとなるなり。この法は、歌にも、文章にも、いと多し。
こゝより、一端をあげたるのみ。

(二) 單一語の重る場合は、唯一を無用して、他は省き、又い、含ませる
ことなり。たとへば、

紫花抄

古今集廿卷えりととのへさせ給うてせよめでたくせさ

せ給ふ今まで廿餘年なり古への今の古き新き歌えりと、
のへさせ給ひてせよめでたうせさせ給ふ

好忠集

人つまとしゐのとふたつ思ふよなれこし袖にあれま
されり

千鶴集

大あとのこひまる人よさゝなれてよのつねのとや君おも
ふらむ

伊勢集

竹の子よちりかゝらなむ梅花雪の中のをとると見るべく
くまりしつねのもあれとまら人の今の樂しいたふとか

御足石

りけり

右のごとく第一の例は、同じきものを省略せしもの、他の例は、或詞を
省きてのの助辭よふくませたるものなり。

又續體段の語、二つ重なりたるとき、普通の接續上とい、ことよして、
續體段が、續用段の資格となりて、つゞくとあるべし。その例を左に示
さむ。

萬葉集

かくれゐてこひつゝあらむいたごの浦のあまならましを
玉藻あるく

拾遺集

よの中はふるぞとかなき白雪のかつにきえぬるものとあ
るく

後拾遺集

かしと木の森の下草くれどとよなほたのめとやもるを
見るく

古今集

あら雪の八重ふりあけるかへる山のへるくも老よける
かな

右のごとくあるく、あるく、見るく、あへるくなど悉く續體段が、續用段の資格となりて、續くなり。このくといふべきものゝあらざれど、序なれば、一言しかくものなり。

添詞法

添詞法とい、句或は言語を裝飾し、又は、強めむかため、詞を添ふる方法として、我國文章の特有なるところなり。その添ふる詞は、體言よりなるもの、用言よりなるもの、一音のことばよりなるもの、及び體言助辭用言の三つの集合よりなるものあり。この詞の、體言用言助辭等と、異なるゆゑに、その形體のみをひとしく、その性質はいたりて、大に趣を異にするものあればなり。この添詞を分ちて、四種とせ、即ち左

のごとし。

- (一) 枕詞
- (二) 序詞
- (三) 發語
- (四) 助語

(一) 枕詞

枕詞とい、大かた五字をかざるものなり、辭句を修飾し、又は、調をととのへむがため、名詞動詞など、添へて、用ゐる詞なり。古より慣用せしところの數に限あるものとしてを添ふるも、例格ありて、妄に添ふるゝあらざ。今その用例をあぐれば。

古今集

春日野にけふなやきをまの草のつまもこもれりわれも

こもれり

古今集

梓弓春の山べをこえくれば道もさりあへまはなぞちりける

同書

ふる雪にかつぞけぬらしあしびきの山の麓つせおとまさるなり

などのごとし。即ちつまの枕詞に、まの草の、春の枕詞に、梓弓、山の枕詞に、あしびきのなり。枕詞は間々下の詞は接續するさまの語格はたがひたるものありを枕詞の一格として普通の法則を以て論むべからざるものと知るべし。

(二) 序詞

序詞は、性質枕詞と異なることなし。たゞ五字以上のものなると、副詞

おじよも、添へ用ゐるとの差あるのみ。今その用例をあぐれば、

古今集

あづさ弓おしてはる雨けふふりぬあまさへふらば若菜つみてむ

同書

みちのくのあさめのぬまの花のつみかつみる人よこひやわたらむ

後撰集

このめえる春の山田をうちあへし思ひやみよし人ぞこひしき

などのごとし。即ち春雨の序詞に、あづさ弓おして、みつみるの序詞に、みちのくのあさめのぬまの花つみ、うちかへしの序詞に、このめえる春の山田をなり。枕詞とおなじく、辭句の裝飾は用ゐる詞にして、別は意味あるものゝあらを、

(三) 發語

發語とい、用言は添へて、その意を強めむがため、用ゐる用言をいふ。
たとへば、左のごときものなり。

あさくもる

うちふく

とりよろふ

こきませて

さしそへて

ふりそへて

たちあさむるれ

即ちくもるを強むる發語は、あさ、ふくを強むる發語は、うち、よろふを

強むる發語は、とりあるがごとし。而して、これら發語の、普通續用言と
異なるところは、續用言のごとく、文字を添へて、みる格はあらむ。即
ちあさてくもる、うちてふく、とりてよろふなどのごとく、てを添ふる
とき、解をべあらざるよいとるなり。

(四) 助語

助語とい、體言、及び用言の首は添へて、用ゐる一音のことばをいふ。即
ち左のごときものなり。

いさある

かくろきあるみ

たよるき

さむしろ

ましまつ

をつくと

みくまの

このことばの、普通助辭と異なるゆゑに、詞の下に添へて、悉く上は添ふればなり。その中より、やゝ意味をもてるものなきものはあらねと、概しては、唯詞の首に添へたるまでなり。このことばも、歌などの、詞をととのへむがため、生じたるものなり。

懸詞法

懸詞法といひ、言ひあらとさむとまる詞を、物名、又、所の名などの、その詞と音相通したるものにかけて、いふなり。この文章上、一種の裝飾

法として、また、我國歌文の特有あるところのものなり。今左に用例をかゝげて、そのいひかけたるさまを示さむ。

古今集

霞たちこのめもはるの雪ふれば花あき里も花ぞちる

同書

音よのみさくの白露よるにわきてひると思ひあへむけぬべし

同書

こひくてまれは今宵ぞあふ阪のゆふつけ鳥の鳴のむもあらなむ

後撰集

こひをのみ常はまるる乃山あればふじの根よのみあらぬ日はなし

同書

あゝりたる人の心をあら露のおけるものともたのみける

の取

拾遺集

あふ事いゝゝぬざり来るみとり子のたゝむ月もあひじ
とや来る

同書

とが事いゝゝぬざりしものむせび松千とせをふともたき
とくべき

以上のごとく、春は張るといふ詞をわけ、菊は聞く。逢阪は逢ふ。駿河は
爲る。白露は知らぬ。ゐゝぬざりは難き。いゝしるは言ひぬといふ詞
をかけたるがごとし。この類いとおやし。おしてあるべし。

解剖法

我國文章の組立は關したる、方法の大略は、既に前講に終りたり。こ

れよりの進みて、すべての言語を一括して、文章を組織せる方法を講
せるを順序とす。されど、文章の組立は、これを解剖せることを知らん
ば、おのづから會得せらるべきものなれば、こゝより、一の正しき文
章を取出て、それを解剖し、それを説明すべし。左に正統記中の文章一節
を抽き、先づ初學者の便をえかり、言語の種類より區別し始むべし。

體言

助言

助辭

助體言

助助體言

助助助體言

助助助助體言

助助助助助體言

義朝重代の兵たりしうへ保元の勲功をてられゝとくそべりしは父

助體言

助助體言

助助助體言

助助助助體言

助助助助助體言

助助助助助助體言

助助助助助助助體言

の首をさらせざりしこと大ふるとがあり古今もきゝを和漢のため

助體言

助助體言

助助助體言

助助助助體言

助助助助助體言

助助助助助助體言

助助助助助助助體言

しなし勲功は申あはるともみつゝらしりぞくともなとの父を申た

右よて、言語の種類に明ならむ。次は、この各言語の性質を、區別をべし。

[illegible][illegible]

右よて、體言用言助辭中の性質に明ならむ。次は、用言、及、動助辭の活段を、區別をべし。

義朝重代の兵たりしうへ保元の勳功もてられかしくとべりしは父

の首をさらせざりしこと大ふるとがあり古今もさかむ和漢もた

久活

左行四段使行四段
断止段

加行四段
断止段

めしなし勲功は申 かはるともみづからしりぞくともなとか父

佐行四段加下二段
断止段

佐行四段断止段

加行下二
断止段

多行下二
断止段

續用已然段

を申 たをくる道なかるべき孝行かけ えて はけれない

入活佐行變格體
断止段

被行上二體
断止段

断止段

かてかつひよその身を全くま べきわろびぬること天理なり

右にて、用言、及、動助辭の活段の明ならむ。次は、助辭の所屬を區別を
べし。

義朝重代の兵たりしうへ保元の勲功をてられかかくとべりし

體言 體言 續用段
所屬 所屬

體言
所屬

續用段 續用段
所屬 所屬

父の首をさらせざりしこと大ふるとがあり古今もさかむ和漢も

體言 體言
所屬 所屬

續用段 續用段
所屬 所屬

體言
所屬

體言
所屬

體言
所屬

未然段
所屬

體言
所屬

ためしなし勲功は申かはるともみづからしりぞくともなとか父を

體言
所屬

断止段
所屬

断止段
所屬

體言 體言
所屬 所屬

申たをくる道なかるべき孝行かけえては けれないかてかつひ

断止段
所屬

續用段 續用段 已然段
所屬 所屬 所屬

體言
所屬

よその身を全くまべきわろびぬること天理なり

體言
所屬

體言 體言
所屬 所屬

断止段
所屬

續用段
所屬

體言
所屬

體言
所屬

右にて、助辭の所屬の明ならむ。次は、文章の組立は關したるものを區

別をべし。

義朝ハ重代の兵たりしうへ保元の勲功をてられかゝるべし
 ハ父の首をさらせしことハ大あるとがかり古今もきかむ和
 漢もためしなし勲功ハ申かゝるともみつからしむどくともなとの
 父を申たまくる道あかるべき孝行かけとてよければいかでかつ
 ひハその身を全くをべきわろびぬることハ天理なり

右のごとく、□印中にあるハ、略きたる語にして、□□印ハ、係結。
 印ハ終結。○印ハ、跨續。——印ハ、對語なり。又□の略語の、
 係となれるハ、ことハのハの略かりて、係となれるを示せるなり。最も、

徒の結ともなるなり。

以上の、解割法の大略なり。素より、一文章中の、一節を、解割せしは過
 ぎされバ、言語の種類も少なく、悉く、言語の組立を知るは足らざるべ
 し。されと、その理は於てハ、一様なるものなり。さてハ自ら歌文を取り
 出てハ、印を付し試みあハ、おのづから、その正しきと、あらぬとハ、知
 られあむ。かつまた、こゝハ、初學者ハ、解し易からしめむがため、五
 段ハわかちて解割したれと、一ハ合せて見るときハ、更ハ明瞭なるべ
 し。今、言語の接續はつきていそ、體言の下ハ、かならむ、體言所屬
 の助辭来り、未然段の用言の下ハ、かならむ、未然段所屬の助辭来り、
 係あれば、結あるがごとく、若し、これハ反まるときハ、その誤謬なるを
 知るべし。又、その名稱の如きハ、別ハ簡便なる印を作り、やゝ熟するハ

いたりて、を一は合して解剖する方よろしからむ。かつ、各言語の性質、及、時刻等も一々印を付して、を解剖すへし。こゝは唯、解剖する方法の一端を示したるのみ。

假名遣

五十音中、その音の紛らしきもの、數音あり。されど各單複輕重の別ありて、決して混同すべきものゝ非をざるを、後世に至り、混同は混同をさしめ、今に全くその區別を失して、更は、分別しあたはざるものさへ出て來れり。今その假名遣を知らんは、その紛れ易き語の數甚多く一々其を心得んは、容易なることゝあらざるべし。さてこれを知らばやまき、捷徑を考へざるべからむ。然るこゝは先輩の考へ置かれたる、一の方法あり。その二の紛れやすき語を取出て、少きかたを記憶して、多きかたを推知するなり。例へい。いとゐと紛るとせむ。いの方二百五十あり。ゐの方僅十七なり。故にその少きゐの方を暗記

して、いの方を推知するなり。今この假名遣も、この方法によるべし。先づ左に五十音圖をつけ、紛れやすき假名を示さむ。

あ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	ゆ	み	ひ	に	ぢ	じ	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	づ	ず	く	う
え	れ	に	め	へ	ね	て	せ	け	え
お	ろ	よ	も	ほ	の	ど	そ	こ	お

上の圖中、文字の下に「を」をかけたるは、上よりありて紛るゝ假名、上より「を」かけたるは、中より下よりありて、紛るゝ假名を示したるなり。又也行の「は」は、和行の「は」と、阿行の「い」と、古くはその別ありたれど、今に全く混同して、其區別を失せり。故に何れをかくも、人々の隨意たるべし。

清音の假名

② この假名は、はは紛るゝなり。③ れ(我)④ た(私)等語の上よりつけたるは、紛るゝことなし。又⑤ れの助辭は、一切用あることなしとあるべし。

あ

泡

あ

皴

ひ	ひ	鰯	い	鰯
く	く	慈姑	ゆ	硫黄
た	た	蟬	う	植
す	坐	蟬	あ	周章
さ	駱		あ	乾
た	撓		よ	弱
こ	理		あ	作業
こ	諺		の	野分
く	轡		こ	聲作
く	駟		は	腸

以上廿二言を記臆し、他のはの假名とあるべし。

ゐ|| この假名、いとひとと紛るゝなり。但し一音又ハ語の上にある
 とき、ひよに紛るゝことなしと知るべし。

ゐ	猪夷	ゐ	禮
ゐ	井	ゐ	豚
ゐ	居	ゐ	膝行
ゐ	蛸	ゐ	田舎
ゐ	堰埭	ゐ	堰杭
ゐ	參	あ	藍
あ	紫陽花	く	慈姑
う	髻髪	く	紅
か	乞兒	く	位

とのゐ

宿直

もとゐ

基

ひきゐ

率

もちゐ

用

い

以上ゐぐひより上十言い、いゝのみ紛るゝ假名、以下十二言い、いゝもひゝも紛るゝ假名なり。他いひの假名とあるべし。

こも、一音なるとき、またい、語の上はあるときい、ひゝ紛るゝこ
となく、ゐゝのみ紛るゝなり。唯中又い下ゝあるときい、ゐゝもひ
ゝも紛るゝあり。ゐのいひゝ紛るゝものい、上ゝいへり。されいこ
ゝゝい、中又い下ゝありて、ひゝ紛るゝかきりを示さむ。

さいつち

終撥

かい

擧

くい

悔

むくい

報

かい

老

ゑ

この他い、ひの假名とあるべし。

この假名い、一音なるとき、又い語の上ゝあるときい、えゝ紛れ、語
の下ゝあるときい、えとへとゝ紛るゝあり。

ゑ

餉

ゑ ゑのき ゑま
ゑのく ゑとる

繪

ゑた

織多

ゑくし

醎

ゑんじゆ

槐

ゑふ

醉

ゑる ゑくる

彫

ゑみ ゑくほ

咲

ゑほし

烏帽子

ゑつく

吐

うゑ

植

うゑ

飢

ちゑ

智恵

すゑ

坐

すゑ こすゑ

末

こゑ

聲

つゑ

杖

つくゑ

机

ゆゑ

故

ともゑ

巴

すゑ

陶

以上、廿一言なり。他にえへとあるべし。

え

この假名の、一音、又、語の上にあるとき、ゑとひとしく、へゑ
紛るゝことなし。ゑゑ紛るゝかきり、上のゑの部はつきてある
べし。こゝゑの中又へ下ゑありて、へゑ紛るゝかきりを示さむ。

ひゑ

稗

ふゑ

笛

さゑ

蝶螺

ぬゑ

鷓鴣

はゑ

鰐

きのゑ

甲

ひゑとり

鵜

ひこばゑ

藥

もえき

萌黄

以上、九言を記憶し、への假名を推知をべし。

を

一音の語、またゑ語の上にあるとき、おゑ紛れ、中と下とゑある
とき、ほゑ紛る。我國の言語は、中と下とゑを用ゐる語なし。こ
ゝゑおゑ紛るゝかきりを出さむ。

を
をとこまをを
をたけをみやひを

男

を

緒

を

雄

を

尾

を

小

をはゑ

尾花

ををのへ

岑

をりく

時節

を

亭

をる

居

を
ををつくし

脉

をのす

杞

をのむ	拜	をる	折
をき	萩	をか	岡
をとり	蝶鳥	をまふ	女
をち をちこち をちろと	遠方	をかし	可笑
をこ をころまし	愚戯	をり	檻
をこたる	怠	をさむ	納
をさ	長	をさく	多く
をさ	簾	をしむ	愛惜
をさふし	幼稚	をし	駕騫
をしへ	教	をしかん	卑
をどる	踊	をしき	折敷

をぢ	伯叔父	をぢ	老翁
をどつひ	一昨日	をしね	晚稻
をひ	甥	をば	伯叔母
をけ	桶	をの	斧
をのゝく	戰慄	をはる	終
をみおへし	女郎花	をろぢ	蛇
をゝし	勇壯		

以上、四十七言なり。他、わの假名とあるべし。次、よはよ紛るゝか
きりを出さむ。

かをる	薫	あをん	紫苑
あをり	葉	あをる	萎

たをやか

蟬妍

まをす

申

やをら

徐々

あを

青

いうを
あをを等

魚

さを

竿

とを

十

いさを

功

はせを

芭蕉

みさを

操

みを

水豚

以上十五言なり。他はほの假名とあるべし。

濁音の假名

じ|| この假名の、上中下の差別なく、ぢに紛るゝなり。左はじとかくベ
さかきりを出さむ。

じ

不

あじか

簀

あじろ

網代

まじる

交

いちじるし

著明

かたじけなし

辱

くじく

挫

くじる

扶

しぢみ

蜺

さじさ

假床

しぢむ

縮

はじく

彈

なじる

詰

ひじり

聖

なまじひ

惣

にじる

躁

みじかし

短

はじめ

始

ひじさ

鹿尾菜

ほじし

脯

まじなひ

禁厭

まなじり

睫

うなじ	頂	やじり	鑽
あるじ	饗應	あるじ	主人
うじ	蛆	れなじ	同
くじ	籤	きじ	雉
むじな	格	いみじ	甚
さじ	匙	すさまじ	荒涼
つじ	辻	つゝじ	躑躅
にじ	虹	はじ	櫃
つむじ	鷹	つむじ	廻毛
とじ	刀自	ひつじ	羊
むらじ	連		

す

以上四十三言なり。他いぢの假名とあるべし。

この假名の、上中下の別なく、づゝ終るゝあり。左ゝすとかくべき
かきりを出さむ。

す	不	ねむみ	鼠
すゝめ	雀	すむき	纒
すゝろ	漫	すゝし	涼
たゝむむ	才	なむらふ	準
もす	鵲	くす	葛
かす	數	すゝ	錫
すゝすゝむし	鈴	きすきむつく	疵
はす	箸	みゝす	蛭蚓

以上、十六言なり。他にミなづの假名とあるべし。

以上、假名遣の大略なり。されど、こゝは、一言注意すべきこと、合名詞、即ち、うら^ミ浦^和こ^ミたか^ハ聲^高う^ミゑ^ハじ^ハ餓^死い^リは^ハ入^江からを^ミき^ハ村^長などの、二言の重りて、一言となりたる、假名遣の紛るゝもの、おほかたの省きつ。一言の假名にて自然分明なるものなればなり。又、用言、即ち、也行上二段の^ハい^ハひ^ハぬ^ハ。又也行下二段の^ハき^ハゆ^ハ消^ハ。和行下二段一段の^ハもち^ハぬ^ハ用^ハなどの、い^ハひ^ハぬ^ハ。又也行下二段の^ハき^ハゆ^ハ消^ハ。和行下二段の^ハう^ハゝ^ハ飢^ハ波^行下二段の^ハわ^ハき^ハま^ハふ^ハ辨^ハなどの、ゆ^ハう^ハふ^ハ及^ハき^ハえ^ハ消^ハ。う^ハゑ^ハ飢^ハわ^ハき^ハま^ハへ^ハ辨^ハの、え^ハゑ^ハへ^ハなどの、假名遣の紛るゝ、各、その活段を知るときは、假名遣も自ら判然たるべきより、おほかたのこれを省きつ。

字音假名遣

字音假名遣も、言語假名遣と同じく、いたく混同して、紛れたるもの多し。まして漢字の我國に渡來せるこのかゝ、我國人の、其音をよぶ、四聲を區別せざりしものあるがゆゑ、其間音韻を區別すべき一定の標準なく、人々の隨意は一任せるものなれ、其假名遣も殊に亂れたるかことし。今ををしらん、漢字の數甚と多くして、一々記憶をること、容易なることとあらざれ、言語の假名遣と同じく、こゝは紛きやまきものを取て出てゝ、その少きかゝを記憶し。多きかゝを推量する方法よるべきなり。その紛れやまきものも、普通行それざるものはぶきつ。されば、同韻の例、又同じ傍の例なとて、大抵に推知を

べきなり、又漢吳音の區別、四聲の區別を立てざるは、唯假名遣を知る
 まとまり、音韻を考究するものゝあらざればなり。さて五十音中、い
 とひ、えとに、うとず、撥る音にてんんと、む等、普通言語上にも、全く混
 同して、區別を失せるものの、音韻に關しざる専門の書籍に譲り、こゝ
 には其區別を立てむ。その強ひてこれを立つるも、普通假名遣には、さ
 せる効能もなされぬなり。

清音の假名

い、おの區別

お 爲、帷、位、委、偉、緯、遼、葦、圍、彙、畏、胃、威、尉、遺、唯、維、惟

おん 院、員、尹、韻、隕、殞

おき

域、闕

このほか、大抵い、の假名とあるべし、又あかきたなはまや
 らわえけせてねへめこれゑの下にあるは、ゑないの假名よ
 て、すつゆゑの下にあるは、ゑの假名とあるべし。

あり、あふ、おう、わう、の區別

あふ

押、鴨、凹、壓

おう

翁、應、謳、區、鷗、歐、歐

もう

王、往、汪、枉、旺、皇、凰、橫

この他に、大抵あうの假名とあるべし、

いう、いゆう、ゆう、いふ、の區別

いふ

邑、悒、損、挹

この他ハ、皆いウの假名とあるベシ。たゞしいユウ、ユウハ、い
ウと記をも妨なし。

えゑの區別

え 惠、慧、會、繪、畫、廻、回、穢、衛

えん 遠、猿、袁、轅、園、怨、駕、苑、宛、婉、宛、援、淺、垣、堧、淵、圓

えつ 越、樾、曰、鉞

この他ハ、大抵えの假名とあるベシ。

おをの區別

を 烏、鳴、惡、汚

をん 溫、穩、怨、園、遠、苑

この他ハ、大抵おの假名とあるベシ。

かう、こう、かふ、こふ、くわうの區別

こふ 劫、怯、業

かふ 甲、匣、狎、合、蛤、閣、洽、恰、恰、盍、檻、闔、鴨

こう 后、垢、逅、後、候、侯、喉、猴、口、扣、叩、吼、苟、鉤、構、溝、篝、寇、厚、公、蚯

孔、工、紅、虹、証、功、攻、貢、控、洪、鴻、肯、肱、弘、興、亘、恒、薨

くわう 光、晃、恍、曠、曠、荒、鑛、皇、徨、惶、遑、蝗、篁、黃、橫、觥、宏、轟、肱

この他ハ、大抵かうの假名とあるベシ。

きうきふの區別

きふ 急、及、吸、汲、級、笈、給、泣、翕

この他ハ、大抵きうの假名とあるベシ。たゞしきゆうハきう
と記すも妨なし。

けふ、けう、きよう、きやうの區別

けふ 協、夾、鉄、頰、袂、愜、使、篋、峽、怯、脅、劫、業、鄴

けう 喬、橋、驕、叫、竅、微、鼻、教、咬、堯、曉、驍

きよう 共、供、拱、恭、竇、恐、蛩、凶、恟、兇、胸、興、矜、競、疑

この他ハ、大抵きやうの假名とあるべし。

さうさふさうの區別

さふ 挿、匣、雜、颯

そう 總、聰、送、忽、叢、崇、宗、綜、宋、曾、僧、增、贈、憎、層、走、叟、奏、嗽、湊、漱、贅

この他ハ、大抵さうの假名とあるべし。

あふあうの區別

あふ 習、執、集、緝、楫、聿、澁、濕、襲、拾、十、什、汁

この他ハ、皆あうの假名とあるべし。又あゆうもあうと記して妨ふし。

せふせうあようあやうの區別

せふ 婁、接、捷、睫、涉、決、攝、霎、葉

せう 梢、稍、鈔、昭、照、韶、沼、招、詔、小、少、抄、宵、霄、消、道、銷、瑣、蕉、樵

せう 樵、笑、燒、蕭、簫、肅、瀟、椒

あよう 鐘、鐘、衝、松、訟、頌、誦、春、悚、竦、聳、蹤、緝、升、昇、證、勝、承、冗、丞

あよう 蒸、繩、衆、剩

この他ハ、おろあさあやうの假名とあるべし。

たふとうたうの區別

たふ
とう

答、塔、沓、踏、荳、納、納、
東、凍、棟、洞、董、桶、冬、統、豆、逗、頭、兎、透、竇、登、燈、藤、等、騰、聞、
同、銅、筒、童、動、慟、僮、腫、

これらのゐるは、大抵たうの假名とあるべし。

ちふちうちゆうの區別

ちふ

蟄、繫、

この他は、まべてちふの假名、ちゆうのちうと記をも妨おし。

てふてうちようちやうの區別

てふ

牒、蝶、疊、喋、諜、帖、貼、

てう

朝、潮、兆、晁、超、趙、詔、挑、詔、眺、迢、調、凋、彫、鳥、平、釣、條、

ちよう

重、冢、塚、寵、徵、懲、澄、

この他は、大抵ちやうの假名とあるべし。

なふなうのうの區別

なふ

納、衲、

のう

農、濃、膿、能、儂、

この他は、皆なうの假名あり。

にふにうの區別

にふ

入、

にう

柔、乳、

ねうねふにやうの區別

ねう

饒、尿、溺、

によう

女、女御、女官、女房、おとのとき、韻を引く故は、出せり。

ねふ 捻

はふほはうほうの區別

はふ 法、乏、漢

ほふ 法、乏、吳

ほう 蓬、鳳、龐、豐、封、峯、逢、鋒、蜂、縫、烽、奉、捧、俸、剖、朋、崩、菩、矛、眸、鵬、表

この他に、おろゝとほうの假名あり。

へうひようひやうの區別

へう 豹、表、俵、標、票、漂、飄、駢

ひよう 氷、氷、馮、憑

この他に、おろゝとひやうの假名あり。

まうもうの區別

もう 毛、耄、蒙、濛

この他に、まうの假名あり。

めうみやうの區別

めう 苗、妙、妙

この他に、みやうの假名あり。

やうようえうえふの區別

えふ 葉、聯

えう 遙、搖、瑤、拾、要、譚、腰、曜、夭、妖、姦、竅、杓、効

よう 用、俑、踊、傭、容、涌、蓉、庸、溶、撻、膺、孕、鷹

この他に、おろゝとやうの假名あり。

らうらふらうの區別

らふ

臘、蠟、拉、

ろう

籠、瀧、龍、聾、弄、瓏、龍、棲、陋、漏、樓、鏤、醜、樓、

この他ハ、おろろとらうの假名あり、

りふりうの區別

りふ

立、笠、粒、

この他ハ、りうの假名あり、りゅうりうとふなじ、

れふれうりようりやうの區別

れふ

獵、鬣、

れう

聊、僚、遼、療、療、了、料、鵲、寥、廖、撩、

りよう

龍、陵、綾、稜、撈、

この他ハ、みなりやうの假名あり、

濁音の假名

ちぢの區別

ち

持、峙、痔、治、尼、昵、除、

ちよ

女、除、杼、

ちん

陣、沈、塵、

ちく

軸、竺、劬、舳、怙、

ちつ

帙、唾、昵、

ちき

直、

ちやく

箸、

ちよく

辱、辱、穉、

ぢゆつ 戒、憚、

この他は、おろろとの假名あり。

すづの區別

すゐ 隨、隋、髓、瑞、藥、憐、

この他は、大抵ミなづの假名とあるべし。

以上の字音假名遣の大略なり。なほこゝよ一の注意をべきこと、中下にあるミの假名なり、くミくミうくミいくミんくミくミつ等、すべてミの字なるを、世人ともすれば、その字を書くと、大なる誤なり。すべて拗音なれば、喉音なるや行あ行の字に限りとあるべし。

清音中、まゝ濁音の離りたるも、その假名清音にても紛るゝものなれば、これを清音中に攝したるものなり。卷末濁音の部にあげたるは、全

く濁音のみの紛るゝものなり。また、一字音にして、二ツの異なる假名遣あるは、漢吳音をかねたるなるべし。かつ其音韻なとも、漢土の韻書によりて見るときは、正しからざるものもあるべし。されど、その全く假名遣を本旨とし、我國の古書等より、引證せるものなれば、音韻を知るべしとまれ、我國假名遣を知るべし、妨なかるべし。

送假名法

漢字を讀みやすからしめんがため、これに假名を送る方法あり。現今世人が漢字に假名を送る法は、いたくその規律を失し、同字にして送らぬもあれば、又送るもあり。二の假名を送るもの、一の假名を送るものの、一文章中にも前後矛盾せるものありて、讀者を惑はしむること、少からざるなり。元來、送假名といふものの、語尾の變化するだけをおくりて、語の活段を知らしめ、及び助辭を送りて、語格を知らしむる、止まるものなるを、語尾にあらぬ假名までも、おくり、甚しきに至りては、名詞にきへ、假名を送りたるものあり、なか／＼は、讀者を惑はしむるものといふべし。今左に語類を分ちて、一定の方法を示すべし。

名詞

名詞に語尾の變化するものはあらざれば、送假名を付する必用なし。かつ世間普通にも、假名を送れるものなけれど、唯まゝ居名詞、即ち、動詞の言ひ居りて、名詞となれるもの、例へば、喜び、樂み等の、ひ、みを送るものあれと、已に名詞となり、語尾の變化せざるかざりて、假名を送るに無用のことなり。されば、名詞は、假名を送るものに絶えてなしとあるべし。代名詞も、また、さなり。

副詞及接續詞

前にもいひしごとく、送假名の助辭を送りて語格を示し、語尾の變化

するかざりを送りて、活段を知らしむるは、止まるものなれば、助辭の添へりて、副詞、又、接續詞となるものを除きては、送り假名の不必用なるものなり。然るは、現今一般は、助辭を添へざる副詞、接續詞はまでも、假名を送ることゝなりをるは、讀者をして、辭し易からしめむとする、一の便宜上より出たることとて、また止を得ざるものなるべしされど一定の方法なく、却て讀者を惑はしむるものあり。さてはこれを一定せざるべからず、これを一定せんとするは二説あり、その一は、副詞、及、接續詞は、凡て語尾の一假名を、傍に小字にて送るべしといふ説これなり。例へば、又た甚だ誠とは明うは及ひ或ひ等の如し。(直ち直しの類、送假名なければ、いつれも讀まれて、分明ならざればなり)。その一は、副詞、及、接續詞等の、元來一の體言なれば、助辭を添ふるもの

を除き、假名を送らず、この儘通用すへし。若、強ひて送假名を付せむとあらば、全く假名は改むべしといふ説これなり。この第二の説、一應理なきはあらざれと、今實際は、便宜上普通送ることゝなりをれば、一概は理論のみにては、行われかたからむ。第一説は、稍公平なる説の如くおれと、殊更は小字にて、傍は送るがとき、いかにも煩わしく、これも實際は行われかたからむ。故にこゝには、二説の中間を取り、左のおとく一定せむと欲するあり。

副詞、及、接續詞は、助辭を添ふると、添へざるとは關せず、三音以上のものには、唯一字の假名を送るべきこと、二音以下のものには、假名を送るも甚煩わしければ、唯、點を付し、下の字は混同するを防ぐべきこと。又一字にして、二以上の意義あるものには、全く假名を付す

るか、或は假名にて書するか、二法によるべきことなり。今左はそれの例を示すべし。

二音以下のもの、單は傍に、點を施す例。

又、果、將、唯、若、稍、且、等

三音以上のもの、悉く一假字を送る例。

蓋し 常は 殊は 及び 強て 寧ろ 甚ぞ 定て

抑も 誠は 明は 或は 等

二音以下、三音以上は關せず、二以上の意義あるものには、全く假名を付するか、又は全く假名のみにて書く例。

彼^{かの} 此^{この} 其^{その} 夫^{その} 疾^{はや} 具^ぐ 等

あの この その あれ これ それ そとく とく

つふきよ　ともよ　等

又こゝは、接續詞よりあらざれとも、副詞などの、二つ重りたるものあり。即ち殊更、將又、等のことし。これらも、上はあげたる諸例より、三音以上なるときは、一の假名を送り、若し二音以下なるときは、下の字の傍に、一點を施すものとあるべし。

用言

用言は、語尾の變化するものなれば、その變化するかぎりには、假名を送りて、その變化を知らしめざるべからず。例へば、喜ぶといふ用言は、波行四段活よししてはひふへと活くものなれば、この變化するかぎりには、其用ゐるところより、假名を送らざるべからず、されば用言にかく定

めおくとき、萬語を通じ、更は紛るゝことなかるべし。

されと、用言中にも、また例外といふべきものありて、一概は此理を以て推すべからざるものあり。その一音の訓の變化して、活くものなり。假令へば、下二段活の得經、變格活の來爲等の用言は、一音よしして、變化しゆくものなれば、假名を送ること、あたはざるものとあるべし。

又形狀言の惡しく寒けく憂たくなどいふしきければ、變化するものなれば、そのくしきけれのみを送りて、可なるを惡く憂くなとのみよてい、あろくうくなど、よみたかふることあれば、しくたくけくとおくりて、其の混雜をふせぐべし。

句讀法

文章を書き、またい讀むときなと、文義を通し易らしめ、またい上
下の混雜を防かむかため、點を施す方法なり。句とい、語の切れたる
ころは、施す。點をいひ、讀とい、語の切れさるも、暫く讀み切りたる
ところは、施す。點をいふなり。故は句點のを施すところ、やか
て語の切るゝところなれ、その語格はだは注意せ、更は惑ふこと
なく、かつ古より先輩の切りたるものも、浸、一定し居りたれと、讀は
一定の標準なく、全く人々の自由は一任せるものゝことし。されと本
より、文義を通し易からしめむがため、切るものは外ならされ、唯精
粗の別こそあれ、切るところも、自ら定まり居るは相違なし。今左は古

書等は準據し、句讀を施すべき、一般の方法を示さむ。

句

句の、語のされて止まるところをいふなれ、其語句の切るゝところ、たとひ長くも、短くも、〇點を施すものとするべし。即ち其施すべき場合を舉ぐれば、左の三例は出でず。

(一) 語格全圖の第三變化なる、斷止段のところにて、切る例。

これをすみた川といふ。

右の用言にて切る例なり

ゆく川のおられぬ絶えむしてまのも本の水はあらむ。

右の助辭にて切る例より

(二) 第四變化なる、續體段ののがぞやかむ等の係辭を結びて、切る例。

いさと思ひまびておむとべる。

右の用言にて切る例なり

たゞ水の泡ほど似そゑたる。

右の助辭にて切る例なり

(三) 第三變化なる、已然段のこそ、の係辭を結びて、切る例。

この女を外へおひやらむとすきこそいへ。

右の用言にて切る例なり

まことはむつまじきことこそおありなれ。

右の助辭にて切る例なり

尚、こゝは、一の例外ともいふべき場合あり。そのもと切るゝ詞はあらざるも、下の切るゝ詞の省けたるかため、切るものなり。今左はその例を示さむ。

吹さくる風もさこそ。

世はあそびあそび人よあむ。

袖をまがりて立ちまかれけるとぞ。

空をふるむれに唯蒼々たる月一輪。

右は、いづれも下の切るゝ詞を省きて、上の詞は含ませたるものなれに、かならず句點を施すべきものとす。

讀

讀は、甚錯雜なれと、おほかたは、左の五の場合に出でざるべし。

(一) 體言にて切る例

寧ろ、雞の口とならむも

頗る、盛大にてあそけるも

猶、夢のこゝちせらるゝよあむ

右は副詞にて切る例なり

隅田の岸或は、上野の傍

そもく、國といふに

また、この國は

右は接續詞にて切る例なり

宮城の群、宮城の里ありとて

源頼朝、弟なる義經、範頼、

庭前の梅花、今をさゝりと

その東よあそびころ、よみてつゝはしなる

名詞にて切る例なり

(二) 第二變化なる、續用段のところにて切る例。

ゆくさきおほく、夜もふけよけき

雪にあろく、水末よふりき

右の下は體言あそびて、直は續るざる用言の續用段にて、切る例なり。

ゆきくゝて、駿河の國はいそそぬ

うつゝの山はいそりて、わがいらむとまる道に、いとくらくほそき

よ、つゝのへてあがり

右の下は體言ありて直は續かざる助辭の續用段にて切る例。

いとあそびころ、ゆくみつのひ給ひけるを

とまるゝころもあく、まゐるあむといへりき

右の下は直は續くべき用言なれども、語の長さものゝ、切る例なり。

時世へて、ひさしくあそびき

まとひ来りきと、あそびけれ

右の下は直は續くべき、助辭なれども、語の長さものゝ、切る例なり。

(三) 第四變化なる、續體段のところにて、切る例。

やふれさる舟のふみよせられたる、ひきあけ
あはるしの君と申す、わのくさありある

右に下は用言ありて直は續かざる用言の續體段にて切る例なり、この例いと少なし。

この山の上はありといふ、瀧見のほらむといひて

右に下體言にて、直は續くべきも、語長きとき、用言續體段にて、切る例なり。

橋の上はあそびたる、車ひく男

右に下體言にて、直は續くべきも、語長きとき、助辭の續體段にて、切る例なり。

まつしき男と見えたる、冬至の日單衣をきて路を歩みけり

下體言にて、直は續くべきも、語を省きて含みたるより切る例なり。

(四) 對語及び疊語にて、切る例。

きこゆれいそつあし、聞ねいくるし

ふして思ひ、おきておげき

右に對語にて切る例なり

思ふをい思ひ、思ふぬをいおもふぬものを

菊の花うつろひさありあるよ、もみちのちくさは見ゆるをり

右に疊語にて切る例なり

(五) 添詞にて、切る例。

ちしやふる、神世の歌の文字も定まらむ

ゆふつく夜、をくらの山

いそのゐみ、ふるき都

右の枕詞にて、切る例あり。

いせの海はへてもあまるたくおこの、おゐき心

大井川くだまいるだのみかれきを、みかれぬ人

あつき弓おして、はる雨

右の序詞にて、切る例なり。

以上の讀の一般は切るべきものを示したるなり。この他は、靜助辭にて切るところいとおほし。されと靜助辭は段階もなきものなれば、その都度々々適宜は切るも可なるべし。

語格問答

問 久、志久の活は、きの音より體言へつゝくべき格なるを、むかし烟、
あるくし夜、同じ心、さゐし女、なといふ例あるは、如何

答 久、志久の活は、斷止段をいひ居て、言は合せて、合言はまる例なれ
む、則ち、この格にあるなり。

問 遠山、廣野、清瀧川、近隣、短夜の類は、常の合言なりや。又常は異な
りや。

答 常は異なり。これ等の皆文久の詞の中にて、久の活あるは、久の活
は、その活音を省きて、體言は合せる格あり

問 萬葉集よりまぐたのねろはかくりあかくだはも國の遠るゝある

めほりせむ」又いかほろのそひのそり原ねもころゝ興をなかね
そまさかしよかば」とある歌の遠む善むとあるいかなる
詞のつゞきざまなるか

答 其の變格良行一格の未然段のからをつゝめて、あといへるもの
なり。即ち遠のむに遠のらむ、善のむに善のらむなり。

問 萬葉集にあをよしならの大路に行きよけとこの山道に行きあ
しかりけり」又くれなゐよころもそめまくほしけどもきてよほ
むや人のしるべく」など、あまたあり。これも行きよけれど、ほし
けれどと辭して然るべきや。

答 然り。但しいつもれも古格と知るべし。

問 其の辭に、續詞段を受くる格なるは、古今集に人ふるす里をいと

ひてこし。かとも「また」さかゆくときもありこし。ものを「また」わの
身世よふるながめせしまよ」など、未然段。あをかけたるは如何。
答 變格詞の承爲の二言は限りて、其の未然段をうくるを以て定格
とす。

問 四段の活詞を、命令の語に用ゐるは如何。

答 已然段のけ、せて、へ、め、れの音を、そのまゝ命令の語とす例へば
「早くゆけ」。「學問を致せ」。「人よ勝て」等のことし。

問 一段上二段下二段等の活詞を、命令の語に用ゐるは如何。

答 何れも未然段。よを副るを例とす。例へば「禮服を着よ」。「善人よ
似よ」。「書をよく見よ」。「早く起よ」。「教を受けよ」等のことし。

問 下二段の活詞を、命令の語に用ゐるは、よを副る例なるは、續紀宣

命^{あま}「おくおもひて」あること止^{とど}とのりたまふ」萬葉集二、まつ
ろぬ國を治跡^{をさめど}「佛足石歌^{ほとけあしうた}、つとめもろく」など、よを副へさ
るに如何。

答 下二段の活詞はかざりて、中古までこの例あり。古今集は、不盡の
ねのならぬ思をもえいもえ「神たよけたぬ空し烟を」順集は、あご
ひする君がとし鷹したかれの野はなをちそとやく手はすゑ
などの例の如し。

問 うつろふ、ちるなどの詞より、體言へ續くべき詞なるは、萬葉は、
奈良の都のうつろふとれば「後撰、よさきちる見ればよひ老は
けり」など、用言へ續きたるに如何。

答 如此例は必まうつろふ、ちる等の下は、をを含みて、見るといふ詞

はつゝくはかざりたる例なり。又古今はありかねのきこゆる空
は月とさる見ゆ又萬葉の星の林はこごゐくる見ゆなど見ゆとい
ふ詞はつゝく時に、がをも含む例なり。

問 せしとあしとの用例如何

答 下二段活詞は、續用段のせの音は、あ^あの辭をかけ、變格活は、未然段
のせの音は、同じくあ^あの辭を係けて、せしといひ、四段活詞は、續用
段のあ^あの音は、あ^あの辭を係けてあしといふ例なり

問 ある人の歌は、天の川わたらぬさきはかちやおくせしとあるに、
可なりや、又否なりや。

答 おくせしとあるに否なり。かくすといふ詞は、四段の活なれば、あ
くしとあるべき格なり。

問 さむ、せむの用例如何

答 四段の活詞は、未然段のきの音は、むの辭をのけて、さむといひ下二段の活詞と、變格の詞といひ、未然段のせの音は、むの辭をのけてせむといふべき格なり。

問 或集は水やあむせむとあるは、可なりや。又否なりや。

答 あむせむとあるは否なり。浴といふ詞は、四段の活なれば、あむさむとあるべき格なり。

問 萬葉四は、あさかみのおもひみだれてかくもかりなぬかこふれぞいぬは見えける」とあり。然るは、こふれとあるは、已然段なるは、此段ほどの係れるは如何。

答 已然段を受くる辭は、ど、や、の等の辭のみありて、どの辭の直

は係ることになきことなれども、此はこふれの下はばを含みて、「こふればど」といふ意なり。

問

煮、似見等ハ一段の活詞にて、らしべきらむ等の辭は、斷止段を受くる辭なれば、此等の辭をのけむとするは、煮る似る見るなどいふべき格なるは、萬葉十一は、春野のうはきつみて煮良志毛、六帖は、松柏のときハ似べき、古今は花とや見らむとあるは、如何。

答

一段の活詞は、第二の音はるを副へて、着る煮る干る見る射る等いへるが斷止段となるは、常の格なれども、るを副へずして、着似干見射といひて、斷止段はなれる例あり。此の如くるを副へざるときは、斷止段を受くる辭の中にて、らしらむべきと四のみかゝる例なり。

問 つるぬる等の辭の、の、が、ぞ、や、の等の係を結ぶ辭なるは、後撰
 は、ふる雪の身のまろ衣打きつゝ春きまけりとおとろかれぬる
 又拾遺は、かしまあるつくまの神のつくく〜とまが身ひとつゝ
 こひをつみつるなど、の、が、ぞ、や、のの係なくて、ぬるつると止り
 たる例あるに如何。

答 これにぬる、つるの下はのをを含みて、おどろかれぬるのあこひ
 をつみつるのあ」といふ意なる格なり。

問 仁徳記は、ころもことふたへもよきさゆどこをならべん君にか
 しころのも」又萬葉集は、わたのそこおきをふゐめておふるも
 もともいまこそこひのすべなき」とあり。こそをきよて結ひたる
 の、いか。

答 その歌のよきあきのよけれおけれの約りたるなり。但しきめ
 て古格なり。

問 有居侍の三言は限りて斷止段をるといひすして、りといふ格
 なるは、このりは斷止段をうくる辭の、ことく〜に係る格なりや。
 ことく〜に係らむと、や、てふ、の三の辭は限りて係る例なり。

答 古今は夏の夜のふすかとすればほとゝぎすなくひとこゑはあく
 るまのゝめ」とある歌の、夏の夜のふすかと續きて、夏の夜がふ
 すぐとく聞えて、甚だ如何なるを、其意いか。

答 このれは跨續の格にて、この歌にては、夏の夜のゝのより、あく
 るまのゝめは跨きてつゞく意なり。萬葉十は、心なき秋の月夜の
 物思ふといのねられぬまてりつゝもとあ」とあるも、月夜の物思

本無

ふ如く聞ゆれども、然らず、秋の月夜のゝのよりい、てりつゝよつ
とく意なるは同例なり。

問

とい斷止段を受くる辭なるは、古今は、春やとき花やおそきとき
ゝわかむ」又後撰はきやどる人やあるとあつかふとあるは、おそ
きある共は續體段にて、斷止段のとを係くるは、誤は似たり。如何。
古今なるは、やの係をおそきにて結びて斷れたる下を受けて下
へつゞけ、後撰なるも、此は同じく、人やのやをあるにて斷れたる
下を受けたるにて、全く續體段とを係けたるはあらす。接續
辭のとなり。

答

問

おむの辭二つあるは差別ありや。

答

未然段を受くるおむは、靜助辭にて願の意となり、續用段をうく

るおむは、おはぬぬるぬれと活く辭のおよりむめと活く辭のむ
はつゝきたるにて、未然をあらけていふ意にて、其辭の意異なり。

問

斷止段の辭は二つある差別如何

答

一は斷るゝや、一は感歎辭のやなり。

問

續體段をうけても、猶やにて斷るゝや。

答

續體段のや、疑辭にて、斷るゝ辭のなり。例へは、ありやあるは
おしやあきのなといふ例なり。

問

續體段の辭は二つある差別如何。

答

一は常のぞにて、係辭なり。一は斷るゝ辭なり。斷止段は、やの二つ
あるは、大方同じ類なり。

問

斷るゝ辭のどの用法は如何。

答 古今は、大ふねのゆたのたゆたは物思ふ頃ぞ」又、名はめでゝをれるむかりぞ」後撰は、たれまつむしのこゑはまよふぞ」等のことし。

問 けらしあらしゝあらしゝあらし等の辭は、何れの段をうくるや。

答 けらしは續用段、あらしは續體段、并は體言をうけ、あらしは久、志久の活をうけ、あらしは續用段をうくる例なり。

問 右四の辭は、全圖の面は見えさるゝ如何。

答 素一の辭はあらざれば、別は全圖の面はあらざるなり。

問 然らば、いかなる辭なるか。

答 けらしはけるらし、あらしはあるらし、ゐらしはゐるらし、あらしはあるらしにて、るらの約りたるなり。

問 續用段助辭の中は、な、に、ぬ、ぬる、ぬれといふ動助辭あり、そのぬれのところは、ぬあり。ぬれとぬと差別ありや。

答 ぬれはこそその係を結ぶ助辭となり、又む、ど、や、ゐの辭にてうくる時に、已は然る意となり、ぬは、命令詞となる例なり。則ち後撰はひからしのかゑをこひしみけぬべくばみやまほとりよもやもさねかし」とあるも、ぬは命令詞のぬしをかけたるなり。

問 古今は、春霞たてるやいつこみよしれゝよしのゝ山は雪はふりつゝとあり。然るは、やの係をつゝにて結びたるごときは、誤れるは似たり、如何。

答 このやの係をつゝにて結びたるはあらむ、やの係はいづこにて結べるなり。古今は、たまたれのをかめやいづらぬしやたれ」な

どいづく、いづれ、いづこ、たれなど、やの係を疑問の代名詞にて結べる一例あり。

問 感嘆詞のよ、續體段に係る辭なるは、思へむよと、斷止段に係りたるは如何。

答 感嘆辭のよ、續體段をうくるは普通の例なれども、む、ぬ、ね、と活く辭はかぎりて、ぬよ、といひむして、むよ、といふ例なり。

問 古今は、見てもまたまたも見まくのほしければ云々拾遺は、和田の原よせくる浪のまむくは見まくのほしき玉つしまかもなと、まくのとつゝきたるは。例は異なるは似たり。然るにまくの續體段なるは、體言所屬の辭なるの、係れるは如何。

答 まくむの延りたるはてむことのといふ意にて、むの下はこと

といふ意の含りたるなり。見まくのほしきむ見むことのほしきといふ意なり。

問 まゐとまがとの差別は、如何。

答 まかと清みていふかたは、續體段をうくる辭にて、けきしゐと活く辭にて、過去の意、まがと濁りていふかたは、同く續體段をうくる辭なれども、靜辭にて、願の意なり。

問 ましとまじとの差別如何。

答 ましと清みていふかたは、未然段をうくる辭にて、自身の上は將は然爲むといふ意、まじと濁りていふかたは、斷止段をうくる辭にて、他を推量する辭にて、異なり。

問 古今は、白雲のこなたかなたは立わかれ心をぬきとくだくたひ

かな」又、立かへりあわれと思ふよそよても人よこころをおき
つしら浪」とある中よて、立わかれとあるは、下二段の活詞よて、
續用段なるは、心と體言よつゝき立かへりとあるは、四段の活詞
よて、これも同じく續用段なるは、あそれと體言よつゝきたるは、誤
れるは似たり、格あることよや。

答 かゝるところよてを舍む格ありて、立列れて心をぬきとくたく
といひ、次なるは立かへりてあそれと思ふ」といふ意よなれり。

問 むやの辭は何れと何れの段をうくるや。

答 未然段と已然段とをうくる辭なり。

問 未然段をうくると、已然段をうくるとい、その意異なりや。

答 未然段をうけたるは、願の意、已然段を受けたるは、その已は然る

を疑ふ意となる。例へは、行かむや行キタイコトヤといふ意、行
けむや行クエテアラウカといふほととの意なり。

問 あどの係はあるや。

答 あどの係は同じ。拾遺はあど時のまも見ねばこひしき」新
古今はあど我こひのふちせともあき」又あど我やとよひとこゑ
もせぬ」等のことし。

問 いくたれいゝいづれいつく等の係はなるや。

答 右等はいづれも係はならむ、たれいゝいづく等の下はあぞ等
の辭を合せて、たれあたれぞいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
ふとき、そのあぞ等の係はなれるよて、これらの辭をもらされ
は、係はならむ。

問 その例證如何。

答 古今はいくよしもあらしわか身を云々又、たれゆゑはみたれぞめ

よしわれならなくよ」後撰は、思ふてふことのよいあはなつかし
な「萬葉は、されきゝつこゆなきわたる云々」など、その例多し。又の
ぞの副なりたるは、拾遺は、石見瀉あはれつらき」後撰は、あま
りておどろ人のこひしき」和歌所歌合は神代よりいくよあへ
よし」詞花は、あふよといたれあはらぬ」古今は、いつあは雪の
きゆるときある」等のことし。

問 ある人の歌は春にまゝ淺瀬の水やこぼるらむ河邊の小草もゆる

ともおしとあるは、格はあへりや。

答 もゆるともなしと」あるは誤なり。もゆるは下二段の活詞にて、續

體段あり、との斷止段をうくる辭なれば、もゆるともといつゝの
ぞ、もえぬともとあるべきところなり。

問 ある人の歌は、きからせし春の衣をぬきあへてまゝしも春はと
あれぬるあか」とあるは、格はかなへりや。

答 きならせし」とあるは誤なり。馴は四段の活詞にて、續用段のあら
しより、その段のしの辭をのけて、きからしといふべき格なり。
ある人の歌は、おいらくの身にあさいせぬならぬせをつとめて
とのみ人のいふらむ」とあるは、格はあなへりや。

問 答 ならぬせ」とあるは誤なり。おらぬせは下二段の活詞にて、他は然
せざる意なれば、人は令習こととなりて、いかゞ、こゝは四段の
活はならぬしといふべきところなり。

問 ある人の歌は、あひなきや學のまどのあけやらであるよふけゆ

くともしびのあけ」とあるは、格よのあへりや。

答 あひなきや」とあるは、誤なり。このやの歎息のやあれは、斷止段をうけて、あひなきやといふべきところなり。

問 ある人の歌は、くまもなくかたりつくせしよひの雨のふりぬることをたれあつたへし」とあるは、格よのあへりや。

答 つくせし」とあるは誤なり。盡ツグといふ詞は、四段活の詞なれは、つくしと續用段を、同段のしよてうけて、つくしといふべき格なり。

問 ある人の歌は、あくるゝやいのよと見れはふしのねのあたりの月もたあくるくらむ」とあるは格よのあへりや。

答 あくるゝや」とあるは格よかなとむ。あくるゝは下二段の活詞の

續體段なれは、同段のあはの辭よてうけて、あくるゝとあるべき格なるをや。

問 ある人の歌は、もちゝあみ高根の雪やさゆるらむては日はまさるふしの川水」とあるは、格よかなへりや。

答 きゆるらむ」とあるは誤なり。きゆるは下二段の活詞の續體段なるは、斷止段を受くるらむよて受けたるは、違へり。きえぬらむとあるべきところ。

問 ある人の歌は、みゆきせしきる山松のふのみとりちとせふるともいやさるふらし」とあるは、格よかなへりや。

答 ふるとも」とあると、さかふらし」とあると、二所誤れり。經ツグは下二段活詞の續體段なるは、斷止段をうくるとを以て受けたるは誤

なり。又榮サカエに下二段の活よて、さのえさのゆといひて、さのふといひとさるなり。

問 ある歌集の詞書は、ある人いまくとなりておのれは歌ひとつこひよおこしたるよりてつゝおんける」とあるに、格よかなへりや。

答 おこしたる」とあるに誤なり。おこせたとあるべき格なり。下二段よて、四段よ用例なし。

問 ある人の歌はさくらさく遠山もとの里人も田は立ちつかることやなからむ」とあるに、格よかなへりや。

答 つかることや」とつゝきたるが誤なり。つかると下二段活よて、つかること」とあるべき格なるをや。この歌は、萬葉七の旋頭歌は

春日をら田は立ちつかる」君はしもわかきをつまなき君か田

はたちつかる」とあるをとれるなれども、この歌は立ちつかる」と

いひをさめて、こゝよて切れて、更は君はしもと起したるを、ある

人のに立ちつかることゝつゝきたれば誤なり。

問 ある人の歌は、きのふまで氷のあめし小山田を春はまゐせる水のこゑのふとあるに格よかなへりや。

答 まゐせるとあるが誤なり。任マカスに下二段の活詞よて（まかする水とつゞく格なり。

問 ある人の歌は、おち葉してあらはなりし榮の戸を思ふまゝも打あられぬ」とあり。格よかなへりや。

答 おち葉してとあるにいみじきひかことなり。爲ナ而ナといふ詞は、落

樂といふが如き、體言の下はつゞくべき詞はあらむ。

問 ある人の歌は、長月の月の盛はまたもみむまたさきみちぬあら
さくの花」とあるは、格はかなへりや。

答 みちぬとあるは誤なり。満は四段の活はて上二段はとたらきた
る例なけれは、みたぬとあるべき格なり。またおなじ人の歌は、「し
ねみつるまさこか上のみたれものまたひくかたよなひきぬるの
お」とあるも同じ誤なり。

問 ある人の歌は、山川のきしをひたりてゆく水はぬるてのもみち
ちらぬ日そなき」とあるは、格はかなへりや。

答 ひたりて」といふ詞誤なり。ひたりては岸のひたることとなれり。
この歌はては、水の岸をひたすことなれは、ひたしてとあるべし。

問 ある人の歌は、何ことをつげのまくらぞさゝの樂のさゆる霜夜

はわれをねさゝぬ」とあるは、格はかなへりや。

答 ねさゝぬ」といひみしき誤なり。ねさせぬとあるべし。

日本文典終

明治二十三年四月二十二日
 明治二十三年四月十三日
 明治二十三年四月十三日
 明治二十三年四月十三日
 印刷出版
 三再出印

正價金七拾錢

版權所有

著者 落合直文

著者 小中村義象

發行所 大橋新太郎
東京日本橋區本町一丁目十二番地

發行所 日本堂
東京日本橋區本町三丁目十六番地

發賣書肆 博文館
必昇社印行

大 賣 捌 所

前上同松長高大氷佐八同橫甲濱同名神奈同京
 諏 本 野 山 津 戸 倉 子 濱 府 松 屋 戸 良 都
 橋 訪

煥	宮	松	高	島	升	澤	川	吉	熊	里	九	內	谷	片	三	吉	坂	飯	便
坂	榮	榮	美	津	屋		又	田	澤	見	屋	藤	島	野	輪	岡	田	田	利
手	日	堂	書	協	重	一	銀	傳	傳	亭	書	傳	源	東	文	支	一	信	堂
堂	新	榮	店	和	兵	二	藏	左	四	太	店	右	三	四	次	店	郎	文	堂
	堂	吉		堂	衛	郎		衛	郎	郎		衛	郎	郎	郎				

同同同秋同米同山入同青盛登石福平同枋高前
田澤形戶森岡米卷島木崎橋

成	鈴	片	本	素	須	荒	八	浦	野	鎌	東	宮	山	萱	清	城	宮	煥	文
見	木	谷	間	月	佐	井	文	山	崎	田	北	崎	口	間	光	山	川	平	江
清	秋	同	金	晨	權	太	字	政	支	商	堂	新	德	左	書	常	庸	三	堂
兵	穗	盟	之	平	平	四	屋	吉	店	店	堂	七	之	右	籍	次	郎	郎	堂
衛	堂	堂	助			郎						郎	助	太	店	郎	郎	堂	堂

特 別 大 賣 捌 所

大坂同同同同京同名神熊仙同弘同長水金
都古屋戸本臺前岡原澤

雲	西	大	宮	野	佐	木	長	熊	川	大	東	岡	松	梅	柳	吉
根	村	橋	本	崎	勘	村	崎	谷	瀨	黑	枝	島	村	原	原	岡
堂	六	書	甚	九	書	文	次	鳩	代	屋	律	眞	九	龜	喜	平
山	平	房	衛	衛	店	助	郎	居	助	舖	房	七	衛	七	衛	助
口	松	廣	岡	大	博	同	長	岡	鹿	松	長	同	甲	靜	津	四
	江	島	山	分	多	崎			兒	本	野		府	岡		日

伊藤善太郎	河島九右衛門	廣瀨市藏	柳正堂源太郎	五明堂正八	西澤喜太郎	水琴堂	富山仲吉	吉田幸兵衛	鶴野書店	安中半三郎	林斧助	山川正三郎	武內彌三郎	松村善助	川岡清助	清水一二三堂
-------	--------	------	--------	-------	-------	-----	------	-------	------	-------	-----	-------	-------	------	------	--------

大 賣 捌 所

酒 橫 福 同 武 小 七 富 同 高 同 新 同 長 同 高 同 村 三
 田 手 井 生 松 尾 山 岡 瀉 岡 田 上 條

新 田 目 金 太 郎
 鈴 木 喜 八 郎
 大 澤 忠 四 郎
 品 川 太 右 衛 門
 武 內 市 藏
 安 立 庄 三 郎
 宇 都 宮 源 平
 大 明 來 書 堂
 清 海 書 堂
 中 田 明 書 堂
 學 海 書 堂
 車 次 郎
 林 富 次 郎
 櫻 井 治 平
 上 田 屋 十 郎
 目 黑 直 三 郎
 室 橋 直 三 郎
 高 橋 直 三 郎
 備 前 屋 書 舖
 廻 口 書 舖

三 相 鳥 同 津 和 偉 高 久 中 大 佐 鹿 函 同 江 小 札 同 根
 條 川 取 山 山 島 知 米 津 分 賀 島 館 差 樽 幌 室

野 島 橫 山 本 科 井 井 坂 澤 菊 野 甲 河 山 魁 愛 辻 白 前 津 伊
 島 野 山 本 科 井 井 坂 澤 菊 野 甲 河 山 魁 愛 辻 白 前 津 伊
 長 半 安 次 吉 久 文 萬 駒 儀 曆 治 正 新 文 汲 元
 七 藏 郎 郎 造 助 吉 吉 平 三 堂 治 社 軒 堂 店 發 助 郎
 直 三 郎

中等
白本文典

全

森合直文
小中村義象

